臼田町埋蔵文化財調査報告書第7集

宮東・大工原遺跡

―― 平安時代中期小鍛冶集落の調査 ――

平成5年6月

長野県南佐久郡臼田町教育委員会

1　H 5 号住居址出土土器

2　大工原遺跡調査区全景

序

臼田町教育委員会
教育長　新　津　真　澄

新海三社神社の東南方宮東遺跡ならびに大工原遺跡の所在する一帯は、南面山麓緩傾斜地で、昭和62年12月浅間テクノポリス開発が承認されたのを契機に、その支援事業の一環として、団地造成に着手した地籍でもある。臼田町土地開発公社は、平成元年の理事会で、地権者の土地売り渡し意向の打診を決定し、それぞれの手順を経て、平成４年買収契約を結んだ。その後直ちに、埋蔵文化財調査予定地７７９７平方メートルの発掘を開始して、7月すべての調査を終了することとなった。

宮東遺跡で検出された住居址は合計８軒で、平安時代中期前半の単一集落である。また、遺物として有孔石斧があったので、縄文時代中期後半と後期の複合した遺跡である。発掘にあたっては、岩石・礫を含んだ泥流で床面が流されている場所も広く、困難をきわめたと聞いている。この集落は、出土した鞴の羽口、鉄器（鎌・刀子他）、鉄塊、銹を見ても、小鍛冶の技術を持った集団で、山崩れの顕著な住居址をはじめ泥流におし流されることなく無事残って床面に多くの坏、埦など完全な形で出土したものもあった。また、出土した鉄器は、稲作文化の伝播とともに、関東、東北にも広まり、当時鉄器の普及がもっとも盛んであった群馬県から田口峠を越えて佐久地方におよんだものであろう。

なお、大工原遺跡は、縄文時代の土壙、台石、柱穴群も検出されたが、調査区域が狭かったために十分な究明が出来なかった。

いずれにしても、新海三社神社周辺一帯は、古墳、遺跡も多く埋蔵文化財にも恵まれているので、今後とも注目したいところである。終りに、この発掘調査にあたられた島田恵子主任調査員をはじめ、すべてにわたってご協力いただいた方々のご労苦に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成五年（1993）　3月20日

例　　　　言

1．本書は、長野県南佐久郡臼田町大字田口字宮東2363番地外に所在する、原遺跡・大工原遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、臼田町土地開発公社の住宅地造成計画に先だって、公社より委託を受けた臼田町教育委員会が実施した。

3．本調査は、長野県考古学会員三石延雄を団長とし、南佐久郡誌刊行会の全面的協力のもとに、佐久考古学会員、地元田口地区の方々、文化財調査委員会の協力を得て実施した。

4．報告書作成の整理作業分担は、以下の通りである。

現場遺構実測図作成――三石延雄・佐々木春蔵・柳沢春子・柳沢幸恵・島田恵子

遺構実測図の整理・トレース――島田恵子

遺物の洗浄・註記――佐々木春蔵・柳沢幸恵・柳沢春子・丸山静江・黒沢はるの・有井忠雄・上原鐳三・島田恵子

土器の接合・復元――島田恵子・佐々木春蔵

土器の実測・トレース――島田恵子

石器の実測・トレース――吉沢　靖

土器の拓本――上原鐳三

図版作成――島田恵子

5．本書の執筆は下記により分担した。尚、文責は文末に明記してある。

第１章　第１節・２節を調査事務局酒井順一、第３節を島田恵子

第２章　第１節を伴野拓也、第２節を三石延雄、第３節を沖浦悦夫

第３章　島田恵子

第４章　三石延雄・吉沢　靖・島田恵子

第５章　上原鐳三・島田恵子

第６章　島田恵子

6．本書に掲載した遺構・出土遺物の写真は、島田が撮影したものを使用した。

7．本書の編集は島田が行い、三石延雄団長が校閲・監修した。

8．本遺跡の資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されて、臼田町文化センターに展示されている。町民の皆さんに広く活用していただきたい。

尚、調査中は地主さんはじめ地元の方々に物心両面にわたり、あたたかいご援助とご協力を賜り感謝申しあげます。また、報告書作成にあたり、南佐久郡誌刊行会、ヒカリ堂カメラ店の新津きみえ氏にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

凡　　例

1　各遺構の略号は、次のとおりである。
平安時代住居址――H　　土　坑――D　（墓と判明したものは、土壙と記した）

2　住居址の記述は、検出位置とその状況――平面形態――主軸方位――壁高――覆土――床面――ピット――カマド――その他施設――出土遺物の順に行った。

3　遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。（挿図中にスケールを付し、縮尺を明示した）
住居址――1/60　　カマド――1/30　　土　坑――1/30

4　遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。（挿図中にスケールを付し、縮尺を明示した）
土　器――1/3　　石器類――1/3　　鉄　器――1/3　　石　鏃――4/5

5　図版の遺物の縮尺は、次のとおりである。
土　器――1/3　　石器類――1/3　　石　鏃――4/5

6　住居址実測図の中のスクリーントーンは、カマドを示す。

7　土器実測図中の黒点のスクリーントーンは、内面黒色土師器を示し、他は灰釉陶器の釉をあらわす。また、須恵器は器厚断面を黒く塗りつぶした。

8　水糸レベルは、各遺構ごとに明記した。

9　写真図版中では遺物番号を簡略化した。例えば、第8図1は8－1とした。

10　出土土器一覧表の法量は、上段は口径、中段は器高、下段は底径を示し、一は不明、（　）は推測値をあらわす。

本報告書作成にあたり、千葉県埋蔵文化財調査事業団の穴澤義功先生、長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所の臼田武正、寺島俊郎両先生には、貴重なご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

本　文　目　次

題　字 ……………………………………………… 臼田町教育長　新津真澄
序 ……………………………………………… 〃
例　言
凡　例
本文目次　付表目次
挿図目次　図版目次
第1章　発掘調査の経緯 ……………………………………1
第1節　調査に至る動機 ……………………………………1
第2節　発掘調査の概要 ……………………………………1
第3節　発掘調査日誌 ……………………………………2
第2章　遺跡の環境 ……………………………………7
第1節　宮東・大工原遺跡周辺の地質 ……………………………………7
第2節　考古学的環境 ……………………………………10
第3節　歴史的環境 ……………………………………14
第3章　層　序 ……………………………………20
第4章　遺構と遺物 ……………………………………21
1　住居址 ……………………………………21
1）H1号住居址 ……………………………………21
2）H2号住居址 ……………………………………31
3）H3号住居址 ……………………………………35
4）H4号住居址 ……………………………………42
5）H5号住居址 ……………………………………44
6）H6号住居址 ……………………………………57
7）H7号住居址 ……………………………………60
8）H8号住居址 ……………………………………62
2　土　坑 ……………………………………70
1）D1号土坑 ……………………………………70
2）D2号土坑 ……………………………………70
3）D3号土坑 ……………………………………71
4）D4号土坑 ……………………………………74

5）Ｄ５号土坑 ……74
3　掘立柱建物址 ……75
4　宮東遺跡出土鉄器 ……76
5　宮東遺跡出土鞴羽口 ……76
6　宮東遺跡グリッド出土土師器 ……77
7　宮東遺跡出土縄文時代の遺物 ……78
1）土　器 ……78
2）石　器 ……79
第5章　大工原遺跡の遺構と遺物 ……82
1　土　壙 ……83
1）Ｄ６号土壙 ……83
2　祭壇状の台石 ……87
3　柱穴群 ……89
第6章　考　　察 ……91
1　遺　構 ……92
2　遺　物 ……95
3　大工原遺跡 ……100
引用参考文献 ……101
あとがき ……102

挿　図　目　次

第１図　宮東・大工原遺跡地形図及び発掘区設定図 ……………………………… 6
第２図　周辺遺跡分布図 ……………………………………………………………11
第３図　宮東遺跡調査Ｉ区検出遺構全体図 ………………………………………18
第４図　宮東遺跡調査Ⅱ区検出遺構全体図 ………………………………………19
第５図　宮東遺跡層序模式図・大工原遺跡層序模式図 …………………………20
第６図　Ｈ１号住居址実測図 ………………………………………………………22
第７図　Ｈ１号住居址カマド実測図 ………………………………………………23
第８図　Ｈ１号住居址出土土器実測図No.１ ………………………………………24
第９図　Ｈ１号住居址出土土器実測図No.２ ………………………………………25
第10図　Ｈ１号住居址出土土器実測図No.３ ………………………………………24
第11図　Ｈ１号住居址出土土器実測図No.４ ………………………………………27
第12図　Ｈ２号住居址カマド実測図 ………………………………………………31
第13図　Ｈ２号住居址実測図 ………………………………………………………32
第14図　Ｈ２号住居址出土土器実測図 ……………………………………………33
第15図　Ｈ３号住居址実測図 ………………………………………………………36
第16図　Ｈ３号住居址出土土器実測図No.１ ………………………………………37
第17図　Ｈ３号住居址出土土器実測図No.２ ………………………………………38
第18図　Ｈ３号住居址出土土器実測図No.３ ………………………………………39
第19図　Ｈ４号住居址実測図 ………………………………………………………42
第20図　Ｈ４号住居址出土土器実測図 ……………………………………………43
第21図　Ｈ５号住居址実測図 ………………………………………………………45
第22図　Ｈ５号住居址カマド実測図 ………………………………………………46
第23図　Ｈ５号住居址出土土器実測図No.１ ………………………………………47
第24図　Ｈ５号住居址出土土器実測図No.２ ………………………………………48
第25図　Ｈ５号住居址出土土器実測図No.３ ………………………………………49
第26図　Ｈ５号住居址出土土器実測図No.４ ………………………………………50
第27図　Ｈ５号住居址出土土器実測図No.５ ………………………………………51
第28図　Ｈ５号住居址出土土錘・臼玉実測図 ……………………………………52
第29図　Ｈ５号住居址出土遺物状態図 ……………………………………………56
第30図　Ｈ６号住居址実測図 ………………………………………………………57

第31図　H 6 号住居址出土土器実測図 ……58
第32図　H 7 号住居址実測図 ……60
第33図　H 7 号住居址カマド実測図 ……61
第34図　H 7 号住居址出土土器実測図 ……61
第35図　H 8 号住居址実測図 ……63
第36図　H 8 号住居址カマド実測図 ……64
第37図　H 8 号住居址施設実測図 ……65
第38図　H 8 号住居址出土土器実測図No. 1 ……66
第39図　H 8 号住居址出土土器実測図No. 2 ……67
第40図　H 8 号住居址出土石器実測図 ……67
第41図　H 8 号住居址出土遺物状態図 ……69
第42図　D 1 号・D 2 号土坑実測図 ……71
第43図　D 3 号土坑実測図 ……72
第44図　D 3 号土坑出土土器実測図 ……72
第45図　D 4 号土坑実測図 ……73
第46図　D 5 号土坑実測図 ……74
第47図　掘立柱建物址実測図 ……75
第48図　宮東遺跡出土鉄器実測図 ……76
第49図　宮東遺跡出土鞴羽口実測図 ……77
第50図　グリッド出土土師器実測図 ……78
第51図　宮東遺跡出土縄文土器実測図 ……78
第52図　宮東遺跡出土石鏃・装飾品実測図 ……79
第53図　宮東遺跡出土縄文時代石器実測図 ……80
第54図　大工原遺跡調査区検出遺構全体図 ……82
第55図　D 6 号土壙実測図 ……83
第56図　D 6 号土壙出土土器拓影図 ……84
第57図　D 6 号土壙出土石器実測図 ……86
第58図　大工原遺跡祭壇状台石出土状態実測図 ……87
第59図　大工原遺跡柱穴群実測図 ……89
第60図　柱穴群出土土器実測図 ……90
第61図　宮東遺跡出土土器集成図No. 1 ……96
第62図　宮東遺跡出土土器集成図No. 2 ……97
第63図　宮東遺跡出土土器集成図No. 3 ……98

付　表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表 ……12
第2表　H1号住居址出土土器一覧表 ……28
第3表　H2号住居址出土土器一覧表 ……34
第4表　H3号住居址出土土器一覧表 ……40
第5表　H4号住居址出土土器一覧表 ……44
第6表　H5号住居址出土土器一覧表 ……53
第7表　H6号住居址出土土器一覧表 ……59
第8表　H7号住居址出土土器一覧表 ……61
第9表　H8号住居址出土土器一覧表 ……68
第10表　D3号土坑出土土器一覧表 ……73
第11表　グリッド出土土器一覧表 ……78
第12表　宮東遺跡検出住居址一覧表 ……91

図　版　目　次

図版一　1．宮東遺跡調査Ⅰ区全景　2．宮東遺跡調査Ⅱ区全景
図版二　1．H1号住居址　2．H1号住居址遺物出土状態
図版三　1．H1号住居址カマド　2．H1号住居址遺物出土状態
図版四　1．H2号住居址　2．カマド周辺の甕破片出土状態
図版五　1．H3号住居址　2．H3号住居址遺物出土状態
図版六　1．H4号住居址　2．D3号土坑
図版七　1．H5号住居址検出区全景　2．H5号住居址付近の礫流れ込み状態
図版八　1．H5号住居址の礫流れ込み状態　2．H5号住居址検出面
3．H5号住居址焼土　4．H5号住居址礫流れ込み状態
図版九　1．H5号住居址遺物出土状態
図版十　1．H6号住居址　2．H6号住居址遺物出土状態
図版十一　1．H7号住居址　2．H7号住居址カマド
図版十二　1．H8号住居址　2．H8号住居址遺物出土状態　3．H8号住居址カマド
図版十三　1．掘立柱建物址
図版十四　1．D1号土坑　2．D2号土坑　3．D4号土坑

図版十五　1．大工原遺跡調査区全景　2．大工原遺跡D6号土壙
図版十六　1．D6号土壙　2．D6号土壙完掘状態
図版十七　1．大工原遺跡祭壇状台石出土状態　2．祭壇状台石
図版十八　1．大工原遺跡柱穴群全景　2．柱穴群
図版十九　1．H1号住居址出土土器No.1
図版二十　1．H1号住居址出土土器No.2
図版二一　1．H1号住居址出土土器No.3
図版二二　1．H2号住居址出土土器　2．H4号住居址出土土器
図版二三　1．H3号住居址出土土器No.1
図版二四　1．H3号住居址出土土器No.2
図版二五　1．H5号住居址出土土器No.1
図版二六　1．H5号住居址出土土器No.2
図版二七　1．H5号住居址出土土器No.3
図版二八　1．H5号住居址出土土器No.4
図版二九　1．H6号住居址出土土器　2．H7号住居址出土土器
図版三十　1．H5号住居址出土の土錘　2．H8号住居址出土土器No.1
図版三一　1．H8号住居址出土土器No.2　2．D3号土坑出土土器
図版三二　1．宮東遺跡出土の鞴羽口　2．宮東遺跡出土の鉄器・鉄塊・銅・鉄鐸
図版三三　1．宮東遺跡グリッド・表採・住居址出土の土器・石器・装飾品
図版三四　1．大工原遺跡D6号土壙出土遺物
図版三五　1．H8号住居址出土の台石　2．埦底部　3．暗文土器
4．さまざまな底部糸切り痕　5．宮東遺跡表面採集の茶臼
図版三六　1．発掘調査スナップ

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る動機

宮東遺跡は、田口宮代新海三社神社東方に南面する山麓緩傾斜の日当たりのよい段丘上に、また大工原遺跡は、宮東遺跡に隣接する東側団丘下の台地にあり、縄文・古墳から平安・中世時代にかけての遺跡であります。

現状は畑作地であるが、見晴し、日当りがよく、付近一帯に遺跡が分布しています。

今回の調査は、臼田町土地開発公社の宮東地籍における住宅地造成計画に伴い、現地一帯は遺跡包蔵地であり、遺跡が破壊される恐れがあることから、土地開発公社・町教育委員会・調査団の三者で協議した結果、記録保存のため緊急発掘調査を実施する運びとなった。（事務局）

第２節　発掘調査の概要

○ 遺　跡　名　　宮東遺跡・大工原遺跡

○ 所　在　地　　長野県南佐久郡臼田町大字田口字宮東2363番地　他

○ 発 掘 期間　　平成４年６月５日～平成４年７月31日

○ 調査委託者　　臼田町土地開発公社　理事長　丸山　佐市

○ 調査受託者　　臼田町教育委員会

○ 調査に関する事務局

新津　真澄	臼田町教育委員会		教　育　長
宮沢　俊雄	〃	〃	総務教育課長
酒井　順一	〃	〃	社会教育係長
北原　佐久生	〃	文化センター館　長	

○発掘調査団組織

団　長	三石　延雄（長野県考古学会員）
担当者	島田　恵子（長野県考古学会員・南佐久郡誌刊行会常任編纂委員）
調査員	佐々木春蔵、吉沢　靖（長野県考古学会員）
調査補助員	上原　錨三（佐久史学会員）　有井　忠雄（小海町誌編纂委員）
地形・地質・石質指導	伴野　拓也（中込小学校教諭）
協力者	柳沢　幸恵、柳沢　春子、丸山　静江、黒沢　はるの、井出　みね子 加藤　ハナ、青木　とし子、細谷　みつ江、（以上地元協力者）

沖浦　悦夫（臼田町文化財調査委員長）、北村　碩男（副委員長）
中沢　清、高柳　博充、岩松　昭二、三石　新一郎、志摩　一夫
小林　勇（以上文化財調査委員）
田口小学校六年二組の皆さん（小嶋　仁教諭）、井出　新吾、梅香　勝、
依田　栄絵、井出　恵子、竹内　大起　（以上田口地区児童の皆さん）

第３節　発掘調査日誌

○６月５日（金）くもり時々雨　天気が心配されたがバックホーその他全て手配済みなので本日から発掘調査を開始する。遺跡が広いため先ず遺構の存在を確認するためにバックホーで畑毎にところどころ表土削平を行なって試掘を行なう。同時にテントを設営し、器材を搬入する。

午後になって雨が時々降る。りんご畑で表土削平を行なうと黒色の落ち込みらしきところと土器片が２～３点見つかったので、一帯を表土削平することにして、バックホーのあとを追って確認作業に入る。しかし、粘性の強い地山層に礫が多量に混入していて草かきの刃がはじかれてしまう。その上粘土が足元にはり付いて動くことも自由にならない。明日からの作業が思いやられる。

○６月６日（土）　はれ　昨日の続きを表土削平する。田口地区の協力者の方は昨日の作業でこりてしまったのか誰も見えない。本日は住居址３軒確認する。しかし、このプランはだいたいの輪郭である。とに角、今日のように晴れるともう土はコチコチになり、ますます草かきがはじかれて刃がたたない。力を入れなければならず腰が曲らなくなるようにしんどく、半日でくたくたになる。一面黒色土であってきちんと住居址プランをだすことはとうてい困難であることがわかりあきらめる。

○６月８日（月）くもり　朝八時に雨が止んだので予定通り、地鎮祭をとりおこなう。教育長さんはじめ事務局の皆さんが参加して、調査団で新海神社の伴野神官さんをお願いし、調査区の地鎮と調査団の安全を祈願する祭司をとりおこなう。

終了後再びプラン確認を行い、新たに２軒の住居址を検出する。午後から隣の調査Ⅱ区に入る。

○６月９日（火）　くもりのち晴　Ⅱ区は傾斜が強く上段は黄色の地山層が顕著に現れているが、その中にわずかに黒色土の残っている部分がある。土器の出土もあり住居址となりそうであるがとに角半分以上が壊れている。半面下段の西南側は全面黒色土でプランがつかめない。プラン確認の作業中長さ４㎝、巾３㎝大の大形石鏃が出土する。夕方、大工原遺跡の表土削平に入る。

○ 6月10日（水）くもり　大工原遺跡の表土削平とプラン確認を行う。上段に立石らしき形の整った安山岩を伴った土壙が検出される。また、神社に関係あると考えられる柱痕を刻んだ35㎝の正方形の台石が2個出土する。バックホーは本日で終了。

○ 6月11日（木）くもり時々晴れ　大工原遺跡の南側のプラン確認を行う。柱穴らしき穴が多数検出された。中には炭化材が表面にのっている柱穴もみられる。ひとまずシートをかぶせて最後に調査することにして、宮東遺跡の住居址の掘り下げに入る。

○ 6月12日（金）はれ　暑い日となる。H1号住居址掘り下げ続行、完形の小形坏2個体出土する。上段の黒色の部分をトレンチで試掘する。巨石の流れ込んでいた部分はトレンチがカマド跡とおもわれる焼土の部分にぶつかる。また、土坑3基検出した北西側の最上段部からは、礫の間から坏完形品・須恵器壺破片が出土する。

田口地区の小学校6年生がお手伝いに来る。

○ 6月13日（土）はれ　H1号、H2号住居址掘り下げ続行。H1号からふいごの羽口が出土する。住居内に鍛冶の施設があったと考えられる。粘土に礫が混入し掘り下げもしんどい。H2号住居址は大きな石が床面に入り込んでいて破壊著しくプランがよくつかめない。H3号住居址と土坑の掘り下げに入る。

○ 6月16日（火）はれ　H1号住居址床面、壁精査をする。なかなか壁がはっきりしない。東側カマドとなる。H2号住居址セクションをとりベルトをはずす。

○ 6月17日（水）はれのちくもり　土坑仕上る。清掃して写真撮影を行う。

○ 6月18日（木）くもり　H1号住居址ほぼ床面まで掘り下げたが北西側の壁がはっきりしない。精査の結果拡張の必要があると判断して拡張に入る。H2号もかなり複雑で住居内への礫流れ込みが多く床面がどこなのかわからない。H3号住居址も山崩れによる泥流の流れ込みがあり大きな石が南東側に集中している。つば釜の破片が出土する。

○ 6月19日（金）はれ　H1号住居址西南側の壁やっと完掘。鉄の塊りが壁際の落ち込みから出土する。南壁下に深い周溝があった。H2号住は精査と仕上げに入る。

H3号住居址はセクションをとりベルトをはずす。灰釉陶器の壺完形品出土する。釉見られないので灰釉なのか疑問。鉄斧の柄ようなものも出土する。

○ 6月20日（土）くもり　寒い日であった。H4号住居址掘り下げに入る。巨石が床面下にくいこんでいることとその周囲に砕けた石屑があり、先ず石屑を取り除くことからはじめる。H1号住はピットの検出、周溝仕上、床面清掃。H3号住は床面精査、柱穴の検出、床面の落ち込み部分を掘り下げる。

○ 6月22日（月）はれ　H1号住、H3号住は柱穴掘り下げ、精査、仕上げ、清掃までを行う。H4号住掘り下げ続行。掘立柱の掘り下げに入り仕上げまでを行う。

Ｉ区のグリッド設定を開発公社の高見沢技師が行う。教育委員の皆さん見学に訪れる。

○６月23日（火）はれ　Ｉ区の残りの掘り下げを皆で行い、その後全体の清掃に入る。石が多くなかなかきれいにならない。水まきを行った順から写真撮影をし、Ⅱ区に入る。

○６月25日（木）Ⅱ区トレンチ掘り続行・本日は近くの石尊さんを高橋英男教育委員さんに案内していただく。岩に彫刻された仏像で、明和三年戌六月吉日、当村願主藤左衛門と印されていた。不動尊像ではっきりした彫りの磨崖仏である。貴重な資料であるとおもわれる。

○６月26日（金）はれ　暑い日であった。トレンチを南北、東西の十文字に掘ったが住居址らしい落込みが見あたらず、黒色土の部分を拡張する。西南部分から鎌、灰釉埦、坏20個体が完形品、あるいはそれに近い状態で出土する。縄文中期後半土器片、石鏃も混入している。10cm～30cm大の礫もたくさん入り混っていて山崩れによる流れ込みがひどい。ふいごの羽口が出土する。ほぼ完形である。

○６月27日（土）はれ　トレンチ拡張続行。上段の掘り下げに入ると礫がびっしり入りこんでいる。地山にくいこんだ礫を残しながら掘り下げる。上にくるに従って遺物ない。

○６月29日（月）はれ　Ⅱ区の黒色土の部分ほぼ仕上がる。土石流の痕跡がはっきり残る。土石流と薬用人参の深耕でこの地区は攪乱されている。土錘７個出土する。また、焼土の残っていた部分が見つかり、この地区に住居址が１軒存在していたことが確実となった。Ｈ６号住居址掘り下げに入る。

○６月30日（火）雨　朝方雨が降っていなかったので出勤するとパラパラしてきた。ほとんどの皆さんが集まったので、土器洗いをする組と雨で土がしめると遺構の検出がわかりよいので、大工原遺跡の柱穴の跡を再度プラン確認する。

○７月８日（水）はれ　暑い日であった。昨日まで研修旅行で休みであったため久しぶりの現場作業で皆さん張り切っている。Ⅱ区拡張部分仕上げをする。Ｈ７号住居址の掘り下げに入る。残っていた部分が少なく一日で仕上る。

本日は田口小学校六年二組（小嶋　仁教諭）の皆さんが９時30分～11時まで見学がてらお手伝いに見える。Ｉ区の黒色土の部分に住居址がありそうで前から気になっていたため、試掘に入ってもらう。また、もう一方のⅡ区のトレンチを拡張して掘り下げをする。児童は遺物が出てくると大喜びをしていた。

夕方、田口小学校の先生方が見学に訪れる。開発公社の方々も見学される。皆さん熱心に見学していた。

○７月９日（木）　本日も暑い。Ⅱ区を清掃、水まきをして写真撮影を行う。今度は大工原遺跡の掘り下げに入る。柱穴群の深さは50～60cmになる。青磁破片、土師器坏底部

が出土する。この地区は表土を80cm掘り下げた地点での柱穴確認であり、さらに確認面から50～60cm掘り込んだ深い柱穴群はその目的、性格が注目される。また、大工原遺跡の縄文土壙の掘り下げに入る。磨石、石鏃、縄文土器片が多量に出土する。昨日小学生に試掘してもらったところは住居址となりそうなので、本日から本格的に掘り下げに入る。Ｈ８号住居址とする。

○７月10日（金）はれ　Ｈ８号住居址はほぼ輪郭がつかめて住居址となった。セクションをとりベルトをはずす。大工原遺跡の縄文土壙、台石の部分を清掃、写真撮影。

柱穴群は本日で仕上る。ここは礫のないローム層で掘り下げは楽であった。

○７月11日（土）くもり後一時雨　大工原遺跡の柱穴群を清掃、写真撮影。全体写真も写す。宮東遺跡のＨ８号住居址は床面まで掘り下げる。灰釉陶器皿、ヤリガンナ、スラグ、磨製石斧などが出土する。Ｈ４号住居址を再度精査、清掃、写真撮影。

◯７月12日（日）はれ　本日は、現地説明会を行う。10時までにシートをたたみ、清掃し、パンフレットをコピーして待っていると、近所の方々を中心に約60名の町民の皆さんが見学に見える。出土したたくさんの土器や鉄器、住居址、そして崩落してきた礫の散乱状態を見て、皆さんの感動している様子が伝わってくる。引き続き午後は40名の皆さんが見学に訪れた。中には立ち去りがたくいつまでも遺跡を見ている方もいた。

○７月13日（月）はれのちくもり　本日から実測に入る。午後、丸山町長、助役、教育長、教委の事務局の方々が見学に見える。

○７月14日（火）くもりのち雨　実測続行。Ｈ１号住居址のカマド切解、写真まで終る。

役場広報課から取材に見える。

○７月15日（水）くもり時々雨　引き続いて実測続行。Ｈ２号住カマド切解。テントずす。

○７月16日（木）はれ　実測続行。

○７月17日（金）はれ　実測続行。手のあいた人は土器洗いに入る。

○７月18日（土）はれ　実測続行。Ｈ５住～Ｈ８住までカマド切解。土器洗い。

○７月20日（月）はれ　全体図実測。Ｈ５住～Ｈ８住カマド実測、写真。道具の洗浄。

○７月21日（火）はれ　シート洗い。土器洗い。住居址の精査。

○７月22日（水）はれ　土器洗い終了。道具かたずけ。本日で現場作業終了。

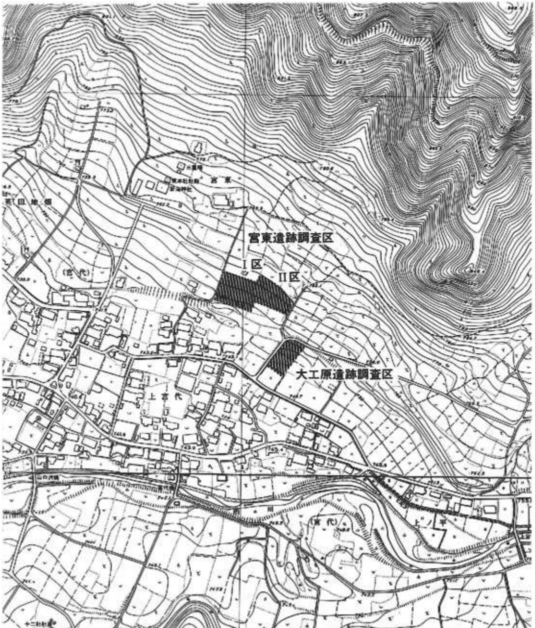
○８月３日～31日、10月17日～11月９日　註記、土器接合、復原。

○11月10日～11月30日　図面整理

○１月29日～３月４日　遺物実測、遺構・遺物トレース、拓本、挿図割り付け、付表作り

○３月５日～４月28日　原稿執筆、編集、写真図版、印刷入れる。文化センターへ展示。

○５月～７月　校正、報告書発刊　（島田　恵子）



第1図　宮東・大工原遺跡跡地形図及び発掘区設定図（1:500）

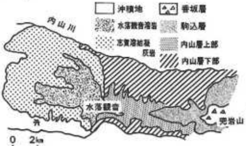
第2章　遺跡の環境

第1節　宮東・大工原遺跡周辺の地質

宮東遺跡は千曲川奔流に東側より合流している雨川によって形成された段丘上に残されている。また、この地点は宮代地区の北側に広がる新海神社境内の東200mの位置でゆるやかな南向き斜面上の地形上である。遺跡内に埋没している自然石の観察によると径2mに及ぶ転石が散在している。また、この転石は黒色の玄武岩で摩擦の少ない角礫である。岩石の起源は周辺の地質構造から遺跡の北側に後背地として連なる山体上部と考える。このことから遺跡の地形は雨川の河床面との比高20mぐらいの低位段丘とも考えられるが、後背となる山体の崖錐（山くずれ）地形も含まれているとみられる。

1　田口地域の地質概況

宮東遺跡周辺の地質構成は北側に連なる山体の地質の影響を直接受けていることから、この山体の構造について概略を述べたい。山体の区域は北は内山川、南は雨川の侵食により区切られている。東は荒船山を起点とし西は清川地区まで地形的にも地質的にも一連の山系として、この区域外、つまり、雨川以南、内山川以北と異なる特徴を持っている。



宮東遺跡周辺の地質

地形の特徴は、東の荒船山を頂点とし、西の佐久平の沖積地に接するところまで、侵食によるV字谷は各所にあるものの、かつては平原であったことが想像できるような平板の地形の名残りがみられる。特に、この平板地形のほぼ中央にある水落観音周辺はなだらかな西落ちの傾斜をもち、堅い平板が侵食に対して残る“ケスタ地形”を思わせる。

この平板の表面を構成しているものは、西側つまり平板の下方は火山より噴火した熱性流下堆積物の志賀溶結凝灰岩、その上に水落観音溶岩。また平板の東側、つまり上方は水性堆積物の駒込層、香坂層である。

山体の基盤は三紀の内山層である。雨川側において露頭が少なく観察できていないが、内山川側では各所で観察できる。基盤に対し不整合に覆っているのが、火山性噴出物の志賀溶結凝灰岩、水落観音溶岩、水性堆積物である駒込層、香坂層等である。これらの層序関係及び時代関係は下部より第三紀中期の中新世に堆積した駒込層、香坂層。第三紀後期の鮮新世に噴出した志賀溶結凝灰岩、水落観音溶岩となっている。

(1)内山層

模式地は佐久市内山、内山川流域に見られる。分布範囲は内山川以南、佐久町大日向にいたるまで見られる。大日向地域では山中地溝帯の中生層や秩父系の白亜期に不整合に重なっている。化石等から第三紀漸新統〜中新統と考えられている。雨川流域では雨川ダムから田口峠にかけて露出している。また、水落観音の東２kmの山稜周辺にも分布している。岩相は砂岩を主体としているが、砂岩と泥岩の互層も観察できる。研究者の多くは互層の様相の変化から雨川周辺の内山層を下部、山稜周辺を上部としている。雨川ダムの東500mの地点には200m〜300mにわたるひん岩の岩脈が見られる。この他、雨川にそって３か所ほど岩脈が見られる。この岩脈周辺は砂岩が熱変成を受け、硅岩となっている。宮東遺跡周辺では沖積層に覆われ観察できない。

(2)駒込層

佐久市志賀駒込地区の川床にグリーンタフを主体とする露頭を模式地としている。駒込地区を中心として南北に分布している。北は八風山周辺、南は雨川北まで分布している。グリーンタフの量は北へ進むほど多くなっている。水落観音の東300m付近ではグリーンタフの特徴は見られず、凝灰岩ないし凝灰質泥岩を主体としている。全体に層理面は不明瞭で走向等の測定はできない。また、内山層との接触部は観察できない。ただし、岩相の分布をつなげた場合、水落観音付近では内山層に整合に重なっていることが推測できる。一方、内山川周辺では不整合とも推測できる。化石から第三紀中新統というのが定説である。

(3)香坂層

南佐久郡地質誌では兜岩層としてあるが、以後の研究で、堆積分布域の広がりから、1987年「香坂層」と統一されている。模式地は佐久市香坂、香坂ダム周辺である。分布域は、北は香坂ダム周辺、県境から内山牧場周辺、兜岩山周辺とわん曲状を示している。岩相は兜岩山周辺の場合、下部は凝灰岩と火砕岩からなり、上部は火砕岩、シルト岩、礫岩、安山岩質の溶結凝灰岩などからなっている。最上部の厚さ10m以内の凝灰質泥岩の中から植物化石が発見されている。全体に水平層を示している。

兜岩山周辺における香坂層の生成期は第三紀中新世といわれている。荒船山の活動初期にできた凹地に火山噴出物によってせき止められてできた淡水湖堆積物であることが、カエル、キンギョモ等の化石発見から証明されている。

(4)志賀溶結凝灰岩

佐久市内山の内山峡に模式的に露出し、千曲川の東方山地に南北の帯状に分布している。複

輝石安山岩ないし石英安山岩であるが、多孔質で軟らかい。このため加工しやすく、一般に佐久石と呼ばれ、墓石等の石材として使われ、各所で採掘されている。かつては信州溶岩ともいわれていたが現在では志賀溶結凝灰岩と統一されている。凝灰岩中に点在する軽石が再融解しレンズ状に固結していることが溶結凝灰岩といわれるゆえんである。成因は軽石を含む火山砕屑物が一時に多量流出して、高温のため噴出物自体の重さで軽石などが溶結してできたとされている。全体には凝灰質に富んだ安山岩であるが、まれに径数cmの黒色岩片が含まれ、詳しく観察すると、結晶が偏平状に並んでいるようすがみられる。

宮東遺跡周辺では新海神社より西側で山体の下部を構成している。内山層に重なる位置関係であるが、接触部は観察できない。生成期は第三紀三新世といわれ、前述の香坂層より新しい。内山層とは不整合関係となる。

(5)水落観音溶岩

宮東遺跡の北東3kmの水落観音周辺の露頭を模式地としている。分布は内山川と雨川にはさまれた山地の稜線部である。下部の志賀溶結凝灰岩を整合に覆っている。雨川沿いでは下部の志賀溶結凝灰岩との硬度の異なりから差別浸食をうけ、水落観音溶岩は連続した崖をつくり、遠くから眺めると水落観音溶岩の分布が明瞭に観察できる。また地形上でも水落観音溶岩が平板状の広がりをもつ分布をしているため、地層が浸食に耐え平板状に残るケスタ地形が見られる。岩質は普通輝石かんらん石玄武岩の溶岩からなり、板状節理が発達している。径1㍍前後の転石で角が摩耗した物は節理を上面より見ると同心円に見えることから、“うず石”と呼ばれ、庭石として珍重されている。

2　地史

宮東遺跡は雨川と内山川にはさまれた山体の崖錐地形の上につくられている。このことは遺跡は後背としての山体の生成過程の影響を受けた結果である。

山体の基盤は内山層、最上部は水落観音溶岩で、生成の期間は第三紀中新世から鮮新世にいたっている。つまり第三紀の後期と考えられる。生成の要因は内山層、駒込層、香坂層は堆積岩であるが、駒込、香坂の両層は凝灰質の物や火山性岩砕を含んでいることから、火山活動によって作られた湖盆での堆積と考えられる。

また、志賀溶結凝灰岩、水落観音溶岩は文字どおり火山活動によるものである。このことから、内山層堆積期の第三紀中新世までは火山活動は見られなかったものの、駒込層堆積の中新統以降は激しい火山活動が続いたことをうかがえる。そして、火山活動も第三紀

をもって見られず、第四紀にいたっては火山活動は終息し侵食の過程に入っているのである。

（伴野　拓也）

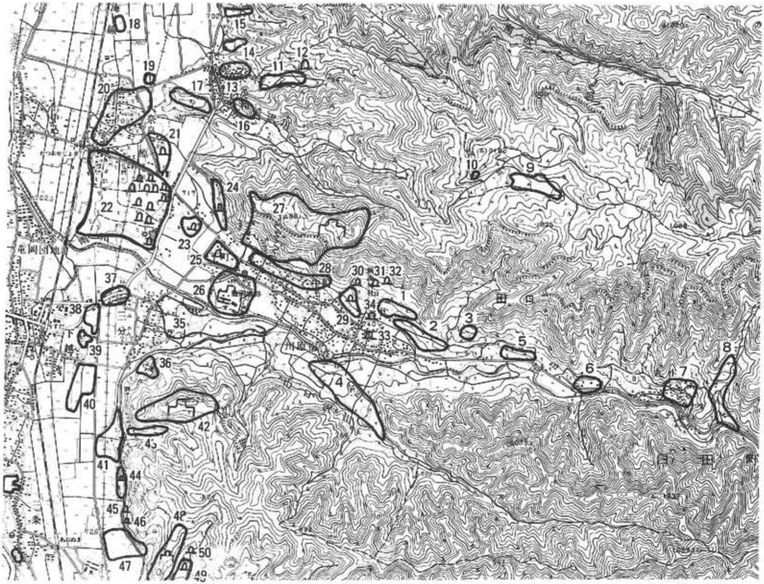
第２節　考古学的環境

宮東遺跡は、雨川右岸の南に傾斜した台地に所在し、西に古杉の茂る新海神社の社叢があり、重要文化財の三重塔、東本殿などがある。前方には、宮代、川原宿部落があり、雨川左岸の台地は、山口沢入口から三分部落にかけて広い畑地がつづいている。東方は丸山部落があり此のあたりから沢は狭ばまり渓谷となり田口峠に至る。北側は、上信国境の関東山系から連なる火山段丘であり、段丘の西端に中世の要害城、田口城跡がある。雨川下流の扇状地左岸の台地に三分部落があり、千曲川右岸の佐久市の境に離山、清川部落があり、大奈良、原、さらに南に田中、下越部落がつづき、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良、平安時代等の遺跡が濃密に分布している。

臼田町には発掘調査された遺跡は少なく、昭和39年芦内岩陰遺跡が発掘され、縄文時代前期下島式、関山式、黒浜式、諸磯A式土器、播器、凹石、シカ、イノシシの骨、弥生時代後期の土器等が出土した。昭和48年発掘調査された三分の井上遺跡からは、縄文時代草創期の局部磨製神子柴型石器が出土し、縄文時代前期初頭花積下層式、後期堀の内式土器、弥生時代後期吉田式土器、古墳時代後期、和泉式、鬼高式、甕、高坏、手捏土器、臼玉、須恵器などが出土した。また、遺構は弥生時代の溝状遺構１基、古墳時代住居址４軒、土壙４基が発掘された。溝状遺構は円形を呈している事は確認されたが、調査区域外になり全面調査が出来なかった。覆土中からは後期初頭吉田式土器が出土し、底部穿孔土器、底部に籾痕のある土器等が出土した。これらから見て弥生時代の円形周溝墓であったと考えられる。このように井上遺跡は縄文時代草創期から前期、後期、弥生時代、奈良、平安時代に及ぶ大きな遺跡であったがほんの一部分の調査だけしか出来なかった事は残念である。

縄文時代の遺跡は、明躰遺跡、山口遺跡、芦内遺跡、清川遺跡、脇平山遺跡、芝添遺跡、大奈良遺跡、明法寺遺跡、五庵遺跡、神原道場遺跡、三分遺跡、遍照寺遺跡、田中遺跡、戸井口遺跡、荒巻遺跡、小山沢遺跡などがある。

弥生時代は、三分の田中遺跡と勝間の丸山遺跡から中期の栗林式土器が出土しており、弥生時代に千曲川水系に発達した栗林式文化の南限であり、又入沢の月夜平遺跡からは、中期初頭の東海系の水神平式土器が出土している。弥生時代中期に臼田町には千曲川水系をさかのぼった栗林式文化と、南から佐久町館遺跡を経て月夜平遺跡に東海系の文化と二つの文化が前後して入ったと考えられる。後期箱清水式期には、勝間原、丸山遺跡が標高約720ｍ前後に位置し、水田耕作を共なった弥生時代集落の佐久平の南限であり、弥生時代稲作では日本で標高の一番



第2図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
1	宮東	宮代　宮東	台地	○		○	○	○	
2	大工原	宮代　上ノ平	〃			○	○		
3	明鉢	宮代　明鉢	山麓	○		○	○		
4	山口	河原宿　岩渕山口	〃	○		○	○		
5	日向　大工原	宮代　日向　大工原	〃			○	○		
6	丸山下	丸山　東大工原	平地			○	○		
7	丸山上	丸山　四ノ久保	山麓			○	○		
8	影丸山	丸山　田ノ上　水落	〃				○		
9	芦内	清川　高戸ヤ	〃	○					
10	芦内　岩陰	清川　芦内	山腹	○	○				昭和39年発掘調査
11	清川入	清川　清川入	〃		○	○	○		
12	清川入　古墳	清川　清川入	〃			○			
13	清川	清川部落入	〃	○			○		
14	はかせ久保	清川　はかせ久保	〃				○		
15	金原	清川　金入	〃		○		○		
16	古沢　堤下	清川　古沢堤下	〃			○	○		
17	脇平山	大奈良　脇	微高地	○	○	○	○		
18	中反田	大奈良　中反田	平地			○	○		堀内重雄氏圃場整備のとき出土
19	芝添	清川　芝添	〃	○					
20	大奈良	大奈良　金石	微高地	○	○	○	○		
21	山崎	大奈良　山崎	〃		○	○	○		
22	原	原 幸神 切合 中原 外九間	平地		○	○	○		幸神、外九間、中原、古墳を含む
23	割塚	田口下町　割塚	〃		○	○	○		割塚古墳をふくむ
24	明法寺	田口下町　明法寺	〃		○	○	○		明法寺古墳をふくむ
25	五庵	田口下町　五庵	〃	○		○	○		五庵古墳をふくむ
26	龍岡城跡	田口下町　龍岡	〃						近世
27	田口城跡	田口下町　城山	丘陵					○	
28	神原道場	下町　中町　下神原	山麓	○	○	○	○		
29	英田地畑	宮代　英田畑	〃			○	○	○	英田地畑古墳含む

№.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
30	新海神社西御陵古墳	宮代 英田畑	山麓			○			
31	〃 中御陵古墳	〃 宮の沢	〃			○			
32	〃 東御陵古墳	〃 〃	〃			○			
33	上宮代１号墳	宮代 上宮代	平地			○			
34	〃 ２号墳	〃	〃			○			
35	三分	三分 塚畑 芝高 谷地 北千塚	台地	○		○	○		
36	遍照寺	〃 寺久保	山麓		○	○		○	
37	西塚田	〃 西塚田	平地			○	○		
38	田中	〃 中川原	〃	○	○	○	○		
39	戸井口	三分 上川原 中川原	〃	○	○	○	○		
40	井の上	〃 上の田	〃	○	○	○	○		
41	荒巻	〃 荒巻	〃		○	○	○	○	
42	岩崎砦	〃 〃	丘陵					○	
43	小山沢	三分 小山沢	山麓	○					
44	山際	入沢 山際	〃		○	○	○	○	
45	山際二号墳	〃 上大深	〃			○			
46	山際３号墳	〃 〃	〃			○			
47	和田前	〃 池の端 和田前	平地			○	○		
48	磯部城跡	入沢 磯部	丘陵					○	
49	権現通	〃 中権現 細久保	山麓	○		○		○	
50	権現通七号墳	〃 遠見場	山腹			○			

高い地点でもある。千曲川右岸では、井上、田中遺跡が佐久平弥生時代集落の南限であり、外にも後期の遺跡はあるがそれらは小規模のもので大きな集落を形成していない。その他、弥生時代の遺跡は、清川入遺跡、金原遺跡、脇平山遺跡、大奈良遺跡、山崎遺跡、原遺跡、割塚遺跡、明法寺遺跡、神原道場遺跡、遍照時遺跡、荒巻遺跡、山際遺跡などがある。

古墳、奈良、平安時代の遺跡は、表に示した通り上記の遺跡とほとんど重複している。臼田町の古墳は佐久平古墳群の南限であり、昭和61年臼田町遺跡詳細分布調査の際、臼田の滝の沢頂上に最古とおもわれる古墳が確認された。千曲川左岸にはこの他に蛇塚古墳、境塚古墳がある。右岸には佐久市の境離山に３基あり、清川入古墳、山崎古墳、幸神古墳群６基、外九間古

墳群3基、中原古墳群3基、割塚古墳、明法寺古墳、五庵古墳、英田地畑古墳、西上の山林に新海神社西御陵古墳があり、新海神社裏山の社叢内に中御陵古墳、東御陵古墳がある。宮代には宮代1号墳、2号墳があり、英田畑古墳は昭和40年発掘調査され、蕨手刀、直刀、鉄鏃、銅製品、三輪玉、土師器、須恵器、人骨等が出土した。(蕨手刀は、上野国立博物館に所蔵されている)

三分部落から入沢につづく山麓に入沢古墳群があり、山際1号～3号、月夜平4号、権現通5号～7号、五霊西8号～12号、湯殿入13号、天神平14号～16号、宮林17号、一万窪18号、西の窪19号、岩水の舟久保20号の古墳が点在している。

これらの古墳は、山麓、山腹、台地に築造されており、調査からみると古墳時代最終末期の古墳である。古墳の築造されている山は、溶結凝灰岩、佐久石を産出する山で、自然石が多く古墳の築造には自然環境にめぐまれていたと考えられ、この地に古墳の多い要因でもあると考えられる。

蛇塚古墳からも蕨手刀が出土しており、臼田町では二点出土している。昭和61年発掘調査した、五霊西12号墳からは、青銅製銙帯具、鉄鏃、刀子、土師器、須恵器、人骨、火葬骨、などが出土した。銙帯は奈良時代の役人がバンドとして着用したもので位階をあらわした飾り金具である。この古墳は奈良時代に築造され、平安時代まで追葬されている。千曲川の左岸の臼田地区には、前記したように3基の古墳があり、佐久町高野町の塚畑古墳が千曲川水系の南限である。片貝川沿岸に古墳が無いのは、石材がないという事だけであろうか。今後の課題である。

中世の山城は田口城跡がある。天文17年、田口氏は武田信玄に亡び後相木氏、依田氏が入っている。三分には岩崎砦があり、磯部城跡は、谷川右岸の尾根上に位置し、入沢城の支城であったと考えられる。雨川右岸に、江戸末期に西洋式城郭として築城された龍岡城は日本に二つしかない城郭で国史跡でもある。　(三石　延雄)

第3節　歴史的環境

この宮東遺跡と大工原遺跡は佐久の総社新海神社の東隣の位置にある。この辺は宮代(ミヤシロ)と呼ばれる処で、「代(シロ)」とは区域の意であり、宮代とは宮の区域ということで、字名からもこの神社の存在の大きさを窺わせる。総社とは古代に国々では守が着任すると管内の大社を巡拝する慣例があったが、種々の事情でこれを勤めないことが多かったので、何時とはなにし主要な神々を国府の所在地に迎えて参拝した。これと同じことが郡でも行われることがあった。佐久の郡家でも国府と同じように佐久の管内の著名な神を、この神社に勧請し合祀し惣社(総社)としたのである。

新海三社神社の境内は2万3百坪、隣接した山林は27町歩余もある。維新廃藩の折、龍岡藩

士が家禄を失い困窮したので同社の境内のかなりの部分を畑とするため開放した。これ以前は境内は現在の倍を越えたと思われる。この開放した畑地にあった英田地畑古墳を昭和40年3月発掘調査を行ったところ蕨手刀が出土した（現在東京国立博物館蔵）。

一志茂樹博士は新海三社神社の神域が極めて広大なこと、諏訪から大河原峠を経て群馬への古道が社の近くを通っていることから、この社は古代における大社であることは間違いない、といわれた。

新海三社神社より約10km東方の田口峠（標高1175m）は分水嶺になっており、東は鏑川の支流馬坂川が太平洋へそそぐ水系に流れ、西へ流れる雨川は千曲川の支流でやがて信濃川となり日本海にそそぐ。この鏑川と高崎市を流れる烏(カラス)川との間の三角地帯には上野三碑があり、高崎市北西部、前橋市総社、富岡市一の宮附近は前方後円墳が多く一大古墳地帯で、四世紀後半以降、物部氏及びその姻戚関係の贄(ニエ)の屯倉氏などが繁栄した。

4世紀初、ヤマト政権が畿内に東進し、銅鐸祭祀のニギハヤヒ王国が崩壊する。「旧事本紀」にあるように物部氏や安曇族はニギハヤヒの降臨に同行しニギハヤヒ王国を建国していたが、ヤマト側に屈服する。ヤマト側はニギハヤヒ一族も物部氏も筑紫を本貫としたため、同族のよしみで屈服した物部氏を厚遇した。しかし傍流の物部氏はヤマト政権の中枢に参加できない。そこで蝦夷勢力と共に東へ移動し、その一部が上野に達したという説話もある。（587年　蘇我馬子により物部守屋が殺されたのを契機に物部氏が移動し上野で実権を握ったとは信じ難い）

上野三碑の一つ、金井沢碑には神亀3（724）年の銘があり、物部君手足の名がある。鍛師(カダソシ)磯部君身麻呂の名もある。磯部に住んでいた物部氏である。山ノ上碑には新川臣とある。物部氏族の祖に大新川命があり、大和十市郡の新川邑住んことから、新川臣は物部氏である。高崎市では「物部」と書かれた墨書土器が出土し、昭和58高崎市大中町の水路工事で「物部私印」と刻まれた3.7cm四方の銅印が出土した。一ノ宮の貫前神社は渡来系比売大神がまず祀られ、そこへ物部の祖神経津主命が祀られた。上記を見ると上野での物部の繁栄が窺える。

この物部氏の出自は宗像族であり渡来系に極めて近い。宗像族、安曇族、住吉族は海人族で海神を斎き祀る。物部氏は「海人族――宗像族――物部氏」という系列にある。

ところで海神穂高見命を祀る南安曇郡穂高町の穂高神社では船形の山車を激しくぶつける神事がある。海神系の祭では船の山車や舟御輿がくりだされる例が多い。佐久市英多神社では舟御輿が村内を巡行し、内山の荒船神社では大間より相立まで御舟御輿が巡行する、何れも海人族の住んだ足跡を窺わせる。荒船神社では海神も祀っている。

大和の石上神宮は物部（石上）氏が氏神として奉仕しているが、群馬の史家近藤義雄氏は佐久市の石神の地名は石上信仰からきているという。和名抄に出る佐久八郷の一つ刑部も物部氏と関係が深い。跡部は安曇(アズミ)部、阿渡部との関係をうかがわせる。ニギハヤヒと共に天磐船に乗った船長天津羽良は跡部首等の祖で、物部同族は大分の跡部郷に住み物部跡部といった。

新海三社神社から近い常和には宗像神社がある。「神代記」には「水沼君宗像三神を祀る」とある。水沼は物部連古連の末裔である。三瀬は水の神で水間、ミマ　ミヌマ　ミツマは水路にある狭門、水間は水路（クリーク）めぐらされた築後川下流地帯をあらわすことばである。臼田町大奈良の御幸神社は物部の祖神武甕槌神を祀る（他に住吉三神、天児屋命、息長足姫）。かって物部氏の勢力圏であった久留米市高良山周囲は青銅器が出土している古墳が多い。この高良神社は物部の祖神高良玉垂命と豊比咩を主神とし八幡大神、住吉大明神を祀り、物部氏がここの大祝である。高良玉垂命を祀った高良社は浅科村八幡、御代田町塩野にある。新海三社神社で明治中期まで奉納されていた神楽には物部祖神である経津主命と武甕槌命が登場した。同社のお田植祭では「宝降らせよ海神」と唱するくだりがある。明和3（1766）年に清川で「物部猪丸」とフルネームの刻まれた3㎝四方の平安時代の銅印が出土している。物部氏の存在が実証される重要な資料である。

佐久に住んだ物部氏は上野の物部氏同様に従順で（ヤマト政権に抗しきれなかつたのであろう）、上野の物部氏にならって土地を屯倉として献上する。東部町の屯倉のあった土地に三分の字名が残っているが、臼田町にも三分の地名が残り、これより北2㎞に太田部の地名がある。延喜式には「屯倉には田部を置く」とあるので、田部の地名の残るこの地に屯倉が存在したことは間違いないと一志博士はいわれた。物部の首長は屯倉の官人となり、郡衙に移行すると郡衙の役人を勤め、やがて財力を蓄え滋野氏と称するようになったと考えられる。この証左はいくつもあげることができる。

新海三社神社の主神は、またの名を八県宿禰命という。この宿禰は天武朝以来の八色の姓とは違う。この宿禰は子孫が祖先の代々の首長の魂の集合霊をつくって、それを特定の人物（ここでは八県宿禰命）に仮託した呼び名である。高麗帰化人が高麗郡の長官（高麗王若光）が没した748年に子孫が高麗神社（埼玉県入間郡日高町）に祖神を祀ったように、物部の子孫が祖先を祀ったと考えられる。伝えによると創祀は嘉祥二（849）年という。日本三代実録に貞観18（866）年、信濃国従五位下八県宿禰命神に正五位下を授くとある。これは一大勢力を信濃で持った物部の後裔滋野氏による録進と思われる。新海社は佐久に現在12社あり、この他にも小県郡東部町本海野、和田にあり、諏訪、群馬に各1社ある。

新海三社神社と呼ばれるのは、この社が海神系であるからで、海の神を祀る社は三殿制である。大坂の住吉大社は縦に三社がならんでいる。宗像神社は田島、沖津宮、中津宮を宗像君が三前大神と呼んで奉斎している。安曇の神社でも志賀神社でも三神三座である。穂高神社も三社殿である。中世になって諏訪信仰が流行し、新海三社神社に諏訪神が勧請された。これは一社として数えない。

田口附近から北は平賀、南は入沢にかけて群集墳が多い。田口字神原にもかってはかなりの古墳があった。入沢五霊西十二号古墳からは官人が位階に応じて着用する銙帯の一部が出土し

ている。これは郡司級に相当する人物が着用したものと考えられている。

この発掘で宮東遺跡からふいごの羽口が出土した。金井沢碑には鍛師磯部君身麻呂と刻まれている。鍛師は鍛冶のリーダーである。群馬県群馬町三ッ寺Ｉ遺跡（５世紀後～６世紀）から坩堝、ふいごから炉へ風を送る先にとりつけた洞口が出土した。田口ではエゴマを作らないという伝えがある。これは新海三社神社の主神興波岐命がエゴマで眼をついたからという。目を突いたというのは片目であったということで、一つ目であったということである。この一つ目は鍛冶の神と極めて関係が深い。鍛冶の神、天目一箇神、つまり作金者の絵は何れも片目である。作金者は片目で火の色あいを見て製鉄の温度を知る。興波岐が目を痛めて目一箇ということは作金者と同じ技術を持っていたことを裏づける。興波岐はリーダーシップもすぐれていたが製鉄の技術を持っていて佐久の開拓を成功させたと想定される。開拓には鉄器の力は大きい。今度出土した宮東遺跡の羽口も、その製鉄技術とのかかわりがあるのだろうか。

中世の田口は国衙領に属していた。荘名はないが実質的には平賀荘であった。永正12年、新海三社神社の三重塔（その時代は神宮寺の塔）を修理再建し、東本殿を造営し、神宮寺（現上宮寺）の本尊薬師如来、金剛力士像（何れも室町後期）献納した田口氏は滋野氏の後裔という自負から新海三社神社への寄進をひたすら行ったと考える。

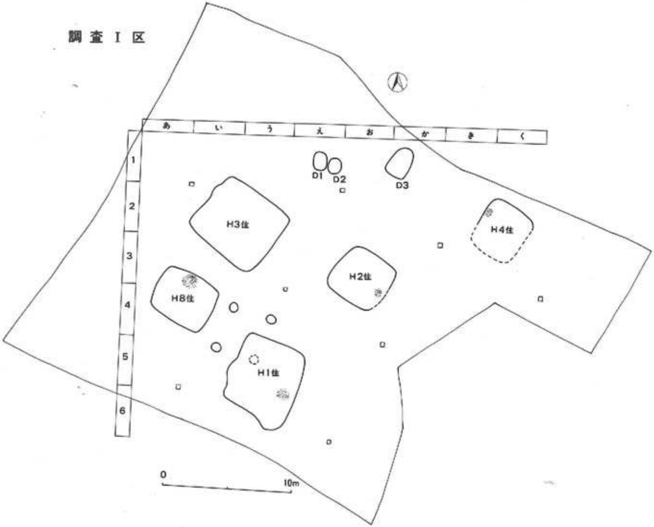
平安中期、宮東の地で業をたてた人々は、先住の人々に思慕を持って暮していたのではないだろうか。この時代はまだ建御名方命　事代主命は祀られていなかった。

以上は私の推考の内容である。　（沖浦　悦夫）

参考文献

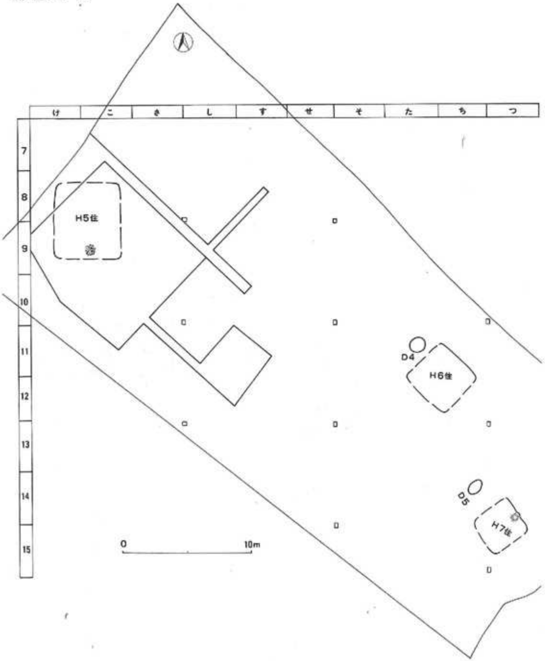
谷川健一「白鳥物語」　集英社　1986

調査Ｉ区



第3図　宮東遺跡調査Ｉ区検出遺構全体図（1：300）

調 査 II 区



第４図　宮東遺跡調査Ⅱ区検出遺構全体図（１：300）

第3章 層　　序

宮東・大工原両遺跡は、雨川右岸の新海三社神社東方の段丘上に位置している。この段丘は南向き緩傾斜面の地形で日当りがよく、雨川との比高約20mを測るため、一帯の景色を一望することができる。また、大工原遺跡はこの緩傾斜面の末端部にあたり微高地となる。

両遺跡の地層は、斜面北側に連なる山々に影響されている。それは、後背する山からくずれ落た岩石に覆われている部分と、大工原遺跡のように段丘末端部では、遊水地であったため砂層が混入し、サクサクとした全く石のみられない地区とに分かれていた。また、山くずれによる岩石は住居址の中にまで入りこんでいて、平安時代末期に山くずれがあったことを示していた。そのため、上段にあった縄文時代中、後期の遺構が押し流されて遺物の散布がみられた。

宮東遺跡

Ⅰ層（暗褐色土）　耕作土

Ⅱ層（褐色土）　粘性の強いローム層に、山くずれによる転石が大小入り混っている。石と土と半々の状態にある。

Ⅲ層（黄褐色土）　Ⅱ層に比較すると礫の混入が少ないが、ところどころに1～2mの転石がある。

大工原遺跡

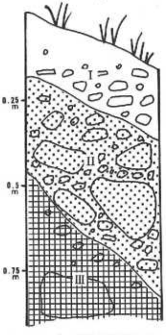
Ⅰ層（暗褐色土）　耕作土、上段部に礫の混入多い。

Ⅱ層（褐色土）　砂が混入しているため粘性の強いローム層もサクサクとしている。

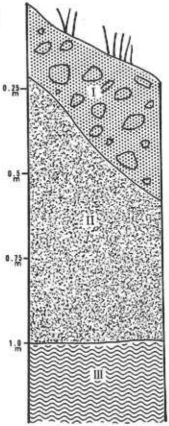
層厚80cmを測る下段に柱穴群が検出された。

Ⅲ層（黄色土）　粘性の強いローム層。

（島田　恵子）



第5図　宮東遺跡層序模式図



大工原遺跡層序模式図

第4章　遺構と遺物

1　住 居 址

1）H1号住居址

遺　構（第6・7図）

本住居址は、調査I区南西端い・う・え－4～6グリッド内に検出された。調査I区はりんご園でかなり大木のりんごの木があり、その上、礫と粘土層に覆われ表土削平後のプラン確認では、草かきの刃が強粘土と礫にはじかれてしまうという状況にあった。そのためプラン確認は、上面でしっかり把握することができずに掘り下げの段階で一つ一つ仕上げを行なった。

平面プランは、南北620cm、東西570cmを測り、南東コーナー側がやや出張った、隅丸方形を呈する。カマドを中心とした主軸方位は、E－12°－Sを示す。

壁高は、地形が北から南へ傾斜している関係から北側が高く50cmを測り、南側は13cm前後と低くなる。東側中央の壁高は30cm、西側中央も30cmを測るが、両壁共に南側に近ずくにしたがって15cm前後を測りかなり低くなる。

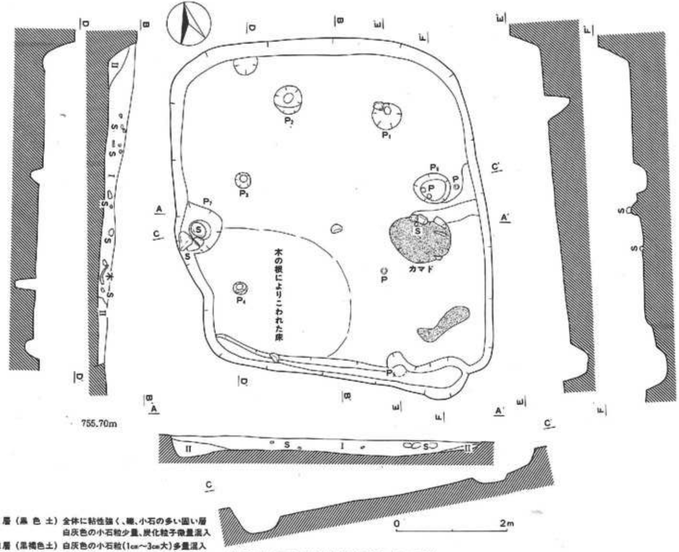
覆土は2層に分かれる。I層は住居址全体をほぼ覆っている層で、15cm前後の礫を多量に含み、白灰色の小石粒を少量と炭化粒子を微量混入している、II層は壁コーナーに堆積している三角堆土である。本住居址内は調査区北側を覆っていた泥流による破壊はまぬがれている。

床面は、西南コーナー側付近に大きなりんごの木があり、その根が住居址内に入り込んだため一部床面をこわしていた。カマド右側の南東コーナー側は、焼土の堆積していた周囲が固い床面であったが、他は貼り床もなく踏みしめた程度の床である。全体的に平坦な床面を形成しているが、地形的傾斜のためかレベル的には南側が10cm程低くなっている。

柱穴は、P_1～P_5まで5個検出された。P_1は、北東コーナー寄りにあり径50cmを測るが、柱痕の部分は15cm前後で、深さは45cmを測る。P_2も掘り込みの径は50cmを測るが、柱痕は、20×15cmである。両ピット共に黒色土層に覆われ、炭化粒子を混入したやわらかい覆土であった。P_3は径30cm、深さ23cmと小さくなる。柱穴内の覆土は砂層に覆われていた。P_4は、径25cm、深さ38cmを測る。P_5は、南壁沿いの周溝と重なり合う状態に掘り込まれ、径50cm、深さ30cmを測る。

P_6は、カマド左側に築かれた掘り込みで、径70×56cm、深さ20cmを測る。中から完形の坏が2個体、破片3個体があり、周囲にも完形1個体が出土した。台所用品を置いた施設であると考えられる。

P_7は、西壁沿いの中央に築かれた掘り込みで、径80cm、床面からの深さ25cmを測る。ピット内には30cm大の礫が3個置かれていた。さらに砂鉄あるいは磁鉄鉱を溶かして作られたと考えられる鉄の塊まり（第48図5）が出土した。P_7は作業に関係した穴であるとおもわれる。



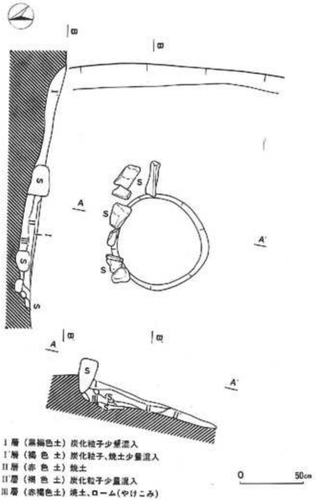
I層（黒 色 土）全体に粘性強く、礫、小石の多い固い層
白灰色の小石粒少量、炭化粒子微量混入
II層（黒褐色土）白灰色の小石粒（1cm〜3cm大）多量混入

第6図　H1号住居址実測図（1：70）

カマドは東壁中央に設けられていたが、左脇の石組と火床の焼土を残すのみでほぼ壊されていた。火床は、壁から1m以上離れていて、従来の壁際に沿って構築されている形態とやや異なるようである。

焚口の掘り込みは、径70cm、深さ15cmを測る。焼土は6cm前後の厚さで堆積していた。

石組、粘土カマドで、左脇の石組は13×28cm大が13cm地中に埋め込まれたまま残っていた。また、粘土の崩落は左脇から壁際まで残っていてコチコチに固くなっていた。



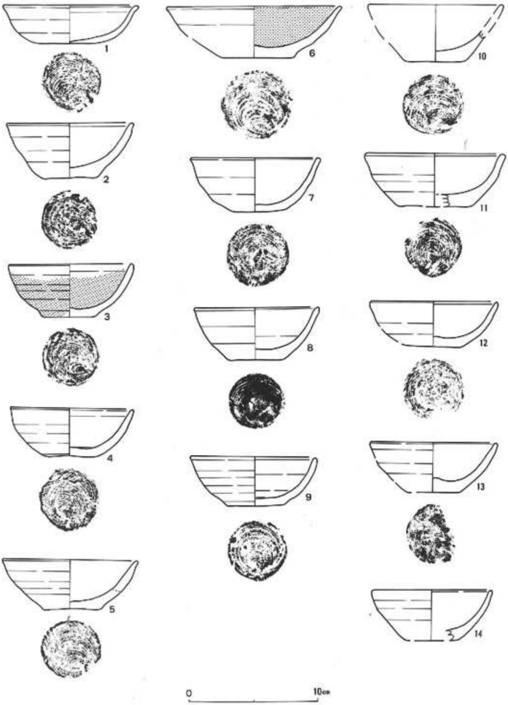
第7図　H1号住居址カマド実測図（1：30）

その他の住居址施設は、西壁下に幅30～40cm、深さ上場から45cm、床面から30cmを測るかなり深い周溝が築かれている。地形的傾斜の関係からかレベル的に低い西壁のみに築かれている周溝である。さらに南西コーナーは周溝が80cmの幅に広がり出張りが生じている。付近に焼土の散布と鞴（ふいご）の羽口破片（第49図3）が出土していることから、鍛冶的作業が行われていたことも想定される。

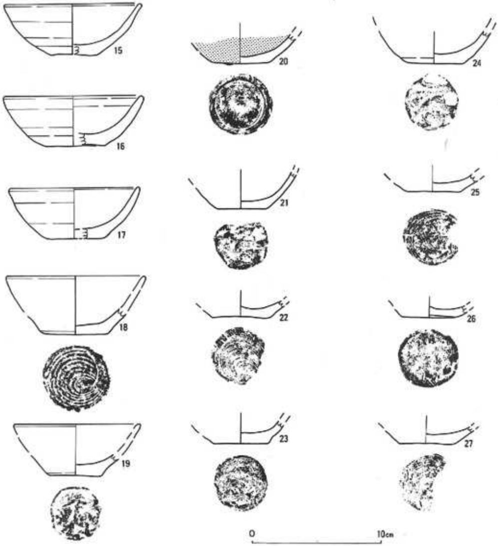
遺　物（第9～11図）

本住居址から出土した遺物を挿図8～11に図示した。坏形土器27点、埦形土器11点、須恵器蓋2点、須恵器壺2点、灰釉陶器広口瓶1点、埦、皿の底部片3点がある。図示した遺物については、第2表に特徴を記してある。

1～27は坏形土器である。そのうち口縁～底部まで図示できたのは17点で、残り10点は底部片のみである。1～5、7～19までは、口径10cm前後を測る小形の坏である。1は、器高3cm

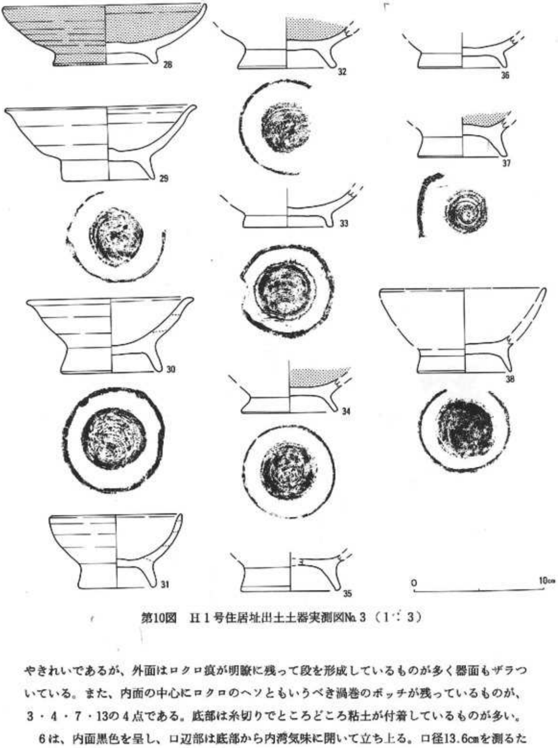


第８図　Ｈ１号住居址出土土器実測図№１（１：３）



第９図　Ｈ１号住居址出土土器実測図No.２（１：３）

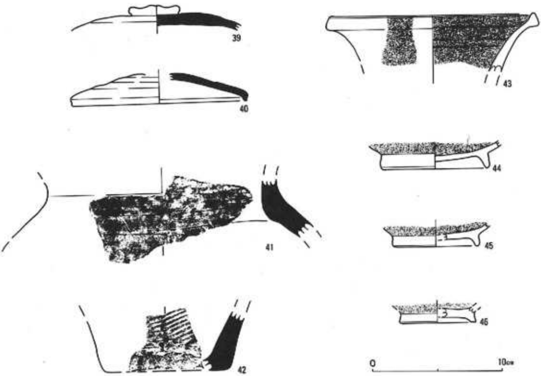
と最も浅い。底径は広いが糸切り痕の残る径は4.2㎝を測りその周囲は１㎝の幅にわたって平で、底面を縁取っている。口縁部は外反しているため口径は広くなる。器厚はきわめて薄く底面中央に1.5㎜大の小さな孔がある。これは使用中にできた孔であると考えられる。内、外面共に弱いヘラミガキがなされスベスベしている。このタイプの坏は図示した中ではこの１点のみである。２～５・７～10・13・15～17の12点は同タイプの坏である。底部から湾曲して立ち上るが、中には口縁でやや外反している、５・15がある。器高は４㎝前後で底径が短い事と、湾曲して立ち上っているため深い感じを呈している。調整はロクロヨコナデが行なわれ内面はや



第10図　H 1 号住居址出土土器実測図No. 3（1：3）

やきれいであるが、外面はロクロ痕が明瞭に残って段を形成しているものが多く器面もザラついている。また、内面の中心にロクロのヘソともいうべき渦巻のボッチが残っているものが、3・4・7・13の4点である。底部は糸切りでところどころ粘土が付着しているものが多い。

6は、内面黒色を呈し、口辺部は底部から内湾気味に開いて立ち上る。口径13.6cmを測るた



第11図　H 1 号住居址出土土器実測図No.4（1：3）

め、器高は浅く感じられる。底部糸切りの目が荒い。このタイプの坏は図示した中ではこの1点のみである。

11は、焼成後赤味が強く残る胎土を用いている。同胎土の製品は、8・21・23・36の5点があげられる。器厚が厚く、底径が広いためガッチリとした安定感がある。

12は、器高浅く、器厚が薄いため区分した。14は、器高は12より深いが、口径が9.4cmを測り器厚の薄いこともあり最小形の坏である。20は、内、外面共に黒色でヘラミガキが施されている。小形坏中での黒色土器はこの1点が唯一となる。

18・19・21・23・24～27の底部片は、底部の径と立ち上りの様相から、2～5・7～10・13・15～17の器形と同類のものであると判断される。

第10図は高台の付いた埦を図示した。口縁～底部まで残っていた28～31の4点と高台のみの32～38の7点がある。

28は器高浅く4.6cmを測り小形坏と変りない。しかし、口径は16cmを測り大きく開き、台部は低く、皿状的な埦である。内、外面共に黒色でヘラミガキが施されている。

29・30は、高台が全器高の3分の1を占めている。特に30は3分の1強となる。高台から直

第2表　H1号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
8－1	坏	10.6 3.0 4.8	底部としての糸切り径4㎝を測るが、内側の底径7㎝で広い。器厚うすく、底部中央に孔がある。	ロクロ痕、1㎜大の砂粒子目立つ。底部糸切り。	口辺部ロクロ痕目立つ。弱いヘラミガキ。	褐色
8－2	坏	10.0 4.3 4.5	小形で底径短いが器高が深い。湾曲して立ち上る。器厚は厚い。	ロクロ痕。三段の稜目立つ。底部糸切り。	口辺部ロクロ痕目立つ。弱いヘラミガキ。	茶褐色 回転実測
8－3	坏	9.8 4.1 4.2	小形で底径短いが器高が深い。湾曲して立ち上る。器厚は厚い。	ロクロ痕。稜やや目立つ。底部糸切後弱いナデ。	ロクロヨコナデ中心にポッチ残る。	内外面うすい黒色
8－4	坏	9.7 3.7 4.2	小形で底径短いが器高が深い。湾曲して立ち上る。器厚は厚い。	ロクロ痕。三段の稜目立つ。底部糸切り。	ロクロ痕。 中心にポッチ残る。	灰褐色
8－5	坏	10.6 3.8 4.6	口径に1㎝の差が生じていて円形でなく細長い。口縁部湾曲して立ち上る。	ロクロ痕。三段の稜目立つ。底部糸切り。	ロクロヨコナデ	茶褐色
8－6	坏	13.6 4.0 5.8	口辺部は底部からゆるやかに開いて立ち上る。器厚は厚い。	ロクロ痕。三段の稜目立つ。底部糸切り。	ロクロヨコナデ 内面黒色 中心にポッチ残る。	明褐色
8－7	坏	10.2 4.2 4.2	小形で底径短く、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。二段の稜目立つ。底部糸切り。	ロクロヨコナデ ロクロの渦巻が中心部に残る。	茶褐色、口縁部暗灰色
8－8	坏	9.8 4.1 4.4	小形で底径短く、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。 口径に1㎝の差があり細長い。	ロクロ痕、調整荒い。二段の稜目立つ。底部糸切り。	ロクロヨコナデ ロクロの渦巻が中心部にわずか残る。	茶褐色
8－9	坏	10.0 3.9 4.4	小形で底径短く、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。二段の稜目立つ。底部糸切り。	ロクロヨコナデ	褐色、一部黒斑ある
8－10	坏	10.6 (4.5) 4.8	小形で底径短く、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。二段の稜目立つ。	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
8－11	坏	11.0 4.2 (5.8)	底部から直線的に開き口辺部で湾曲する。器厚は厚く安定感がある。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ	赤褐色 回転実測
8－12	坏	(10.0) 3.5 (4.4)	底部から湾曲して立ち上る。 器厚ややうすく、器高もやや短い。	ロクロ痕、調整荒い。	ロクロヨコナデ 中心部にロクロのポッチ残る。	褐色 回転実測
8－13	坏	(10.0) 3.9 (4.0)	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。 二段の稜目立つ。	ロクロヨコナデ 中心部にロクロのポッチ残る。	茶褐色 回転実測
8－14	坏	(9.4) 4.0 (4.2)	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。 器厚うすい。	ロクロ痕、調整荒い。	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
8－15	坏	(10.8) 4.0 (3.8)	口径に比較して、底径が短い。底部から湾曲して立ち上る。	ロクロヨコナデ 器面なめらか 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 調整なめらかである。	褐色 回転実測
8－16	坏	(11.0) 4.0 (4.6)	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。 器厚は厚い。	ロクロ痕、調整荒い。稜目立つ。底部糸切り、やや上底	ロクロ痕、調整荒い。	褐色 回転実測
8－17	坏	(10.2) 4.0 (4.4)	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。 器厚は厚い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り一部ヘラヘゲリ	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
8－18	坏	(10.9) (4.0) 5.5	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。 器厚は厚い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り、目荒い。	ロクロヨコナデ 中心部小さいポッチ残る。	暗褐色

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
9−19	坏	(9.9) (4.0) 4.0	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い、 器厚は厚く安定している。	ロクロ痕 糸切り後ヘラケズリ。	ロクロヨコナデ	茶褐色
9−20	坏	— — 4.5	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い、 底部付近に糸の回転あと三本残る。	外面も黒色でヘラミガキ。 糸切り後ヘラケズリ。	内面黒色ヘラミガキ	黒色
9−21	坏	— — 4.0	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。 底部弱い糸切り。	ロクロヨコナデ 中心部にポッチ残る。	赤褐色 回転実測
9−22	坏	— — 4.6	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕 底部糸切りやや上底。	ロクロヨコナデ 中心部にポッチ残る。	明褐色
9−23	坏	— — 4.2		ロクロ痕、調整荒い。 底部弱い糸切り。	ロクロヨコナデ 調整なめらか。	赤褐色
9−24	坏	— — 4.6	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。 底部弱い糸切り。	ロクロヨコナデ	赤褐色
9−25	坏	— — 4.2	小形で底径短かく、底部から湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕、調整荒い。 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ	褐色
9−26	坏	— — 4.2		ロクロ痕、調整荒い。 底部弱い糸切り、やや上底。	ロクロヨコナデ 中心部にポッチ残る。	褐色
9−27	坏	— — 4.2		ロクロ痕、調整荒い。 底部糸切り。	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
10−28	埦	16.0 4.6 8.0	高台の底径短く、高台から大きく直線的に開き、口縁部で湾曲する、器高は低い。	ロクロ痕、稜目立つ。 外面黒色ヘラミガキ。	ロクロ痕 内面黒色ヘラミガキ	黒色
10−29	埦	15.0 5.8 7.3	高台は器高の３分の１で高台から直線的に開いて口縁で外反する。	ロクロ痕、調整荒い。稜目立つ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心部にポッチ大きく残る。	褐色
10−30	埦	13.0 5.8 8.0	高台は器高の３分の１で高台から直線的に開いて口縁で外反する。	ロクロ痕、調整荒い。 底部目の荒い糸切り残る。	ロクロヨコナデ 中心部にポッチ大きく残る。	褐色
10−31	埦	10.5 5.7 6.0	高台は器高の３分の１強である、口辺部へ湾曲して立ち上る。	ロクロヨコナデ 稜目立つ、底部糸切り少し残る。	ロクロヨコナデ 中心部にポッチ大きく残る。	暗褐色 回転実測
10−32	埦	— — 7.8	高台はやや低くなり径長い、 直線的に開く器形となろう。	ロクロヨコナデ 底部糸切りある。	ロクロヨコナデ 内面黒色、十字の暗文ある。	赤褐色
10−33	埦	— — 7.0	高台短く、先端平に調整	ロクロヨコナデ 調整丁寧である。 糸切り少し残る。	ロクロヨコナデ 調整丁寧ミガキある。	褐色
10−34	埦	— — 7.6	高台やや短い、先端尖っている。	ロクロヨコナデ 調整丁寧である。 糸切り少し残る。	ロクロヨコナデ 内面黒色、十字の暗文ある。	褐色
10−35	埦	— — 7.8	高台は器高の３分の１になるとおもわれる。	ロクロヨコナデ 糸切り少し残る。	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
10−36	埦	— — 7.0	高台短い。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ 調整丁寧である。 十字の暗文少し残る。	赤褐色 回転実測
10−37	埦	— — (7.0)	高台は器高の３分の１となろう。	ロクロヨコナデ 底部渦巻大きく残る。	ロクロヨコナデ 中心部に渦巻大きく残る。うすい内面黒色。	褐色 回転実測

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
10−38	埦	(13.0) (6.6) 7.4	高台短い。	ロクロヨコナデ 調整丁寧	ロクロヨコナデ 調整丁寧	明褐色
10−39	須恵器 蓋	— — —	天井部は偏平である。つまみも偏平でやや凹みをもつ。	ロクロ痕	ロクロ痕	青灰色
10−40	須恵器 蓋	— — 口(13.7)	口辺端部断面三角形を呈す直線的に天井部へ立ち上る。器高はうすい。	ロクロ痕	ロクロ痕	青灰色 回転実測
10−41	須恵器 壺	— — —	（頸部一部の破片）	ロクロ痕	ロクロ痕	青灰色 回転実測
10−42	須恵器 壺	— — (10.0)	（底部の一部分）	平行叩目文ある。	ロクロ痕	暗灰色 回転実測
10−43	灰釉 広口瓶	(16.2) — —	（口辺部の一部分）	ロクロ痕 緑釉の施釉ある。	ロクロ痕 緑釉一部分流れている。	灰緑色 回転実測
10−44	灰釉 埦	— — 8.4	（底部全部）	ロクロ痕	ロクロ痕	灰色
10−45	灰釉 埦	— — (6.8)	（底部破片）	ロクロ痕	ロクロ痕	灰色 回転実測
10−46	灰釉 埦	— — (6.0)	（底部破片）	ロクロ痕 濃い緑釉全面	ロクロ痕 濃い緑釉全面	緑色 回転実測

線的に開いて口縁で外反しているため、口径が開き29は15cm、30は13cmでやや小ぶりとなる。29は調整が荒く器面はザラついている。内面中央にはロクロの渦巻が盛り上って残っている。30はロクロヨコナデが平均的に施されている。器台の径は広く、器厚が厚いため安定している。両者ともに底部中心に糸切りが残っている。

31は小形の埦で、29・30とタイプが異なり、湾曲して立ち上る。高台は全器高の3分の1強を測り、内面中央に1cm大のポッチが残り暗褐色を呈する。

32・34・37は、内面黒色で37は黒色がうすく暗褐色を呈する。32・34共に十字の暗文が認められる。33は高台低く、台部先端は平坦にケズられており、丁寧な調整がなされている。内面はミガキがかけられスベスベである。35は、高台が全器高の3分の1を占めるとおもわれる。36は赤味の強い焼成で、38と共に台部やや低く、外反が強い。

第11図は須恵器と灰釉陶器片である。39・40は蓋で偏平な天井部で、つまみも偏平である。口辺端部は断面三角形を呈す。41は壺かとおもわれるが破片が小さく即断はでき得ない。42はわずかに残った底部片で平行叩目文が認められる。

43〜45は灰釉陶器の破片である。43は広口瓶の口縁部片で大きく外反する。緑色の釉が内面全体に施釉されている。外面は一部分流れている。44〜46は埦底部である。44は高台部がほぼ

残り、台部の径は8.4㎝を測る。釉は施されていない。45は底部約半分の破片で大原２号窯式で
が一筋したたり落ちている。46は濃い緑色が内外面共にハケで塗られた状態に平均的な付着を示している。これは近江産である。その他虎渓山１号窯式もみられる。

遺物はこの外に、第49図に示したふいごの羽口が住居趾の南東コーナー付近の焼土際から出土した。また、銑鉄と考えられる塊りがP_7から出土し第48図５に図示してある。遺物の出土状態は、カマド左脇P_6の浅い掘り込みの中とカマド周辺から主に完形品が出土している。須恵器蓋は、南西コーナーの周溝際から出土した。図示した遺物はそのほとんどが床面直上付近から出土している。りんごの根が入り込んで床面が壊れていた南西コーナー側からの遺物の出土は少なかった。覆土内からは３～５㎝大の坏破片が特に多かった。

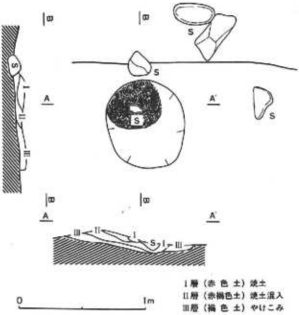
以上の遺物から判断して本住居趾の所産期は、平安時代中期前半10世紀に位置付けられよう。

（島田　恵子）

2）　Ｈ２号住居趾

遺　構（第12・13図）

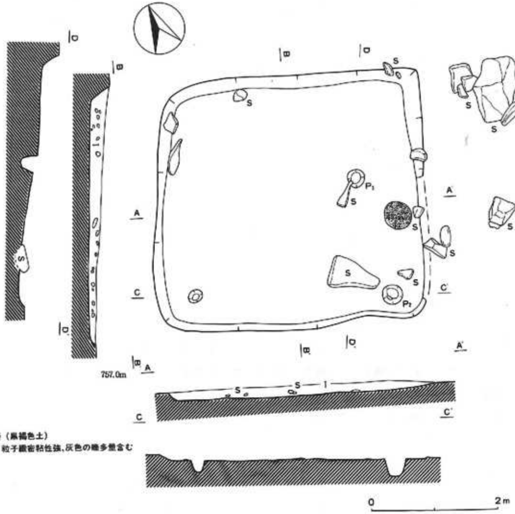
本住居址は、調査Ｉ区中央の、え・お・か－３・４グリット内に検出された。本調査区は北側の山が崩れて、グリット１～４までの範囲全面に粘生の強い地山土層と大小の板状の礫を多く含んだ泥流が遺構を破壊し、遺跡の台地を埋めた。本遺構もその中にあり上部の遺物の出土状況と土層の状態から住居址であると考えられ、プラン確認を行なった。しかし、強粘土と礫に苦しめられるばかりで住居趾の輪郭を把握することが困難であったため、トレンチによって試掘を行なった。その結果、カマド跡とおもわれる焼土と周囲に散布していた土器片によって住居址の存在が明らかとなったため掘り下げに入った。



第12図　Ｈ２号住居址実測図（１：30）

平面プランは、南北に４ｍ、東西4.2ｍを測り、方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、Ｅ－24°－Ｓを示す。

壁高は、遺存状態の良い北側で25～33㎝、西壁で12～20㎝、南壁10㎝を測る。最もプラン確認の困難であった東壁は、北東側半分に８㎝の高さで壁が残ってい



第13図　H２号住居址実測図（１：60）

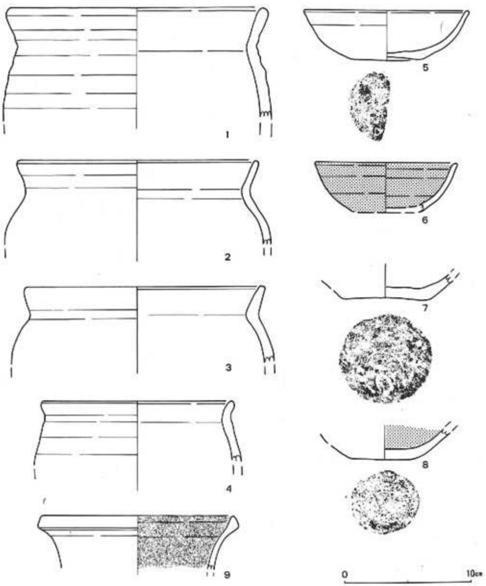
たが、カマド右脇の南東側は形として残っていなかった。

覆土は、１層に覆われ灰色の５～８㎝大の礫を多量に含んでいた。床面は、北と南側ではレベル的に20㎝の高低差が生じている。北側の床面は覆土掘り下げの直下から固くてなめらかな床状の面があらわれたので掘り下げを止めた。反対側の南側はレベル的にはすでに覆土上面が床面となるが、黒褐色土が堆積していたため10～15㎝掘り下げると柱穴が確認された。そのため、北側の床面をさらに10～15㎝掘り下げたが柱穴は確認されず、さらに一部分南側と同レベルまで掘り下げを試みた。固いなめらかな床面はその直下で終るため、床面とみなしてこれ以上の掘り下げは床面を壊すことになると考えられるため、20㎝の高低さが生じたままで掘り下

げを止めた。

柱穴は３個検出された。P_1は西南コーナーに認められ、径20×22cm、深さ18cm、P_2は東南コーナーに位置し、径30cm、深さ28cmを測る。P_3は、カマド近くに位置し、径26×28cm、深さ26cmを測る。

カマドは、東壁側のほぼ中央に検出された。ほとんど壊れており、径60×70cm、深さ10cmの



第14図　H２号住居址出土土器実測図（１：３）

掘りこみと、焼土が35×43cm、厚さ5cmにわたって堆積していた。焼土中に7cm×10cm大の熱を受けた礫が1個存在していた。

また、住居内には40×25cm大の大きな礫をはじめとした偏平な礫が床面直上、あるいは床にめり込んだ状態に散乱していた。さらに東壁際には、50×35cmを測る巨石や15～20cm大の礫が地山に入り込んでいた。山から崩れた礫群である。

本住居址はこのような泥流に押し流されたことと、すでに床面が耕作中にとばされたことがレベル的差により理解できる。不明確な点が多い住居址の掘り下げ状況であったといえる。

遺　物（第14図）

遺物は主にカマド付近に集中して出土した。第14図1～4は甕である。これら甕の口縁部、胴部はカマド焼土上部とカマド付近に散布していた。それぞれ口辺部「く」の字状に外反し胴部に最大径をもつ器形である。7は糸切りで甕の底部である。

5は坏で底径広く器厚はうすい。6は両面黒色でヘラミガキされた器厚のうすい坏である。8は、内面黒色を呈し、底部から直線的に立ち上る器形である。

9は、灰釉陶器広口瓶の口縁部片である。内面にハケによるうすい緑の施釉がある。この他に北東コーナー壁際から炭化した栗が出土した。第14図8の坏の横に発見された。

第3表　H2号住居祉出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
14－1	甕	(20.5) — —	口辺部「く」の字状に外反し、最大径は胴部にある。	ロクロヨコナデ 稜目立つ。	ロクロヨコナデ 胴部にハケメ調整ある。	赤褐色 回転実測
14－2	甕	(19) — —	口辺部「く」の字状に大きく外反する、胴部丸味をもってふくらむ。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	赤褐色 回転実測
14－3	甕	(19) — —	口辺部「く」の字状に外反し最大径胴部にある。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	赤褐色 回転実測
14－4	甕	(15.0) — —	口辺部短かく外反は弱いが「く」の字状にゆるく胴部へと湾曲する。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
14－5	坏	(12.8) (3.9) 5.5	やや湾曲気味に立ち上る。底径広く、器厚はうすい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後ヘラケズリ	ロクロヨコナデ 内面はうす灰色	茶褐色 回転実測
14－6	坏	(11.1) (3.9) (4.8)	やや湾曲気味に立ち上る。 器高うすい。	外面黒色ヘラガキ丁寧に調整されている。	外面黒色ヘラガキ丁寧に調整されている。	黒色 回転実測
14－7	甕	— — 8.8	（底部　　　）	弱い糸切り残る。	ロクロ痕渦巻残る。	茶褐色
14－8	坏	— — 5.0	底部から直線的に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後弱いヘラケズリ	ロクロヨコナデ 内面黒色	褐色
14－8	灰釉 広口瓶	(15.8) — —		ロクロ痕	ロクロ痕 緑色のハケ施釉ある。	緑灰色 回転実測

以上が本住居址出土の遺物であるが、この他甕胴部片20点、口縁部1点、坏糸切り底部片8点、埦底部3点、坏口辺部23点、須恵器壺破片1点が全てである。これらの出土遺物から本住居址は、10世紀中葉に比定されよう。（三石　延雄）

3）　H3号住居址

遺　構（第15図）

本住居址は、調査I区の北西側、い・う－1～3グリッド内において検出された。プラン確認は上面黒色土であったため、本調査区の中ではかなり明確な遺存状態を示していた。だが、掘り下げに入ると住居址中央から南壁に向って、最大で70×53cm大の巨石にまじまってたくさんの礫が床面下にめり込んでいて住居址を破壊していた。H2号住居址と同様、南壁側は確認面がすでに床面のレベルにあるが、全面黒色土であったため15～20cmの深さで土層の変化する面まで掘り下げを行った。

平面プランは、南北540cm、東西630cmを測り、東西に長い方形を呈する。北側を中心とした主軸方位は、N－30°－Eを測る。

壁高は、最も良好な状態の北壁が40～45cmを測り、しっかりした壁が残っていた。床面の破壊が少なかった部分の東西壁の深さは、22～30cmとなり、地形の傾斜によって壁高も浅くなる。

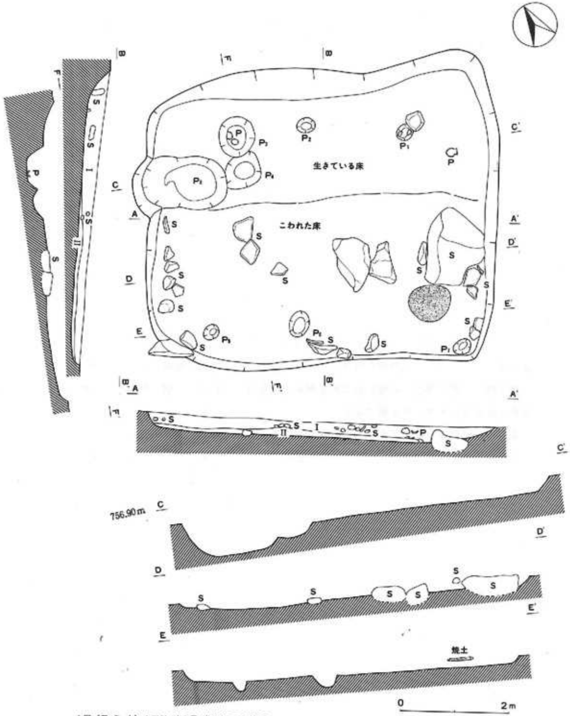
覆土は、土層の黒色土に覆われこの土層が主体を成していた。II層の暗褐色土は破壊された床面下に入り込んでいた土層である。

床面は、破壊をまぬがれた北壁部分を観察すると、小石粒が入り混った踏みしめたのみの床の状態で、あまり堅緻な床ではなかった。破壊されていた南壁際の床は、長い間水が溜っていたため沈殿し、緻密な床となったような感を呈していた。しかし、上面から床面までおびただしい数の大小の礫が埋れていた。

ピットは、P_1～P_8まで検出された。この内柱穴は、P_1、P_2、P_4、P_5、P_6、P_7の6個があり、径20～30cm、深さ15～25cmを測る。P_4は位置から柱穴と判断したが、径60cm、深さ15cmとなりやや大きくなる。床面のしっかり残っていた北壁側の柱穴の深さは15～22cmでやや貧弱である。P_3は、底面に第17図14、第18図24に図示した完形の坏・埦が入っていた。調理に関する貯蔵穴であるとおもわれる。P_8は、床面上部から落ち込みがはっきりしていたので、住居址と直接的な関連はなく、後に構築された土坑であると考えられる。径170×100cm、深さ40cmを測る。

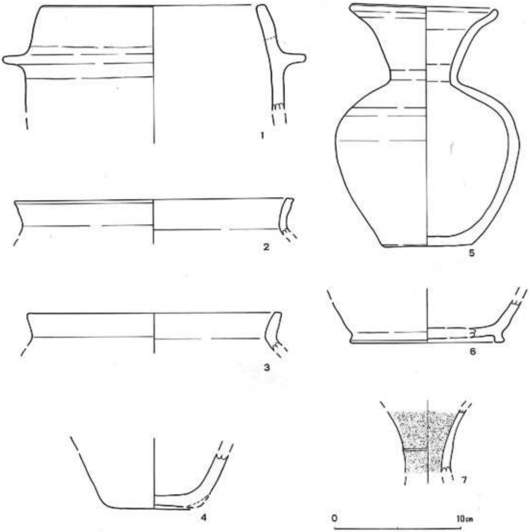
カマドの痕跡は見あたらなかったが、南東コーナーに確認面の時点から、80×60cm、厚さ4cmの範囲に焼土が堆積していた。断面を観察したが掘り込みは見られなかった。坏破片2点が焼土上にあった。また、焼土際には巨石が入り込んでいる。東側中央にあったカマド跡の一部分がこの巨石に押されてここまで運びこまれたのであろうか？

本住居址も泥流と共に流れ込んだ礫によって約半分以上の床が破壊されてしまった。しかし、



I層（黒 色 土）小石粒、砂多量、炭化粒子微量混入
II層（暗褐色土）小石粒、砂多量混入

第15図　Ｈ３号住居址実測図（1：70）



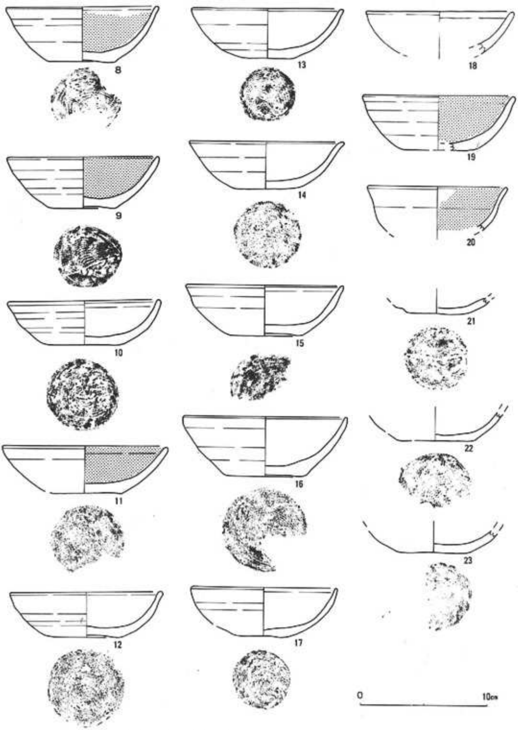
第16図　H３号住居址出土土器実測図No.１（１：３）

残った床面と良好な北壁の遺存状態により、大形住居址のプランの把握ができたことは幸いであった。

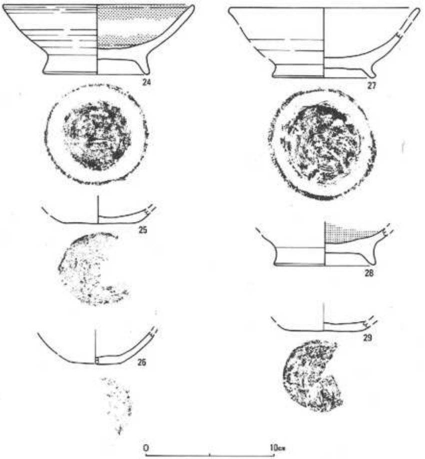
遺　物（第16～18図）

遺物は、羽釜、甕口縁部２点、甕底部１点、須恵器広口壺１点、灰釉瓶底部、瓶頸部片各１点、坏19点、埦３点と第48図４の鉄鐸を図示した。

第16図１は、羽釜で本遺跡中唯一の小片である。口径は17.8cmになると推測される。鍔の突出しは小さく短かい。口唇部は平に削り調整されている。粘土紐の積み上げ痕が内側で明確に



第17図　Ｈ３号住居址出土土器実測図No.２（１：３）



第18図　H３号住居址出土土器実測図No.３（１：３）

残っている。

２・３は甕口縁部の細片である。口辺部短く「く」の字状に外反し、口唇部に沈線状の溝があり、２はヘラ状工具を使用した痕跡が認められる。焼成後赤味が強く残る胎土を使用している。４は、甕底部であるが、かなり使用したとおもわれる。熱を受けて摩滅し、ところどころ剝落している。

５は、長頸壺である。頸部から口縁にかけて大きく開き、全体にロクロ痕が残っている。頸部から胴中央にかけて球状にふくらむ。１㎜～６㎜大の小石粒が器面全体に浮き出ていることと、乱雑なヘラや指の痕跡、二段のロクロ痕が沈線状に変形して巡っていたりでかなり乱雑な調整で口辺部のようなロクロ痕は残っていない。焼成は固く灰色を呈し、広口であることから当初、灰釉陶器に見えたが、釉が全く見られないことと粘土で作られていることから須恵器の粗悪品と理解できる。

第4表　H3号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
16－1	羽釜	(17.8) — —	最大径胴部にある。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
16－2	甕	(22.0) — —	口辺部「く」の字状に外反する。	ロクロヨコナデ 口唇部に一条のヘラケズリある。	ロクロヨコナデ	赤褐色 回転実測
16－3	甕	(20.0) — —	口辺部「く」の字状に外反する。	ロクロヨコナデ 口唇部に一条の弱いヘラケズリある。	ロクロヨコナデ	赤褐色 回転実測
16－4	甕	— — (7.2)		摩滅しているが、ヘラケズリ認められる。	指ナデや粗雑なヘラケズリ残る。	茶褐色 回転実測
16－5	須恵器 長頸壺	11.6 18.8 7.0	頸部から口縁に直線的に大きく開く。胴上で球状にふくらみ、底部にかけて直線的になる。	頸部～口縁はロクロ痕胴全体砂粒子の浮きでた粗雑な調整。	口辺部ロクロ痕、砂粒子目立つ。	暗灰色
16－6	灰釉 瓶	— — 12.0	かなり底径が広いので壺の底部かとおもわれる。	ロクロ痕 高台部に緑釉こごりで付着。	ロクロ痕	灰色 回転実測
16－7	灰釉 瓶	— — —		ロクロ痕 一条の沈線がある。	ロクロ痕 緑釉斑点状にある。	灰色 回転実測
17－8	坏	12.0 4.3 5.2	底部から内湾して立ち上り口縁部で外反する。 器厚はうすい。	ロクロヨコナデ 底部付近一部黒斑ある底部糸切り、目荒い。	ロクロヨコナデ 口辺から下は内面黒色。	褐色
17－9	坏	12.0 4.0 5.2	底部から直線的に立ち上り、口縁部で外反する。底部やや上底。	ロクロヨコナデ 底部糸切り、粘土の付着残る。	ロクロヨコナデ 内面黒色一部剥落中心に渦巻残る。	褐色
17－10	坏	12.0 3.5 5.8	底部から内湾して立ち上る。底径広く、器高浅いため安定感ある。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロ痕 稜強く残る。	褐色
17－11	坏	13.0 3.7 5.6	底部から直線的に開いて立ち上る。 器高浅い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後ナデ	ロクロヨコナデ 内面黒色	茶褐色
17－12	坏	12.0 3.5 5.0	底部から湾曲して立ち上る。 底径広く、器高浅いので安定感がある。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後、弱いヘラケズリ。	ロクロヨコナデ 丁寧に調整されている。	褐色
17－13	坏	12.0 3.9 4.0	底部から湾曲して立ち上る。 底径短く器高浅い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り、目荒い。	ロクロヨコナデ 一部分ヘラミガキのため赤褐色となる。	褐色、一部赤褐色
17－14	坏	12.2 3.7 4.8	底部から直線的に開き、口縁で外反する。	ロクロヨコナデ 摩滅しているが調整は丁寧、底部糸切り。	ロクロヨコナデ 摩滅しているが調整は丁寧。	赤褐色
17－15	坏	12.5 4.0 5.8	底部から直線的に開き、口縁付近で直立気味に外傾する。	ロクロヨコナデ 粘土付着少し残る。底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかに調整されている。	暗褐色
17－16	坏	12.8 4.7 6.2	底部から直線的に開き、口縁付近で内湾する。底径広いが口辺の器厚うすい。	ロクロヨコナデ 稜目立つ。 底部糸切り。	ロクロヨコナデ	茶褐色
17－17	坏	11.6 3.8 4.0	底部から湾曲して立ち上る。底径短かく器高浅い。器厚はうすい。	ロクロ痕 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心部細い渦巻痕1.5cmの巾にうすく残る。	茶褐色
17－18	坏	(11.6) (3.8) —	湾曲して立ち上る。	ロクロヨコナデ 粘土付着のデコボコ目立つ。一部黒斑ある。	ロクロヨコナデ	茶褐色 回転実測

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
17−19	坏	(12.0) 4.3 5.5	底部から湾曲して立ち上り、口縁部でやや外反する。	ロクロ痕 稜目立つ。	ロコロヨコナデ 内面黒色、一部褐色	赤褐色 回転実測
17−20	坏	(11.0) — —	湾曲して立ち上り口縁部で大きく外反する。	ロクロヨコナデ	ロコロヨコナデ 内面黒色、一部褐色	褐色 回転実測
17−21	坏	— — 4.2	器厚うすい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後弱いケズリ。	ロコロヨコナデ 内面黒色、一部褐色	褐色
17−22	坏	— — (6.0)	底径広く、器厚うすい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ 内面黒色	褐色 回転実測
17−23	坏	— — (5.5)	底径広い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目細かい。	ロクロヨコナデ 内面黒色	暗褐色 回転実測
18−24	碗	15.0 5.5 7.2	台部から直線的に開いて立ち上る。底径広く安定感がある。	ロクロヨコナデ 回転のヘラあと、砂粒子浮いている。底部糸切り後ヨコナデ	ロクロヨコナデ 砂粒子浮いている。部分的に黒斑多い。	赤褐色
18−25	坏	— — 5.5	底径広い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後弱いヘラケズリ。	ロクロヨコナデ	茶褐色
18−26	坏	— — 4.0	底径短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 一部黒斑ある。	褐色 回転実測
18−27	碗	15.0 5.2 8.0	台部低く径が広いため安定感がある。	ロクロヨコナデ 稜目立つ。底部糸切り後ヨコナデ。	ロクロヨコナデ	赤褐色 回転実測
18−28	坏	— — 8.0	台部低く径が広いため安定感がある。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ 回転の細い渦巻き残る内面黒色	褐色
18−29	坏	— — 5.8	底径広く、器厚はうすい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後ヘラケズリ。	ロクロヨコナデ 底面全体に細い回転の渦巻ある。	茶褐色

6・7は灰釉陶器で、6は残存部から底径12cmを測ると推測される。瓶の底部とおもわれる。表面台部にはこごりの緑釉がこびりついている。7は小瓶の頸部片で釉が内外面共にまだらに施釉されている。大原2号窯式に比定され、6・7はあるいは1個体になり得る。

8～23・25・26・29は坏である。口径12cm前後を測るものがほとんどであるが、中には11のように、底部から直線的に口縁に向けて大きく開くものもある。底径広く、器高の浅い、10・12、底径広く、器高の深い16のようなタイプもある。また、底径短く、器高の浅い13・14・17があり、この内、13・17は器厚がかなり薄い。8・9・19は内面黒色であるが、どれも全面に黒色吸着がおよんでいない。8は口縁部が褐色土で、9・19は口辺部の一部がまだらになっている。底部はほとんど糸切りがなされている。

24・27・28は塊である。台部から直線的に開いて立ち上るため口径は広く15cmを測る。台部の高さは低いが径は8cm前後で広い。24の内面はまだらに黒色が吸着している。28の内面黒色は均一化したきれいな黒色で吸着している。28は赤色が強い色調である。第48図4の鉄鐸は、

北側寄りの住居址中央の床面直上に出土した。信仰に関わる遺物として注目される。

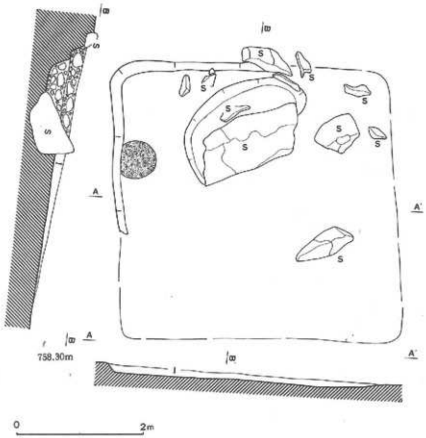
以上の出土遺物から、本住居址の所産期は、10世紀前葉に比定されよう。

（島田　恵子）

4）Ｈ４号住居址

遺　構（第19図）

Ｈ４号住居址は、調査Ⅰ区の東端、き・く－２・３グリット内に検出された。調査Ⅰ区では最上段にあたる。この部分は耕作土を10～20cm程削平すると、玄武岩の渦巻石が砕かれた状態で土層内に散乱していた。本住居址は確認面の土層の状態から住居址の存在は予想されたが、礫の散乱と住居趾内に入りこんでいた、150×85cmの巨石と南側はすでに地山層に達していたため、プラン確認の範囲が少なく苦慮した。

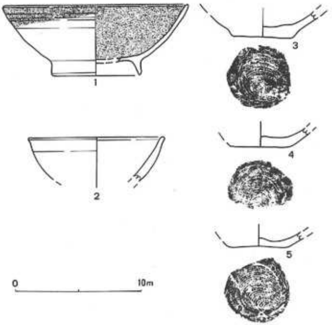


第19図　Ｈ４号住居址実測図（１：60）

結果、輪郭がやや把握できる北西コーナー側の住居址から2m離れた上場からトレンチをいれた。運よく、焼土の部分にぶつかったことと、土層が住居址とはっきり区分できたため掘り下げに入った。しかし、掘り下げは粉々に砕けた巨石の回りに散乱した石を取り去ることからはじめなければならなかった。

平面プランは、一辺2.3mを測ると予想される方形の住居址である。

壁は北西コーナーが5m残っていただけでそのほとんどが破壊され、住居址の痕跡をわずかとどめているにすぎない。壁高は10cm前後を測る。



第20図　H4号住居址出土土器実測図（1：3）

覆土は、砕けた礫を多量混入した黒色土で住居址の北側半分に10cm前後残っていただけである。床面はわずか北西コーナーに残ったのみで、そのほとんどが耕作により削り取られている。小石粒の多量混入した固い床面である。

柱穴は床面の攪乱により検出することができなかった。カマドは、西壁中央からやや北側寄りにその痕跡である火床が検出された。径56cmを測る範囲に2cmの厚さで焼土が残っており、付近には杯底部が散布していた。

図に示したように本住居址内は、巨石が床面に突きささるように転げ込んで、砕けた石を取り去ると径2m×1.4mの穴ができてしまった。その穴は片側に巨石がはり付いている。この他にも、90×35cm大、60×50cm大、40×15cm大の大きな石が、壁におおいかぶさるように、また床面にめり込んで散乱していた。図面に示した礫以外は転げ込んだ状態であったために取り去ったが、泥流によってかなりの礫が付近一帯に流れこみ住居址を壊した。

遺　物（第20図）

住居址の破壊が著しかったため遺物はカマド周辺と北西コーナー側に出土した。1は灰釉陶器埦の破片である。器厚うすく、台部は直立し、口縁にかけて直線的に開いて立ち上る。釉は、内面底部付近にまだらな緑釉が施釉され、口縁部はうすくなる。外側は口縁付近に透明な釉が

第5号　H4号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
20－1	灰釉埦	(14.0) 5.5 (7.0)	底部から直線的に開く。 器厚はうすい。	ロクロ痕 稜・筋目立つ。	緑色の釉がつき粒子荒く、アバタ状。	白灰色 回転実測
20－2	坏	(10.8) — —	湾曲して口縁部に至る。 器厚うすい。	ロクロ痕 口辺の稜目立つ。	ロクロヨコナデ	茶褐色 回転実測
20－3	坏	— — 4.8	器厚は厚く安定感ある。	ロクロ痕 調整荒い 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心に渦巻残る。丁寧な調整なされている。	茶褐色
20－4	坏	— — 4.6	器厚は厚く安定感ある。	ロクロ痕 調整荒い 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心にポッチ残る。丁寧な調整なされている。	褐色、底部外面一部黒斑
20－5	坏	— — 4.6	器厚はうすい。	ロクロ痕 調整は丁寧である。 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心の渦巻明瞭に残る。	褐色

施釉されている。虎渓山1号窯式の東濃産である。

2～5は坏口辺部と底部片であり、共に糸切りが施されている。1は、湾曲して口辺部に至る小形の坏でH1号住居址から多量に出土したタイプである。3は器厚が厚くがっちりしている。4もやや厚い。5は器厚がうすくなり焼成固い。

以上の出土遺物から判断して、本住居址は10世紀中葉に比定されよう。

（島田　恵子）

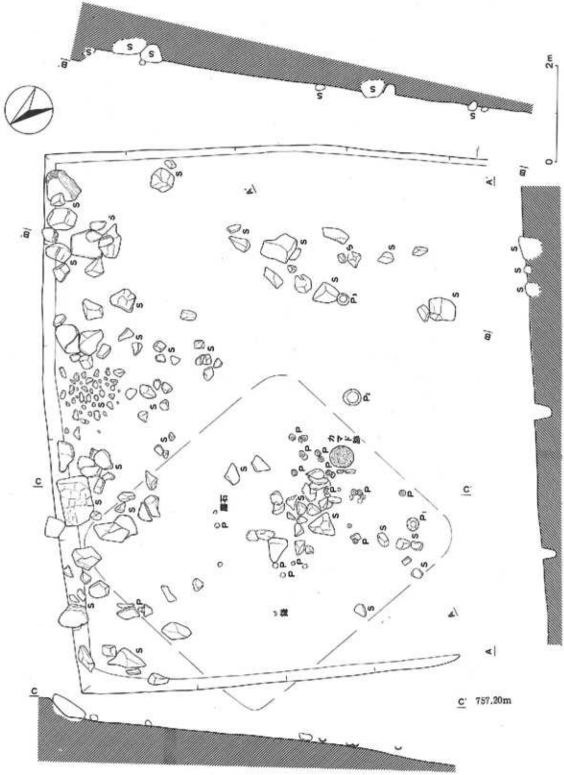
5）H5号住居址

遺　構（第21・22図）

本遺構は、調査Ⅱ区に検出された。この地点は薬用人参が耕作されていた畑で北から南へかけて傾斜している。上段と下段では比高は約2mの段差があるが、畑は傾斜した自然地形のままに耕作されていた。

本地区からは、北東側にH6号、H7号住居址がようやくその姿をとどめていたにすぎない状態でわずかに残り、西側の下段部は全面黒色土に覆われておりプラン確認を行なっても上部では全く変化がみられず、止むなくトレンチを南北に一本、東西に二本入れて試掘を行った。20cm程掘り下げると礫層にあたった。そこからさらに15～20cm掘り下げると土層が褐色土に変化して地山層に達した。こうした状態から判断できることは、この地点に住居址が存在していたが、薬用人参の耕作により深耕がおこなわれ、住居址覆土を床面下まで動かしてしまったと考えられた。そのため、黒色土の濃い地点、け・こ・さ・し－8～12グリッド内、し・す－11・12グリッド内の約122㎡を全面掘り下げた。

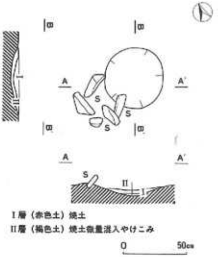
その結果、け～し－8～12グリッド内の平面図を第21図に示した。上段には、1m×70cm大



第21図　H5号住居址実測図（1：80）

の巨石をはじめとした大きな礫群が地山層にくい込んだ状態に散乱していた。この他、上段中央に図示した5㎝～20㎝大の小さな礫も地層中に埋めこまれたようにぎっしりつまっていた。平面図に示した礫群は大きくて地面にくい込んでいたものばかりであるが、この他覆土中には浮いた状態の礫もかなり多く、この礫を取り上げなければ掘り下げが進まないために、かなりの礫を取り上げた。玄武岩を中心とした渦巻石で板状に割れた状態のものが多かった。

すぐ眼前の山から崩れ落ちたもので、H2号、H3号、H4号住居址もこのような礫が住居址内に入り込んで床面が破壊されていたが、本址の状況もかなりひどいものである。



第22図　H5号住居址カマド実測図（1：30）

カマドの痕跡と遺物の出土状態から住居址の範囲をおおよそとらえ、そこからの推定で見ると、平面プランは、南北5.3m、東西6mを測り方形を呈するプランとなろう。覆土は礫の混入した黒褐土層で白灰色の小石粒を多量に混入していた。遺物が出土した直下の床面はなめらかで固く、踏みしめた感じのする良好な状態にあった。

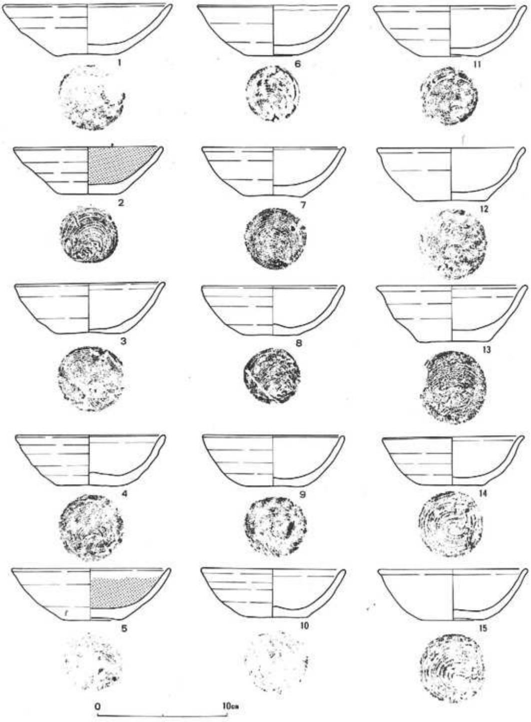
ピットは、掘り下げの段階で漆黒色土の濃い土層であったため、東西コーナー側のP_1が明瞭に確認された。径25㎝、深さ30㎝を測る。P_2は、径35㎝、深さ30㎝を測る。カマドから80㎝離れており、位置的な関係から住居外とも考えるが、住居址のプランが推定であるため、本住居址に共なう柱穴である可能性もある。P_3は、径25㎝、深さ23㎝を測る。住居址からかなり離れているため、共なうものであるか判断が難しい。その他住居址内から柱穴は検出できなかった。

カマドは、径45㎝の範囲に焼土が2～4㎝程残存していたことにより、火床の痕跡を認めることができた。H1号、H2号住居址と同様、東側カマドである。焼けた5個の石が火床西南側にあり、図に示したように土中に埋め込まれている石は3個あった。また、カマドの両側には、銘々の器である坏、埦類が20個近く完形品で出土している。

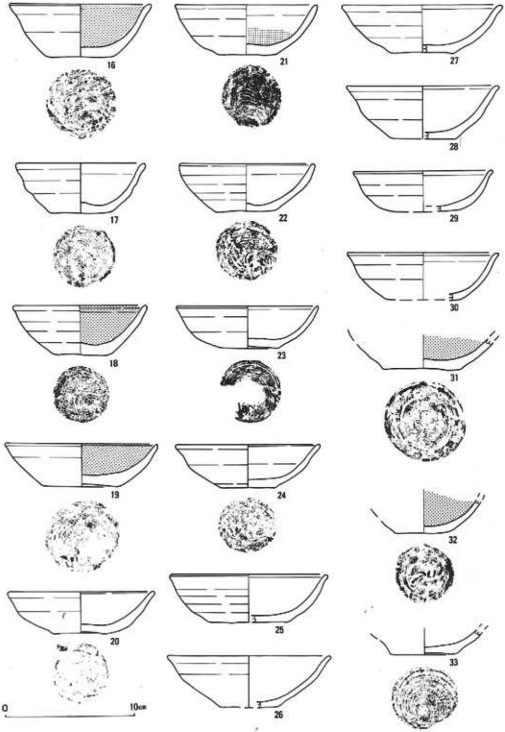
遺　物（第23～28図）

本住居址から出土した遺物は、坏、埦、灰釉陶器埦、土錘、鎌、ふいごの羽口、臼玉、須恵器短頸壺、磨石、打製石鏃などである。その大部分が完形、もしくは完形に近く、その他破片は3㎝大の坏細片、縄文中期土器片で、破片の出土量は非常に少ない。また、甕の出土がなく、その破片も5～6点を数えるのみであった。

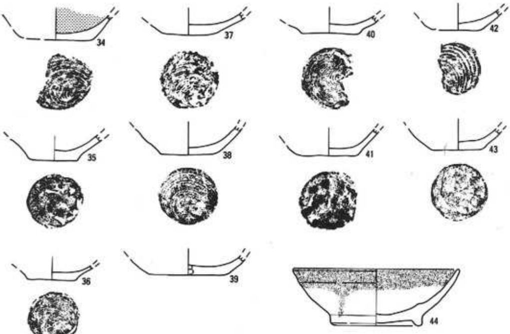
第23～25図、1～43は坏形土器を図示した。これらの坏にも器形、大小の差などに5つのタ



第23図　H 5 号住居址出土土器実測図（1：3）



第24図　H 5 号住居址出土土器実測図（1 ： 3）

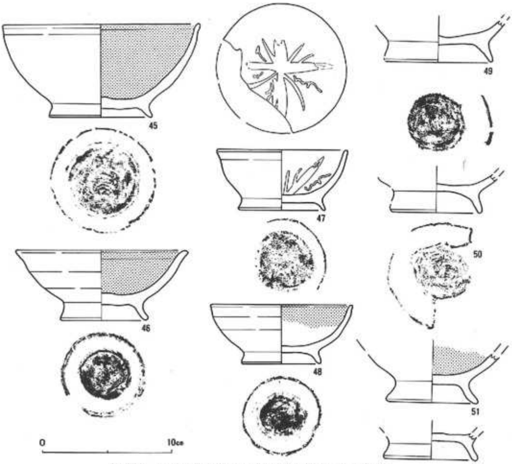


第25図　Ｈ５号住居址出土土器実測図No.３（１：３）

イプがみられるので、タイプ別にみていきたい。No.14・17・18・22は、口径10cm強、器高４cm弱、底径５cm弱を測る。器形は、底部から湾曲して立ち上るため、小形ではあるが深さが感じられる。14が褐色で17が赤褐色、18・22は黒斑が大部分を占めて黒味が強い。14は調整がなめらかであるが、17・18・22は外面にロクロの稜が残りザラついている。また、14は、器形がゆがんでいて、口径は１cmの差があり最大径11cmとなる。

次のタイプは、口径11cm強で前者のタイプより１cm大きくなる。７・８・９・10・20・21・23・24の８点があげられ器高は、3.3～４cmを測る。特に浅いのは、20・23・24で3.3cmである。20・24は特に底径が短く４cmで、23は4.8cmを測る。７～10・21は、器高４cm弱、底径4.2～4.8cmを測り、全て糸切り底部である。調整は内外面共になめらかに施されているが、ロクロ痕の稜が目立つのは、８・９・10・21で、器肌のザラついているのは９が目立つ。色調は赤味が強いのは９で、７と23の２点の他はところどころに黒斑がみられる。24は器形がゆがんでいる。

３番目のタイプは、口径11.6～13.2cmを測りさらに一まわり大きくなる。１・３～６・11～13・15・25・27・28の12点がある。器高3.7～3.9cmを測る浅いものは、１・３・25・27の４点があり、他は４cmを測る。ただし、13は4.4cmで深くなる。底径は、４cmを測る短いNo.６が１点あり、１・５・11・15・27は4.5～4.8cmを測る。残りの３・４・12・13・25・28の６点は５cm～5.8cmを測る。底径もこの位の広さになると安定感がある。



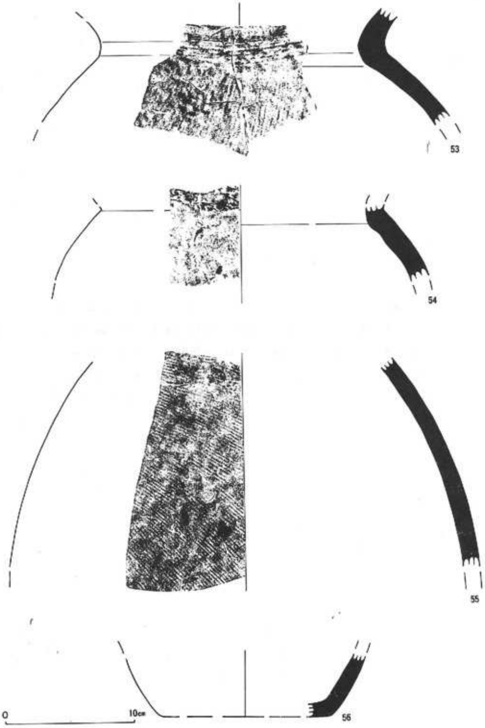
第26図　Ｈ５号住居址出土土器実測図№３（１：３）

色調で赤味の強いのは、３・12があり、他は褐色土となる。酸素吸着が多く黒味がかっているのは、１・４～６・15・25・27で、11・13・28は褐色を呈する。

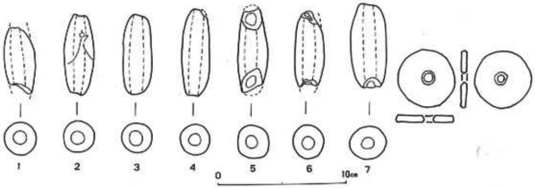
調整は、６・15・27が内外面共に丁寧にロクロナデされているが、他はロクロ痕の稜がくっきり残ったり、器肌がややザラついている。器厚が比較的うすいのは、６・11・25の３点があげられる。３は、底部中央の器厚が特にうすく２㎜でここを中心にヒビ割れが生じている。

19は、口径12cm、器高3.4cm，底径5.8cmを測り、器高が浅く、口径が広いため安定した器であるが、皿形ともいうべき形状にあり、器厚が厚く重量がある。大半が黒斑で黒味がかっている。

２・16・31・32は、内面黒色の坏である。２・16・32は小形で、２は口径11.7cm、器高3.7cm、底径4.6cmを測り、器高浅く、底部から直線的に大きく開く器形である。16は内湾して立ち上り口縁部で大きく外反している。器高4.1cm、底径4.8cmを測り広いので安定している。内面黒色は真黒であるがミガキが全くみられない。32は、底径４cmを測る。口辺部に乱雑なヘラミ



第27図　H 5 号住居址出土土器実測図No. 5 （1 : 3）



第28図　Ｈ５号住居址出土土錘・臼玉実測図（１：３）

ガキがみられるが口辺部を欠失している。

31は、口縁部を欠失しているが、推定では口径13cm、器高4.2cmを測るとおもわれる。底径は5.8cmで内面の底径が広いのでゆったりしている。

44は、灰釉陶器の埦である。約３分の１強の破片であるが、口径13cm、器高4.4cm、底径７cmを測ることが推定復元できる。内面に重ね焼の痕跡が強く残り、釉は口縁部に浸し付けで施釉しており、外面は釉が台部にしたたり落ちている。灰釉陶器はこの他、埦口縁部片２点、小瓶１点、長頸壺片１点の計４点が出土している。虎渓山１号窯式の東濃産である。

第26図No.45～52は埦である。45は内面黒色で内外面共にヘラミガキが施されている。口径は15.5cm、器高7.3cm、底径８cmを測る大形の埦である。台部は１cmで低い。底部糸切りは中央にわずか残るが大半ヘラケズリされている。台部から大きく湾曲して立ち上るためかなり深くどんぶりのような器である。器厚はうすく、灰褐色を呈する。

46も内面黒色であるがミガキがないため光沢がない。調整も全体的に荒い。口径13.5cm、器高5.5cm、底径6.8cmを測る。内湾して立ち上るが口縁部が外反し、器形も形よく、安定している。

47・48は小形の埦である。47の口径は10.3cm、器高4.7cm、底径6.8cmで深くて底径広いため安定している。赤味が強くきれいな色調の埦である。内面には暗文が施されている。48は46の大形の埦のミニチュアともいうべき小形埦で、内外面共にヘラミガキされている。灰褐色を呈し、色調も同じであるため胎土、作った人間も同じ人であるとおもわれる。

49～52は高台部である。４点共に台部は1.6～２cmを測り高くなる。外側に反る台部は、49・51・52でやや反るのは50である。

第27図は、須恵器短頸壺の頸部片と胴部、底部片である。覆土と礫に入り混って出土した細片である。共に弱い平行叩き目文が施されている。

第6表　H5号住居址出土一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
23－1	杯	13.2 3.9 4.6	底部から直線的に開いて立ち上る。	ロクロヨコナデ 稜目立つ。底部糸切り上底気味	ロクロヨコナデ	暗褐色 回転実測
23－2	坏	11.7 3.7 4.6	底部から直線的に開いて立ち上る。	ロクロヨコナデ 稜目立つ。 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心に渦大きく残る。内面黒色	褐色
23－3	坏	11.8 3.8 5.2	底部から直線的に開いて立ち上る。 底部中央は器厚うすくなる。	ロクロヨコナデ 調整やや荒い。底部糸切り目細かい。	ロクロヨコナデ 丁寧に調整されている。	赤褐色
23－4	杯	11.8 4.0 5.0	底部からやや内湾気味に直線的に開く。	ロクロ痕 4段の稜明瞭に残る。底部糸切り目細かい。	ロクロヨコナデ 底部中央やや盛り上がっている。	暗褐色
23－5	杯	12.4 4.0 4.5	底部から直線的に開いて立ち上る。 器形円形でなくいびつである。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後弱いナデ	ロクロヨコナデ 吸着による内面黒色	褐色
23－6	杯	12.0 4.0 4.0	底部から湾曲している。 底径短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り、粘土付着	ロクロヨコナデ なめらかな調整	暗褐色
23－7	坏	11.3 3.7 4.4	底部から湾曲している。 底径短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	褐色
23－8	坏	11.2 3.8 4.2	底部から湾曲している。 底径短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整 中心にポッチ残る。	褐色、一部分黒斑
23－9	杯	11.2 4.0 4.4	底部から湾曲している。 底径短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	赤褐色 一部分黒斑
23－10	杯	11.4 3.8 4.8	底部から湾曲している。 底径短い。口縁円形でなくいびつ。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	褐色、一部分黒斑
23－11	坏	12.0 4.0 4.6	底部から内湾して立ち上り、口縁部付近で外反する。器厚うすく、底径短かい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	褐色
23－12	坏	11.6 4.1 5.6	底部から湾曲して立ち上り、口縁部付近で大きく外反する。 底径広く器厚うすい。	ロクロヨコナデ 調整荒い 底部糸切り。	ロクロヨコナデ	赤褐色
23－13	杯	11.8 4.4 5.5	底部から直線的に開いて立ち上る。 底径広く安定している。	ロクロヨコナデ 調整荒い 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	赤褐色
23－14	杯	11.0 3.8 5.0	底部から湾曲して立ち上り、口縁付近で外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	茶褐色 一部分黒斑
23－15	坏	11.7 4.0 4.8	底部から湾曲して立ち上り、口縁付近で外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	暗褐色 一部分黒斑
23－16	坏	11.1 4.1 4.8	底部から内湾気味に立ち上り口縁部で大きく外反する。	ロクロヨコナデ 調整荒い。底部糸切り目細かい。	ロクロヨコナデ 内面黒色	暗褐色 一部分黒斑
23－17	坏	10.2 3.9 4.8	底部から湾曲して立ち上る。 小形である。	ロクロ痕、器面荒い。稜明瞭に残る。底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心にポッチ大きく残る。	赤褐色
23－18	杯	10.5 3.8 4.0	底部から湾曲して立ち上る。 小形である。	ロクロ痕、器面荒い。稜明瞭に残る。底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心にポッチ大きく残る。	黒褐色

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
24－19	杯	12.0 3.4 5.8	底部から内湾し口縁部で外反する。器高浅く皿状となる。底径広く、器厚が厚く安定している。	ロクロヨコナデ 底部糸切り上底である。	ロクロヨコナデ ヘラミガキ	黒褐色
24－20	杯	11.5 3.3 4.0	底部から内湾し、口縁部で大きく開く。底径短かく器高浅い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り、粘土付着。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	暗褐色
24－21	杯	11.2 3.9 4.5	底部から湾曲して立ち上る。 底径短かい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	褐色、一部に大きく黒斑ある。
24－22	杯	10.6 3.9 4.5	底部から直線的に開き口辺で湾曲する。左側は湾曲して立ち上っている。	ロクロヨコナデ 綾強く残る。 底部糸切り。	ロクロヨコナデ 中心のポッチ大きく残る。	黒褐色、全体に黒斑多い。
24－23	杯	11.2 3.3 4.8	底部付近直線的であるが大半は湾曲して立ち上っている。器高浅く、口縁径広い。	ロクロヨコナデ なめらかな調整 底部糸切り上底。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	暗褐色
24－24	杯	11.4 3.4 4.0	底部から直線的に開き、口辺付近で外反する。口縁円形でなく木葉状でゆがみある。	ロクロヨコナデ 砂粒子目立ち、調整のデコボコがある。底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	褐色
24－25	杯	12.4 3.8 (5.8)	底部から内湾して立ち上り、口縁で外反する。	ロクロヨコナデ 内面に比べて荒い調整底部糸切り後ヘラケズリ	ロクロヨコナデ なめらかな調整	暗褐色 回転実測
24－26	杯	12.8 4.0 (4.5)	底部から直線的に開いて立ち上る。 器厚はうすい。	ロクロヨコナデ なめらかな調整 底部糸切り後弱いケズリ	摩滅	褐色 回転実測
24－27	杯	12.5 3.7 (4.8)	底部から内湾気味に立ち上り口辺付近で外反する。 底径短い。	ロクロヨコナデ なめらかな調整 底部糸切り後弱いケズリ	ロクロヨコナデ なめらかな調整	暗褐色 回転実測
24－28	杯	12.0 4.2 (5.0)	底部から中程まで直線的に立ち上り、口辺にかけてやや直立気味に立ち上り外反する。	ロクロヨコナデ 赤石の小石粒浮いている。底部糸切り後ヘラケズリ	ロクロヨコナデ	茶褐色 回転実測
24－29	杯	11.0 3.2 (5.2)	底部から湾曲して立ち上り、口縁部外反する。器高浅い。 器厚はうすい。	ロクロヨコナデ なめらかな調整 底部糸切り。	ロクロヨコナデ	明褐色 回転実測
24－30	杯	(12.0) 3.7 (5.8)	底部から湾曲して立ち上り、口縁部で外反する。器厚はうすい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ なめらかな調整	赤褐色、黒斑一部にある。
24－31	杯	— — (5.8)	底部から大きく開いて立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後ヘラケズリ	ロクロヨコナデ 内面黒色、ヘラミガキ	褐色、黒斑一部にある。
24－32	杯	— — (4.0)	底部から内湾して立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り後ヘラケズリ。底部中央にデコボコある。	ロクロヨコナデ 内面黒色、ヘラミガキ	褐色
24－33	杯	— — (5.0)	底部少し上底。	ロクロヨコナデ 調整荒い 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ なめらかな調整 中央に渦巻残る。	赤褐色
25－44	灰釉埦	13.0 4.4 7.0	底部から内湾気味に直線的に立ち上る。高台は低い。	ロクロ痕	ロクロ痕 重ね焼の部分残る。	緑灰色
26－45	埦	15.4 7.3 8.0	底部から大きく湾曲して立ち上る。高台低く器高は浅い。器厚はうすい。	ロクロヨコナデ 外面もヘラミガキされてなめらか。糸切り後ヘラミガキ	ロクロヨコナデ 内面黒色、ヘラミガキ	灰褐色
26－46	埦	13.5 5.5 6.8	底部から内湾して立ち上り、口縁部で外反し、口径広くなる。	ロクロヨコナデ やや荒い調整	ロクロヨコナデ 内面黒色、ミガキ少ない。	茶褐色
26－47	埦	10.3 4.7 6.8	底部から大きく湾曲し、口縁付近直立気味に立ち上る。高台の径長く安定感がある。	ロクロヨコナデ やや荒い調整 底部糸切り後ヘラケズリ。	ロクロヨコナデ ヘラミガキ 中央に暗文ある。	赤褐色 (赤味強い)

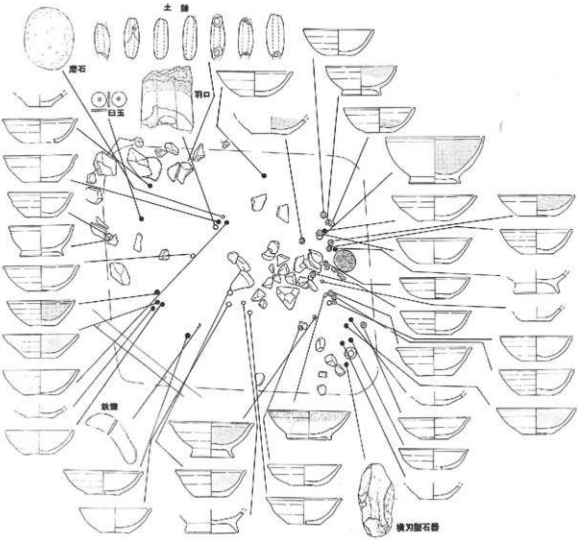
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
26−48	埦	11.2 4.7 6.2	底部から大きく湾曲して、口縁付近直立気味に立ち上る。	ロクロヨコナデ ヘラミガキ	ロクロヨコナデ ヘラミガキ	白灰色、一部分黒斑ある。
26−49	埦	— — 7.4	器厚はうすい、台部外側に大きく開く。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	茶褐色
26−50	埦	— — 8.4	器厚はうすい、台部外側に大きく開く。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	暗褐色
26−51	埦	— — 7.0	器厚はうすい、台部外側に大きく開く。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	暗褐色
26−52	埦	— — 7.0	器厚はうすい、台部外側に大きく開く。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ 内面黒色、弱いヘラミガキ	暗褐色

第28図は土錘７点を図示した。土錘は北西コーナー寄りの礫群の間にまとまって出土した。コーナー側にあることから住居址のカベにかけてあった網が落ちて朽ちたと考えられる。完形品である。２～４・７は長さ７～６cm、最大径2.2～2.8cmを測り、手作りのためかそれぞれバラバラである。孔は径１cmで円形を呈している。これは芯にした丸棒が同一のものであったと思われる。１・６は褐色で黒斑がないが、２～５・７は暗褐色を呈し黒斑が多い。調整痕は使用による摩滅でわかりにくいが、ヘラケズリの後ナデが行われている。また、３は芯棒に粘土を巻きつけて作り出した接合の部分が顕著に観察される。孔の器肌はスベスベしていて調整はここが最もきれいである。竹のようなものかあるいは芯棒はきれいに磨いたものを使用していたことが伺える。さらに、２には文字のような印がみられる。上部の３mm大の円形は白色の石が入り込んでいるところであるが、先の尖った細いもので描いた印である。

臼玉は、偏平で厚さ２mm弱である。直径1.7mmで孔は２mmを測る。石質は細粒砂岩で白灰色を呈し、ゴマ塩状に点々と斑点が散らばるように浮き出ている。

また、本住居址からはふいごの羽口が２点出土した。１点は表土削平中に出土し、２点目は住居址中央からやや北西寄りの覆土上部からの出土である。転がり込んだような状態であった。さらに、住居址の南西コーナー寄りからは鉄鎌が出土している。この他、縄文土器、石鏃、磨石なども出土しているがこれ等は区分けして図示し、詳細は別記してある。

本住居址の遺物出土状態を第29図に示した。上部の山から崩れて住居址内に入り込んだ礫群の周囲とカマドの周囲から集中して出土している。薬用人参の深耕にもかかわらず、これだけの完形品もしくはそれに近い半完形品の多量の出土は驚くべきものである。その大半を坏形土器で占めており、煮炊用の甕の出土が全くなく、細片５～６点のみということも不思議な現象であるとおもわれる。カマド跡と考えられる火床の痕跡も認められているが、このように多量の銘銘の器の出土は、本住居址の特殊性が感じられる。ふいごの羽口２点の出土がそれを物語っているようにおもわれる。



第29図　H５号住居址出土遺物状態図

本住居址の所在する畑の地形は急傾斜であることと、礫群の多量の流れ込みにより農工具も深く入り込まなかったことが考えられる。そのため特に礫の周囲に遺物が集中して出土したものと考えられる。また、銘銘の器である多量の坏形土器の出土は、煮炊きは別のところで行い食事をする場であったことも想定される。破壊をまぬがれたH１号住居址からも多量の坏形土器とおびただしい破片が出土していることを考えると同様の用途の住居址であった可能性がある。

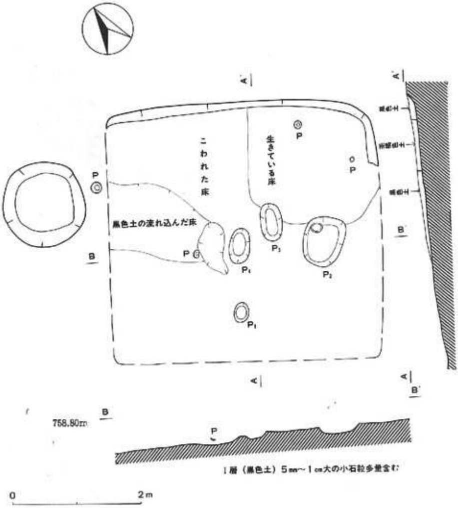
本住居址の所産期は、10世紀中葉に比定されよう。　　　　（島田　恵子）

6）H 6 号住居址

遺　構（第30図）

本住居址は、調査Ⅱ区の東側最上部に検出され、グリッドは、た・ちー11・12にあたる。本址も泥流により遺構が大方破壊されていた。遺跡立地の地形は、南面した傾斜地にあり、長い間の耕作によって上方の土は下方に移動する。従って遺構の上部はさらに破壊され、プラン確認をした耕作土直下はすでに床面に達している部分と、床面は流れてしまっている部分とがあった。プランは、住居址上段部の北東側に黒色土を基調とする土層が 8 cm程堆積していたことと、遺物が出土していた状況によって住居址の存在が想定されたため掘下げに入った。

平面プランは、南北410cm、東西430cmを測り、方形を呈すると推定される。壁は北東側に一



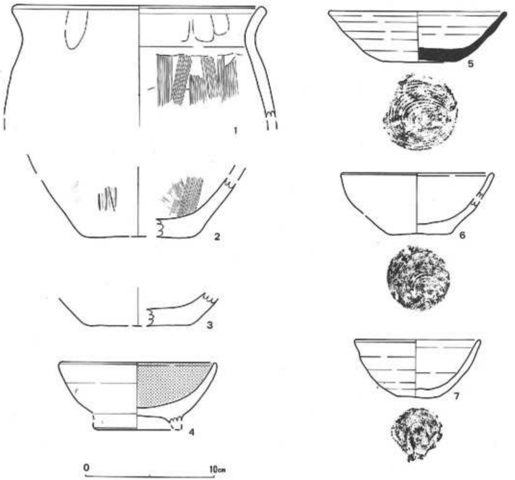
第30図　H 6 号住居址実測図（1：60）

部残ったのみで、高さは10cm前後を測る。

覆土は、真中に茶褐色土が入り均一的ではない。これも耕作による破壊部分とそうでない部分とによるものであろう。本住居址の検出された一帯は、Ｈ５号住居址の地点とは異なり、地山層が黄色であつて、この覆土の残存はかなり目立つ状況にあった。

床面は、図に示したように東側コーナーがわずかに残っていただけで、そのほとんどがなくなっていた。西側には黒色土が流れ込んでおり、その黒色土を掘り下げると５cmで流れ込み層は終っていた。南側は40cm程床面が流れてしまっている。

ピットは４個検出された。そのうち柱穴は、南側のほぼ中央に１個検出され、径30×20cm、深さ10cmを測る。P_2は住居址中央の東寄りに位置し、80×65cm、深さ23cmを測る。中から20cm



第31図　Ｈ６号住居址出土土器実測図（１：３）

第7表　H6号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
31－1	甕	(20.0) — —	口辺「く」の字状に外反し、ゆるやかに胴部へ湾曲し、最大径をもつ。	口縁部～頸部に指痕ある。	口縁～頸部に指痕ある。胴上ハケメ調整	茶褐色 回転実測
31－2	甕	— — (7.5)	底部から胴部へ大きく開く。	ハケメ調整 底部なめらかに調整	ハケメ調整	茶褐色 回転実測
31－3	甕	— — (8.0)	底部から胴部へ大きく開く。	ナデ調整 底部へラケズリ	ヨコナデ	茶褐色 回転実測
31－4	坏	12.4 5.2 (6.8)	台部から内湾して立ち上る。器厚が厚く底径長いので安定している。	ロクロヨコナデ 口辺部一段の稜強く残る。	内面黒色 ヘラミガキ	褐色
31－5	須恵器 坏	(14.0) 4.0 5.6	底部から直線的に開いて立ち上る。器高は浅い。	ロクロ痕 底部糸切り。	ロクロ痕 中心付近の底面に乱れた粘土の塊り付着している。	青灰色 回転実測
31－6	坏	(12.0) (4.8) 4.8	底部から内湾気味に立ち上る。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ	明褐色
31－7	坏	9.9 4.5 3.2	底径短く、湾曲して立ち上るため器高深い。	ロクロ痕 稜強く残る。底部乱れた粘土の付着。	ロクロヨコナデ 中心部にボッチ残る。調整丁寧	茶褐色 内面の底部付近暗灰色

大の礫と、坏口縁部が出土した。P_2は住居址に共なう貯蔵穴的な土坑であるものとおもわれる。P_3、P_4は楕円形を呈した、深さ8～10㎝の貧弱な穴で耕作による凹みかとも考えられる。

カマドの痕跡、焼土も全く遺残していなかった。しかし、北東側上段部中央寄りに土器片の散乱していたところがあり、この左脇にあったとも考えられるが全く痕跡が認められなかった。

遺　物（第31図）

本住居址はそのほとんどが流れ去っていたにも関わらず、甕口辺部、胴部、底部、坏完形品1点、ほぼ完形品1点、底部1点、口縁部片、須恵器坏1点が出土した。

1は、口辺「く」の字状に外反する甕口辺部片である。内面にハケメ調整があり、内外面共に口辺に指痕がくっきり残っている。焼成固く砂粒子が浮いていないためなめらかである。2・3は甕底部片である。3は1の底部片で同個体かとおもわれる。2は砂粒子が目立ち調整やや荒い。4は、内面黒色の埦である。ヘラミガキされ円形で形が整っている。台～底部にかけて器厚が厚く重くどっしりしている。5は、須恵器坏で底部から直線的に大きく開くため口径が広い。糸切り底部である。住居址中央からやや西南寄りの覆土中より出土した。

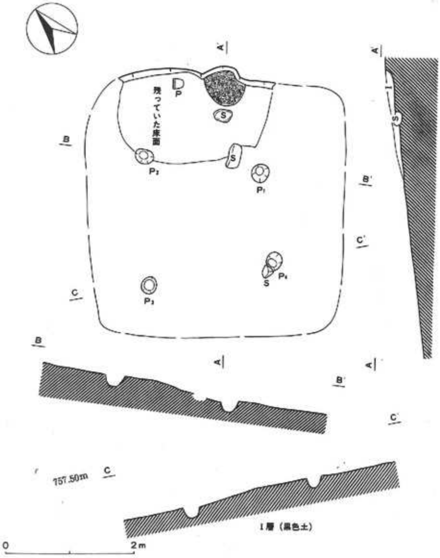
6は、底径4.8㎝を測る小形の坏で底部から内湾気味に立ち上る。7は完形品で、底径3.2㎝と短く、湾曲して立ち上るため深い小形の坏である。甕破片と共に東側上段に出土した。

以上が本住居址からの出土土器である。破壊した住居址であったがこれだけの資料が得られたことは幸いであった。住居址の所産期は10世紀前葉に比定されよう。　（三石　延雄）

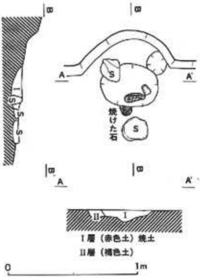
7）Ｈ７号住居址

遺　構（第32・33図）

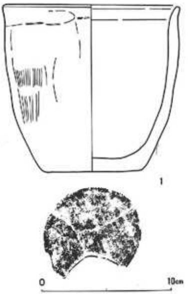
Ｈ７号住居址は、調査Ⅱ区の東端、ち・つ－14・15グリッド内に検出された。Ｈ６号住居址から８ｍ離れた地点に地形的傾斜のなりに住居址の中心を定めている。付近は黄色土の地山層であったため、住居址のほんの一部分を覆っていた黒色土があり、掘り下げてみるとカマドらしき焼土と小形甕が約半分残っていたことにより住居址の存在が明らかとなった。



第32図　Ｈ７号住居址実測図（１：60）



第33図　H７号住居址カマド実測図（１：30）



第34図　H７号住居址出土土器実測図（１：３）

第８表　H７号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
34－1	小形甕	14.0 13.0 7.6	口縁短かく頸部のくびれが弱い。最大径は口縁部にある。底部からかなり直立気味に立ち上る	口辺部指によるヨコナデ胴部ハケ目状の工具痕弱く残る。底部ヘラナデ	ロクロヨコナデ 底面指痕ある。	暗褐色

平面プランは、カマドの位置から想定すると一辺４ｍを測る方形プランの住居址と推定される。カマドを中心とする主軸方位は、N－41°－Eを示す。

残っていた北壁は９㎝の高さで、黒色土に覆われていた。床面はカマドから北西側にわずか残ったのみで、そのほとんどが流れてしまった。

ピットは４個検出されたが、P_1は石が中に入っていたため掘り込みが貧弱で、石によって生じた穴であるようにおもわれた。P_2、P_3は径25～30cm、深さ20cmを測り柱穴というべきしっかりした掘り込みを呈していた。P_4も貧弱な掘り込みで耕作によって生じたように感じられた。

カマドは、北壁中央に位置しやや壁の外側まで掘り込まれている。火床は、45×34cmの楕円形でわずか凹んでおり、焼土が４～８㎝の厚さで堆積していた。火床には熱を受けて赤く変色した10cm大の石が２個埋っていた。火床の北東側には石が埋め込まれていた痕跡を示す径15cmの掘り込みが認められる。その他20cmの礫が２個火床の際に存在していた。

本住居址はわずかな遺存状態であったが、思いもよらない住居址の検出となった。

遺　物（第34図）

出土遺物は、本遺跡の住居址から唯一の口縁部～底部までつながっている小形甕が1点検出された。約半分が横になった状態でカマド左脇に残っていた。上面は、耕作中にとび散ってしまったかのように欠失している。

口辺部が短かく、頸部のくびれが弱い。くびれ部分の調整も乱雑である。内面は口縁～頸部にかけておこげが付着して黒味かがっている。口径14cmで最大径は口縁にある。器高13cm、底径7.6cmを測る。同器形とおもわれる底部がH3号住居址から出土している。

本住居址は、出土遺物が少ないがカマド内から坏口辺部2点が出土し、それ等から所産期を判断すると、10世紀後葉に比定されよう。（島田　恵子）

8）H8号住居址

遺　構（第35～37図）

本住居址は、調査I区中央の西端、あ・い－3・4グリッド内に検出された。H3号住居址が北側に、H1号住居址が南側に位置し、二つの大型住居址の中間に存在している小形の住居址である。本遺構は上部での確認は困難であった。上面土層は多少黒いとは感じても輪郭となると一帯の地山層と大差ない色調であり、プラン確認を行っても強粘土層と礫に草かきがはじかれ、刃がとぶばかりではかどらないので、おおよその輪郭にとどめてトレンチにより掘り下げを開始した。結果、予想通りのプランでH8号住居址が完掘した。

平面プランは、南北410cm、東西510cmを測り、東西に長い長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－17°－Eを示す。

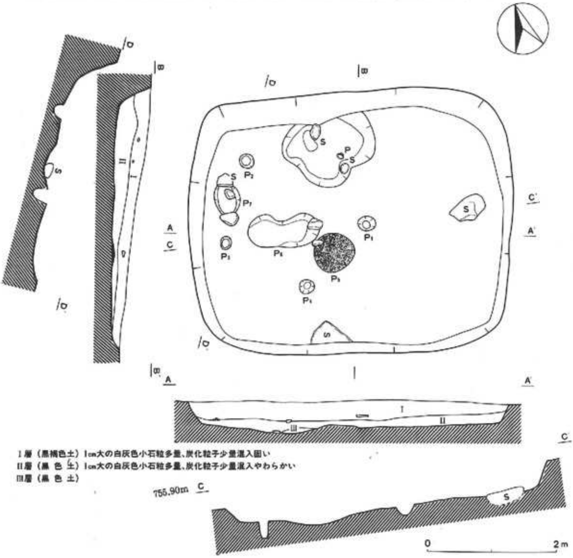
壁は、地形的な関係から北壁が高く、良好な遺存状態を示していた。順を追って壁高をみると北壁50cm、東壁の中央が37cm、西壁の中央が30cm、南壁は18cmと徐々に低くなる。

覆土は、2層により形成される。I層は黒褐色土で1cm大の灰色の小石粒を多量、炭化粒子を少量混入し、コチコチに固い土層であった。II層は多少やわらかく、I層より黒色が強かった。小石粒少量と炭化粒子を少量混入していた。III層とした土層は、P_5の埋土で黒色を呈したやわらかい土層であった。

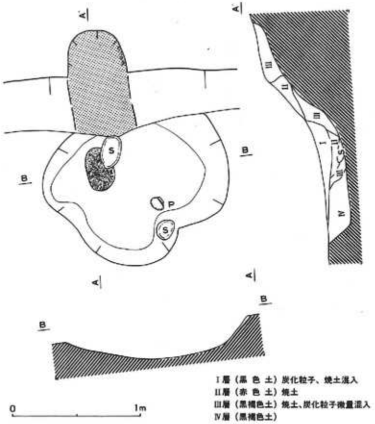
床面は、小礫の浮き出た部分もあるがほぼ平坦であった。レベル的にはH1号住居址と同様南壁側が10cm程低くなる。

ピットは6個検出された。そのうちP_1～P_4までが径28～18cmを測る柱穴状のピットで深さ28～14cmを測る。位置的に西側に集まっていて、東側には精査を行なっても全く検出できなかった。P_5～P_7の実測図を第37図に示した。P_5は住居址中央のやや西南寄りに位置している焼

土の散布した部分で、精査を行なうと焼土の堆積した下に30cmと22cm大の安山岩が残っていた。掘り込みは浅く礫まで4～5cmの厚さに焼土が堆積し、礫は埋め込まれた状態ではなかった。また、焼土堆積の際に110cm×50cmのひょうたん形をした10cm程の掘り込みがあった。付近の床面直上にヤリガンナが出土している。さらにその北西側壁際に50×40cm、深さ10cmの浅い掘り込みがあり左右の立ち上り上面に30cm大と20cm大の礫があり、その一つを第40図1に示したが両面がツルツルでかなり擦られた痕跡を残している。側面にも擦り跡が残っている。また、西壁際の立ち上りには灰釉陶器の皿と第40図に図示した有孔の磨製石斧が出土した。これらの



第35図　H8号住居址実測図（1：30）



第36図　Ｈ８号住居址カマド実測図（１：30）

状況からP_5～P_7は住居内の作業に関する施設であったと考えられる。

カマドは、北壁中央からやや西寄りに検出された、深さ20cmを測る落ち込みは、東西75cm、壁にかけて50cmであるが、火床が西側にあり、火床際の壁にはうっすらと焼土が観察できたので、壁を切解すると煙道が発見された。上場周辺ではトンネル状の孔を探したが見あたらなかった煙道付着の焼土は壁立ち上り際で消えているため、壁に沿って空洞状に作った煙道であると考えられる。また、火床の右側の落ち込み内から、埦、坏口辺、スラグが出土した。鉄滓の塊も床面直上で出土していることから鍛冶工房として何らかの関連が考えられる。

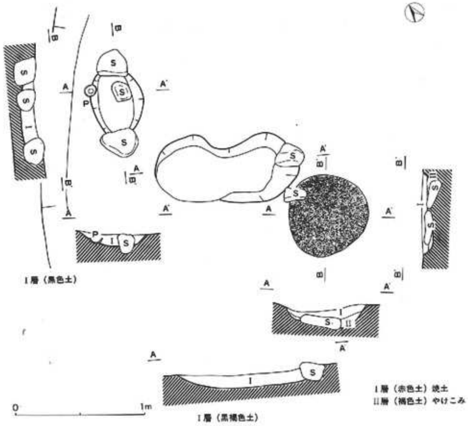
遺　物（第38～40図）

Ｈ８号住居址から出土した遺物は、坏・埦、台、灰釉陶器皿、長頸壺破片、擦り痕のある台石、ヤリガンナ、スラグ、鉄滓、有孔の磨製石斧が出土した。

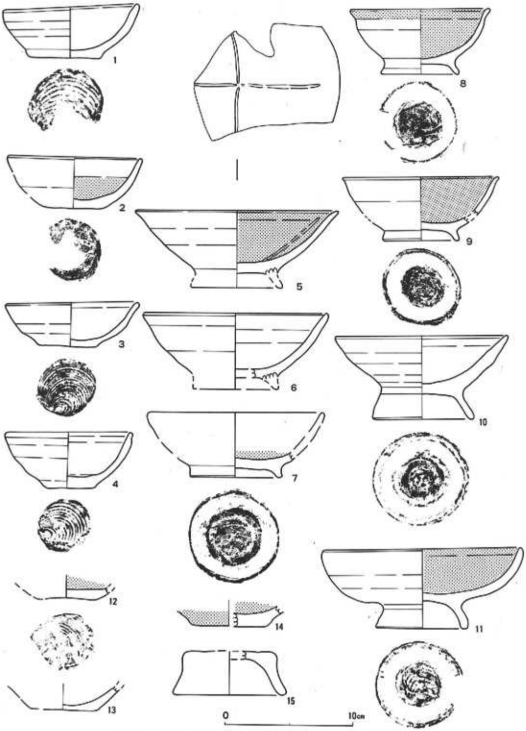
先ず第38図の杯からみていきたい。杯は、小形4点と底部3点、埦7点があり、他の住居址と比較すると杯が少ない。1は、小形の中でも口径10.8cm、底径5.6cmを測るのでやや大ぶりとなる。内外面共に粗雑な調整である。底部糸切りも目が荒く汚ない。2～4は底径が共に短かく、2・4は湾曲して立ち上り器高が深く感じられる。4の糸切りは1と同様に荒い。3は、口縁部が開いて立ち上るため器高が浅い。調整は丁寧である。

5は、内面黒色で十字の暗文が印されている。台部から直線的に大きく開き、口縁部で外反するため口径は15.8cmを測る。6は、やや内湾気味に立ち上る。7は、台部8㎜と低い埦である。内面黒色であるが一部分褐色である。8は、小形の埦で台部1cmを測り湾曲して立ち上り口縁部で外反する。9も同じ器形である。

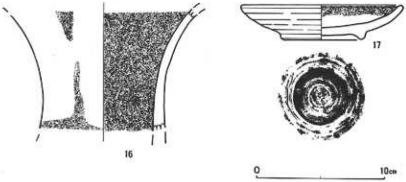
10は、台部が全器高の3分の1を測り高くなる。埦は口縁部にかけて直線的に開いている。台が高く、器厚が厚いためがっちりしている。11は、内面黒色で器高が浅い。台部から大きく開いて立ち上り、さらに口縁にかけて大きく湾曲する。本遺跡出土の埦では唯一の器形である。



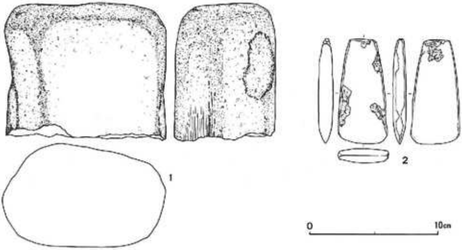
第37図　H 8 号住居址施設実測図（1：30）



第38図　H 8 号住居址出土土器実測図No. 1 （1 : 3）



第39図　H 8 号住居址出土土器実測図No. 2（1：3）



第40図　H 8 号住居址出土石器実測図（1：3）

15は、台部・支脚というべきもので、砂粒子が目立ち調整が荒い。直立気味に立ち上り、高さ3.4cmを測る。内側全体と外側の下端 1 cmが黒ずんでいるため、カマドで利用した甕の支脚であることも考えられる。

第39図16は灰釉陶器広口瓶の頸部である。内面は淡緑色の釉が施釉され、その上面にやや濃い緑色の釉が施釉されている。外面は緑色の釉が一筋したたり落ちているのみで地肌が出ている。

17はほぼ完形の灰釉陶器皿である。本遺跡では唯一の遺物である。内面口縁部に淡緑色が浸しがけされている。虎渓山 1 号窯式の東濃産である。

第40図 1 は擦り痕のある台石的なもので、両面共にスベスベしている。12.5×10.5cm、厚さ 8 cmを測り半分に欠損している。側面にも擦り痕がありかなり擦りこんであり減っている。石

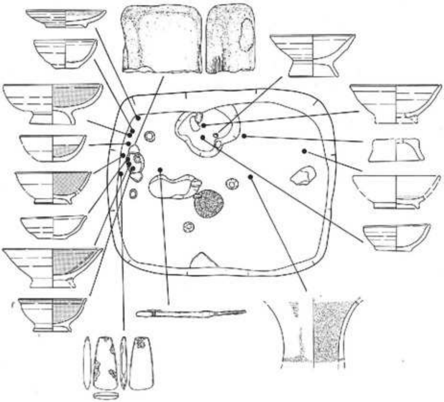
第9表　H8号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
38－1	坏	10.8 4.0 5.6	底部から内湾して立ち上るが、底部中心からずれている。底径長い。	ロクロヨコナデ 稜が強く残る。 底部糸切り目荒く粗雑	ロクロヨコナデ 中心の渦巻2本の稜で残る。	褐色
38－2	坏	(10.6) 4.0 4.6	底径短く、湾曲して立ち上る。 器厚は厚く安定している。	ロクロヨコナデ 調整丁寧 底部糸切り目細い。	ロクロヨコナデ 中心付近黒斑ある。	黒褐色
38－3	坏	10.5 3.4 4.5	底径短い、開いて立ち上る。 底部の中心がずれているため形が悪い。	ロクロヨコナデ 丁寧に調整されている。 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ 丁寧に調整されている。	暗褐色
38－4	坏	10.0 4.4 3.8	底径短く、湾曲して立ち上る。 器高は深い。	ロクロヨコナデ ハケ状の荒い痕跡残る。 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ 中心から底面全体に渦巻痕大きく残る。	褐色
38－5	塊	(15.8) (6.7) (7.2)	底部から直線的に大きく開いて立ち上る。器厚はうすい。	ロクロヨコナデ 底部糸切り弱く残る。	内面黒色 十字の暗文ある。	茶褐色 回転実測
38－6	塊	(14.6) (6.0) (6.6)	やや内湾気味に開いて立ち上る。 器高は深い。	ロクロヨコナデ 砂粒子下部に浮き出ている。	ロクロヨコナデ 砂粒子目立つ。	赤褐色 回転実測
38－7	塊	(13.9) (5.1) 7.2	高台低い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り中心に残る。	ヘラミガキ 一部黒色	赤褐色
38－8	塊	(11.9) 5.0 6.0	小形塊で、湾曲して立ち上り口縁付近で外反する。	ロクロヨコナデ	内面黒色 ヘラミガキ	茶褐色 回転実測
38－9	塊	(12.2) (5.0) 6.0	小形塊で、湾曲して立ち上り口縁付近で外反する。	ロクロヨコナデ 底部糸切り中心にわずか残る。	内面黒色、ミガキなく色悪い粗雑	赤褐色 回転実測
38－10	塊	(13.6) 6.5 7.8	高台は全器高の3分の1と高く、口縁部にかけ直線的に開く。	ロクロヨコナデ 継ぎ目痕残り粗雑	ロクロヨコナデ 砂粒子少し浮いている。	褐色
38－11	塊	(15.6) 6.2 7.2	台部の径短く、大きく開いて立ち上り口縁にかけては大きく湾曲する。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ 内面黒色	明褐色 回転実測
38－12	杯	— — (4.0)	やや上底である。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ 調整なめらか。	暗褐色
38－13	杯	— — (5.0)		ロクロヨコナデ 底部糸切り。	ロクロヨコナデ	褐色 回転実測
38－14	杯	— — (5.8)		粗雑な調整	内面黒色 ヘラミガキ	黒色 回転実測
38－15	台部	— 3.4 (6.8)	直立気味に立ち上る。	砂粒子の目立つ。	指ナデ、デコボコ気味である。	暗褐色 回転実測
39－16	灰釉広口瓶	— — —		ロクロ痕	ロクロ痕 緑色の釉が付着	灰緑色 回転実測
39－17	灰釉皿	12.8 2.7 6.5	やや内湾しながら、大きく開いて立ち上る。	ロクロ痕	ロクロ痕 口縁付近に施釉まだらに付着	白灰色

全体に赤味がみられて熱を受けている様相がみられる。

2は、磨製石斧である。これは縄文時代の石斧であるがH８号住居址の西壁下床面直上に出土した。有孔であることから平安時代の人々が付近から拾ってきて、お守りとして竪穴住居址の壁につるしておいたと推定される。

最大長8.2cm、最大幅3.9cm、最大厚1.1cmの灰白色に緑色が混る蛇紋岩製。器体の表裏面、両側面および基部面が、それぞれに面的に研磨して、明瞭な稜線で画す様に整形した石器である。磨製石斧の分類では定角式といわれるタイプの形状を呈する。しかし、器体の一部には調整研磨が施されなく素材部分がアバタ状に残る部位が見られる。また、この石器には基部から約２mm程の中央部に表面から直径約５mm程のスリバチ状の穿孔がなされ、中心で約１mmの微細な小孔で貫通する。この孔は、表裏両面の穿孔位置が微妙にズレている為に、表面から裏面では基部側に傾斜した孔となっている。この穿孔は両面を研磨した後、器体完成後に穿たれたものである。



第41図　H８号住居址出土遺物状態図

本磨製石斧の様に器体に穿孔が見られるものとしては、新潟県に数例の類似資料がある様だが、長野県内では10例程で少ない資料である。新潟県内出土例は図版で見る限りでは、穿孔の穴も本遺跡出土例よりは大きめであるらしいが、器形、穿穴位置などが比較的に類似していることから有孔石斧としてとらえ得るものであろう。

作業に使用する実用品というよりは、儀礼用に製作されたと考えられる。今後に課題を残す石器である。

以上が本住居址出土の遺物である。出土状態を第41図に示した。図示したものは全て床面直上、カマド内、ピット内出土のものであり、出土がこの地点に集中している。

本住居址の所産期は、10世紀後半に比定されよう。

（島田　恵子）

2　土　坑

1）D１号土坑（第42図）

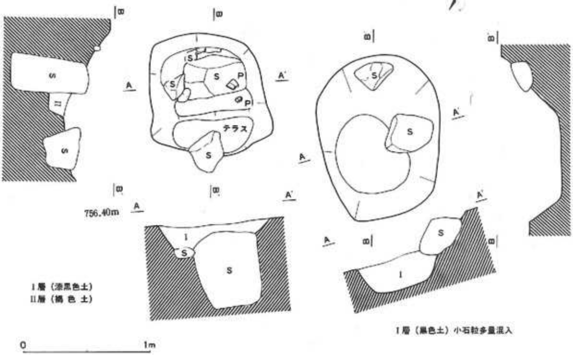
本土坑は、調査Ⅰ区の最上段、え－１グリッド内において検出された。付近一帯は大小の礫が堆積していたが、プラン確認では漆黒色土がくっきり浮き出ていたため容易に検出することができた。

平面プランは、南北90cm、東西90cmを測り、南側の東西両コーナーが突き出た不整な方形を呈する。覆土は、Ⅰ層が漆黒色土で、角張った掘り込みを呈した中央の落込みが褐色土層に覆われていた。深さはテラスの部分はだらだらと浅いくぼみであるが、中央の落込みは、幅60×12cmで角を箱状に角張って掘り込んであった。断面図に示してあるがその掘り込みの際には、60×50cm、厚さ28cmを測る四角に近い形の石が埋め込まれていた。角もきちんと面がとられていて人工的な加工が加わった感を呈している。この石を埋め込むためにつくられた土坑であるかのようにきちんとすき間なく石を据え、上部には支えの石がある。また、漆黒色土を取り除くと石の上面と角張った落ち込みの中に、10×15cm大の甕胴部片が各１点ずつ出土した。

本土坑は、意図的に石が埋め込まれた何らかの目的を持って構築された遺構であり、その所産期は10世紀中葉に比定されよう。

2）D２号土坑（第42図）

本土坑は、D１号土坑の東側に検出され、え－１の同グリッド内に位置している。本土坑はD１号と比較するとやや黒色がうすくなるが、プランは容易に確認することができた。従って覆土は黒色土で小石粒を多量混入していた。



第42図　D１号・D２号土坑実測図（１：30）

深さは、23～40cmを測り、壁立ち上り際には40cm大の礫があり、上場付近にも25cm大の礫があった。

出土遺物は皆無で、本土坑の性格、所産期等不明である。

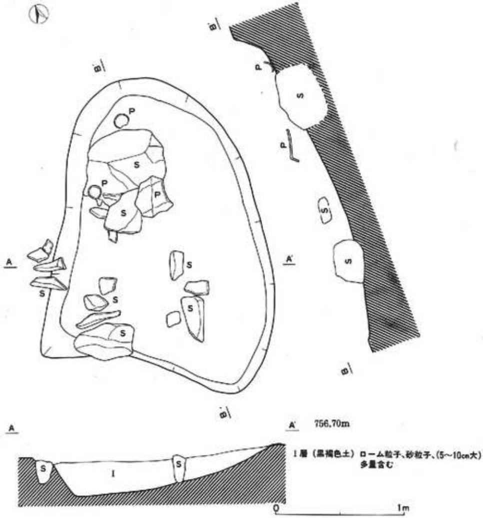
3）D３号土坑（第43図）

本土坑は最上段の、お・かー１グリッド内に検出された。この地点は５～10cm大の礫がゴロゴロしていて、プラン確認も草かきの刃がたたなくて思うようにいかず、東西に15cmの長さでトレンチを入れて試掘を行なった。

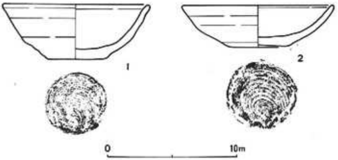
結果、60cm大の玄武岩の上部、その際に、第44図１・２の完形の杯２点、20cm大の須恵器壺の頸部破片がトレンチ内に出土した。そのため周辺黒褐色土の部分を掘り下げると、第43図のような形の遺構となった。

平面プランは、南北220cm、東西130～170cmを測り、北側先端部が円くカーブし、南側後方が角張った不整な台形を呈する。

覆土は、黒褐色を呈しローム粒子、砂粒子、５cm～10cm大の礫を多量に含んでいた。深さは



第43図　D３号土坑実測図（１：30）



第44図　D３号土坑出土土器実測図（１：３）

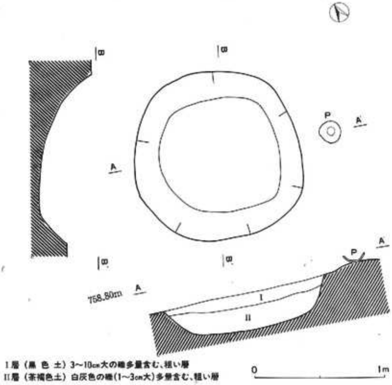
5～30cmと地形的な傾斜の関係も加わりまばらである。また、底面には60cm大の巨石をはじめとした45cm～10cm大の礫が散乱しており、尚一層凸凹の状態となっていた。

出土遺物は、第44図1の坏が完形品に近い状態で出土した。底径短かく内湾して立ち上る。底部糸切りであるが、底部の接合が乱雑で粘土が横へとび出たり、接合のところにすき間が生じている。2は、底径短かく器高も浅い。口縁部円形にならず細長く木葉形となる。砂粒子が浮き出ていて目立つ。この他に20cm大の須恵器大型壺の頸部片が出土している。器面には平行叩き目文が施されている。

本遺構の全体を覆っていた土層は黒褐色で、その範囲内を掘り下げたが不整な形の遺構であ

第10　D3号土坑出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
44－1	坏	11.5 4.6 4.3	内湾したがらもやや開き気味に立ち上る。底径短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り、接合荒く粘土の付着残る。	ロクロヨコナデ	赤褐色
44－2	坏	12.0 3.3 4.4	直線的に大きく開いて立ち上り口径長く細長い。底径短い。	ロクロ痕 砂粒子目立つ。 底部糸切り。	ロクロ痕 砂粒子目立つ。	赤褐色



第45図　D4号土坑実測図（1：30）

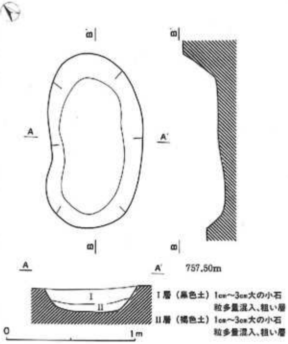
って不明な点が残った。巨石や大小の礫が埋っていたため土層が変色したのか、または山崩れの礫の上に崩落した住居の遺物が転げ落ちたのか。いずれにしても土坑としては浅く不安定な遺構として疑問が残る。

4）D４号土坑（第45図）

本土坑は、調査Ⅱ区東側上段のＨ６号住居址の西側に隣接して検出された。たー11グリッド内に位置している。

平面プランは、径130cmを測り、やや不整な円形を呈する。

覆土は２層にわかれ、上層は黒色を呈し、３～10cm大の礫を多量含む。Ⅱ層は、茶褐色を呈し１cm～３cm大の礫を多量に含み、２層共に粗い層であった。底面は北側の壁際に礫が多く特に堅緻な面は認められなかった。



第46図　Ｄ５号土坑実測図（１：30）

深さは、25cmを測り壁は傾斜をもって立ち上っている。掘り込みもしっかりしている。

覆土内の遺物は皆無であるが、東側のＨ６号住居址との間にほぼ完形の土師器坏が出土している。これは、Ｈ６号住居址の床面直上であるため住居址の遺物が耕作等により多少移動したものと考えられる。

本土坑は、Ｈ６号住居址との関連は不明であるが、周囲の状況からＨ６号住居址と所産期は同一であると判断される。（三石　延雄）

5）D５号土坑（第46図）

本土坑は、調査Ⅱ区の東端Ｈ７号住居址の西側に隣接して検出された。Ｈ６号住居址と同様で住居址の西側に位置する本坑は、５－14グリッド内にあたる。プランは、黒色土が良好に残り付近の地山層が黄色であったために容易に確認できた。

平面プランは、長軸140cm、短軸75cmを測る長方形プランをとる。覆土は、Ⅰ層が黒色土でⅡ層が暗褐色を呈する。両層共に１cm～３cm大の小石を多量含み粗い土層により覆われていた。

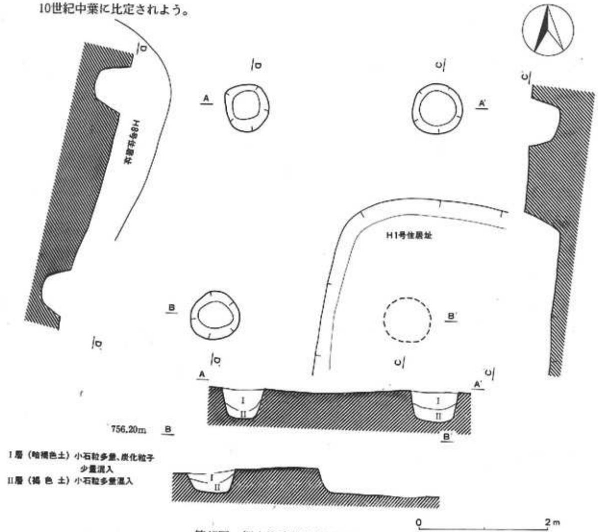
深さは、15～25cmを測り、壁は急傾斜で立ち上っている。本坑からは遺物の出土は皆無であったため、所産期を決定することはできない。また、掘り込みがやや貧弱であることと、覆土の色調がＤ４号土坑と比較すると薄くサクサクしていたため、疑問点が残る。

3　掘立柱建物址（第47図）

本遺構は、調査1区のH3号、H8号、H1号住居址、H2号住居址に囲まれた、い・う－4・5グリッド内に検出された。柱穴の1ヶ所はH1号住居址に重複する。

平面プランは、南北側1.7m、東西側1.5mを測り方形を呈する。主軸方位はほぼNを示している。柱穴は、直径35～39cm、深さ30～45cmを測り、ほぼ同一規格といえよう。地形的な関係から傾斜の強い南側が浅くて30cmとなる。南東側はH1号住居址と重複し、痕跡を確認することはできなかった。覆土は小石粒の多量に混入した2層により形成されている。埋土中における柱痕は全く確認できなかった。炭化粒子が少量含まれていた。遺物は、坏破片が2点出土したのみであった。

本址は、4本柱の掘立柱建物址であると考えられる。所産期は、H1号住居址に先行するが10世紀中葉に比定されよう。



第47図　掘立柱建物址実測図（1：60）

4　宮東遺跡出土鉄器（第48図）

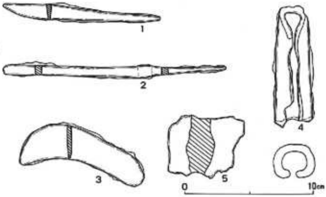
第48図に宮東遺跡から出土した鉄器を示した。１は刀子である。長さ12.4cmを測るが、その内刃の部分は７cmである。腐植が目立ち研ぎ減りの状態は観察できない。調査Ⅱ区から出土。

２は、鉇（やりがんな）あるいは鑿（のみ）状の鉄製品であると考えられる。全長刃17.5cmを測り、柄の部分は5.5cmである。運悪く先端部の刃部が欠損しているので全容がわからない。しかし、先端部がわずかうすくなっているためここから刃部になるのかもしれない。Ｈ８号住居址床面直上に出土した。

３は、鉄鎌である。全長10cmの小形製品であり、先端部がゆるやかにカーブした曲刃鎌で、柄付の部分はわずか２cm位であることが観察される。調査Ⅱ区Ｈ５号住居址から出土した。

４は、鉄鐸である。全長９cm、径４cmを測る。祭祀に関わる遺物であるため、新海神社との関係が示唆され、南佐久初発見の遺物であり注目される。Ｈ３号住居址床面直上に出土した。

５は、131ｇの重さがある鉄の塊である。ふいごの羽口が出土したＨ１号住居址の西壁のなんらかの施設であると考えられる土坑状の落ち込みの中から出土した。小鍛冶によって製品を作る銑鉄である可能性も考えられる。



第48図　宮東遺跡出土鉄器実測図（１：３）

この他、Ｈ８号住居址からは、鉄滓と錨の小破片が出土している。

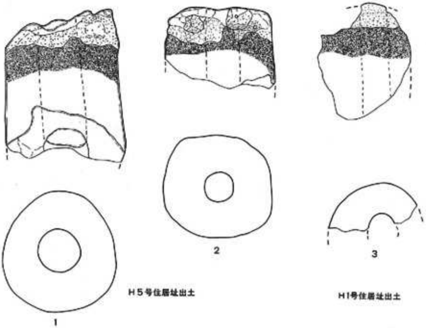
5　宮東遺跡出土鞴羽口

鞴羽口は、Ｈ１号住居址出土の第49図の３とＨ５号住居址覆土上から出土した１～２の３点がある。３は径7.5cmを測ると推定される羽口であるが砕かれたかのように小破片であ。先端には黒色の鉄の液が固まって少量貼り付いている。

２は表土削平の時に転がり出た羽口である。径は、7.5cm×６cmの方形を呈し、孔は2.3cmの円形である。送風口の先端部は、黒色の液が0.5cmの厚さに付着し、さらにそのまわりに赤さびのある塊りが付着している。赤さびの塊りは図に示したように２cm大のこごりとなっている部分もある。付着のたくさんある送風口が鉄を溶かした火床に近かったと考えられる。

１は、全長12cm、径9.5cm、孔3.4cmを測る羽口で、出土中では最大となる。やはり黒色の液

が付着しその上に赤色化した固りがある。２の羽口より赤色が少ないのは、小鍛冶に使用した鋼材が異なるためであろうか。また、この羽口は上面がやや盛り上りいびつではあるが円形である。孔から3.4cmの厚さに粘土で固めているため頑丈で大形となる。鞴の根元部分から割られたかのようにほぼ完形である。Ｈ５号住居址は、調査Ⅱ区の傾斜面地形の下段部にあたるために上段部の住居址から転がり落ちてきた可能性も考えられる。鍛冶の跡とおもわれる施設が住居内に見あたらなかったこともあるが、山崩れによる礫の流れ込みがひどく、不明な点が残った。



第49図　宮東遺跡出土鞴羽口実測図（１：３）

6　宮東遺跡グリッド出土土師器（第50図）

グリッド出土の遺物は小片のみで極めて少なく、大半住居内の出土であった。ここでは、調査Ⅱ区から出土した小形甕１点、埦高台部、坏底部の１点のみ取り上げた。

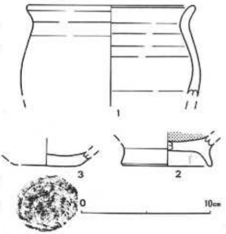
１の小形甕は、甕の出土が少なかった本遺跡では貴重な資料である。口縁が短かく、「く」の字状に外反し胴部に最大径をもつ。

２は、埦の高台部で内面黒色を呈し、乱雑な十文字となる暗文がある。３は、坏底部で内面中心部に盛り上ったポッチが残っている。外面底部はやや目の荒い糸切りを呈す。

１は、第51図に示した縄文土器の把手と混入して、し・す－11・12グリッド内において出土した。この地点はトレンチ掘りを行ったが、礫の流れ込みと薬用人参の耕作による攪乱が入り

込んでいた。焼土も少し散布していたところもあったが攪乱が著しく、縄文・土師器が混在して出土したりで、遺構の存在は確認できなかった。

（島田　恵子）



第50図　グリット出土土師器実測図（1：3）

7　宮東遺跡出土縄文時代の遺物

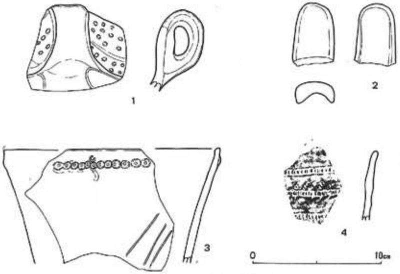
1）土　器（51図）

縄文土器は、中期後半と後期が出土している。中期後半は曽利Ⅳ式期に比定される破片が多い。第51図1・2は把手である。1は口縁部の橋状把手で、円形の刺突文が配列している。

2は、耳状、あるいはスプーン状ともいうべき形

第11表　グリッド出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
50－1	小形甕	(13.0)	口縁短く、ゆるやかに胴部が張り出し最大径をもつ。	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	茶褐色 回転実測
50－2	埦	— — (7.0)	台部開き先端丸くなる。	ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	内面まだらのある黒色、乱雑な十字の暗文ある。	褐色 回転実測
50－3	坏	— — (4.8)		ロクロヨコナデ 底部糸切り目荒い。	ロクロヨコナデ 中心にボッチ残る。	内面こげ茶 外面赤褐色



第51図　宮東遺跡出土縄文土器実測図（1：3）

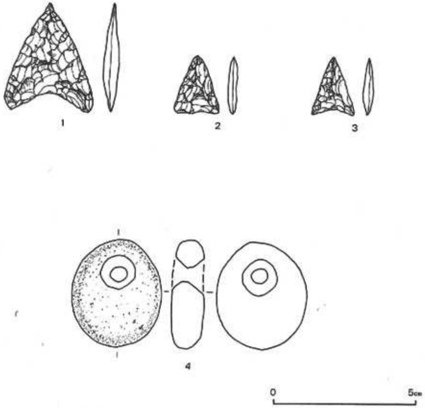
状を呈している。両者共に焼成、胎土、調整からも中期後半と考えられるが、小片なのではっきりしたことは不明である。

3は、器厚がうすい。器形は、口縁に向けて直線的に開く深鉢で、口縁直下に帯状の円形刺突文が連続して施されている。磨滅が著しいが胴部にも斜めの沈線文が三本認められる。この土器は後期堀ノ内式期に比定されるとおもわれる。

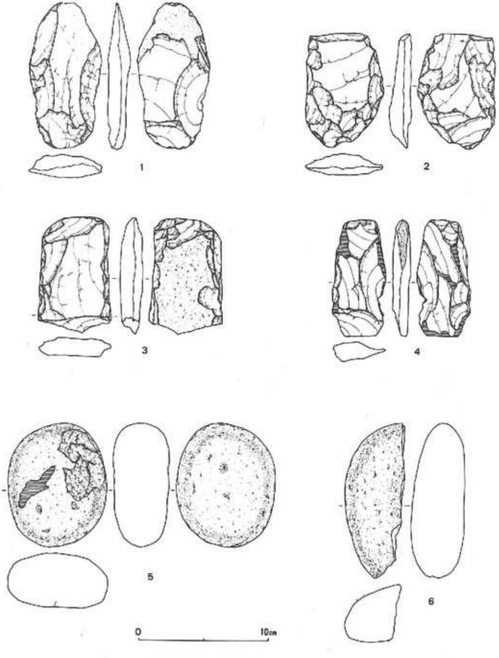
4は、連続瓜形文が平行し、その間に縄文が施されているが磨消されている。器面は赤色塗彩されている。器厚がうすく、内側は指痕が小きざみに細かく残っている。特殊な土器であったと考えられる。後期に入れてよいとおもわれる。（島田　恵子）

2）石　　器（第52・53図）

石器は第52図の石鏃・石製ペンダントからたどってみたい。1は、黒曜石製で、最大長3.8cm、最大幅3.2cm、最大厚0.5cm、重さ3.7gの大形石鏃である。この石鏃の調整加工は両面ともに精巧な押圧剝離が施され、優美な凹基鏃に仕上げられている。また、尖端部は微細な調整剝離



第52図　宮東遺跡出土石鏃・装飾品実測図（3：4）



第53図　宮東遺跡出土縄文時代石器実測図（1：3）

によって、さらに尖鋭に作出されている。調査Ⅱ区H5号住居址付近の耕作土下から出土した。

2も黒曜石製で最大長2.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cm、重さ0.8g。形態は平基無頸鏃で二等辺三角形を呈す。調査Ⅱ区H5号住居址覆土から出土した。

3はチャート製で、最大長2.0cm、最大厚1.5cm、重さ0.7g。2と同様の大きさながら基部が僅に抉れた凹基鏃である。表面採集によって得られた資料である。

4は、細粒砂岩製の大珠ともいうべき装飾品であるが、手近な細粒砂岩を素材としているために粗悪品に見える。孔は、先端から5mmの中央部に直径1.1mmの穿孔が施されているのに対して、石の表裏面は弱い磨きがかけられている程度である。上段部で表面採集した。

第53図1は、粘板岩製で縦位に図示したが横刃形石器である。表面の左側縁（図左）が刃部と考えられる。最大長11.4cm、最大幅5.8cm、厚さ1.6cmを測る。H5号住居址から出土した。

2は玄武岩製の石鍬で上半部の着柄部分を欠損している。現存長9cm、幅6.1cm、厚さ1.5cm、表面刃部面に僅かに磨滅がみられる。

3も玄武岩製で、刃部側下半部を古く欠損する。現存長9.1cm、幅5.8cm、厚さ1.8cm。器形は短冊形が推定され、石鍬の様な大形の石斧であった可能性が高い。

4は粘板岩製で表面採集資料のため全面に新しい剝離（キズ）がみられるが刃部を古くに欠損している。現存長9.2cm、幅4.3cm、厚さ1.2cmを測る石鍬である。

5は、輝石安石岩製の磨石兼凹石で、長さ9.8cm、幅7.8cm、厚さ4.4cmを測る。片面を磨石として使用しているためスベスベの状態にある。H5号住居址から出土した。攪乱によって上段部から転びこんだとおもわれる。

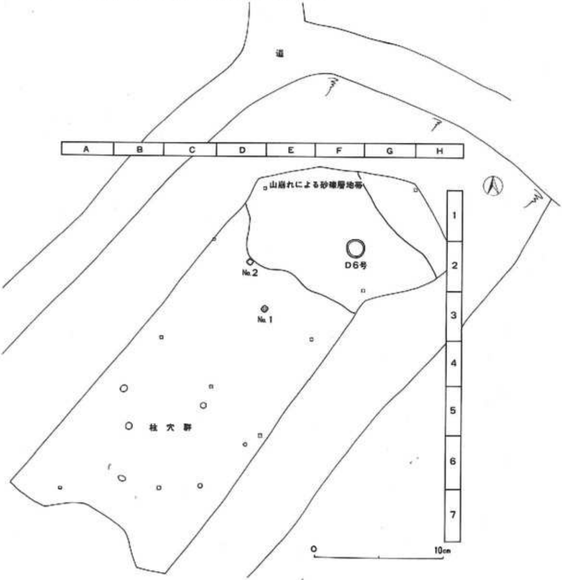
6も輝石安山岩製の磨石兼凹石で半分を欠損している。これらの安山岩は付近には産出していないため、千曲川まで採取に出かけたと考えられる。

以上が宮東遺跡から出土した縄文時代の土器および石器類である。北側上段面に中期後半から後期にかけての遺構があったと想定されるが、山崩れにより押し流されていることと、耕作によって破壊されたところもあるとおもわれる。試掘で確認したが遺構は検出できなかった。また、遺物も少なく発掘調査Ⅱ区（H5号住居址付近）に散布していたのみであった。

（吉沢　靖）

第5章　大工原遺跡の遺構と遺物

大工原遺跡は、宮東遺跡南東側の比高約9mの段丘下に位置している。ここは、宅地造成団地出入口の道路となるため遺跡の破壊が予想されるので事前に発掘調査を実施した。下図に示した全体図で明らかなように、縄文中期後半の土壙1基、平安時代後半～中世にかかると考えられる柱穴群、神社に関係する台石2点を検出した。



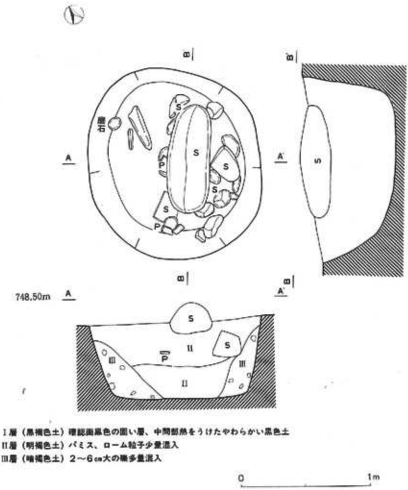
第54図　大工原遺跡調査区検出遺構全体図

1 土　　壙

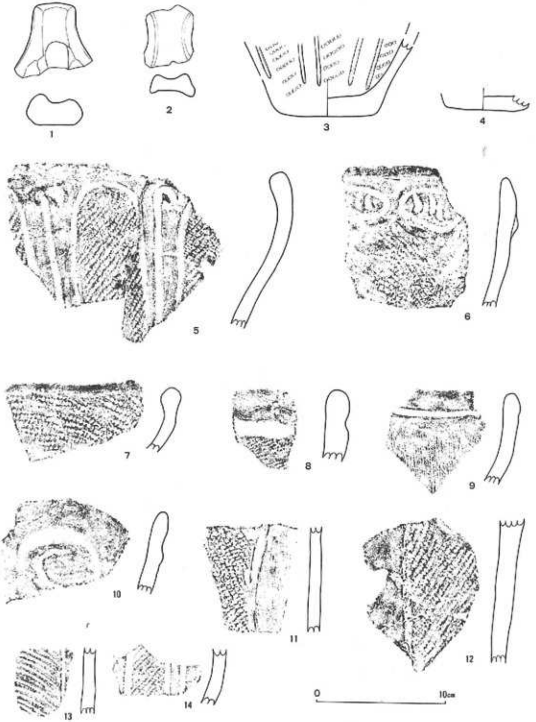
1）D 6 号土壙（第56～58図）

本遺構は、調査区上段部F－2グリッド内に検出された。この周辺は傾斜面で幅 7 ～10mにわたって東西に攪乱が生じていた。5 ～20cm大の礫が散乱し、泥流が押しよせた痕跡を示している。北側からの山崩れはこの地点でおさまっている。また、傾斜もこの地点で終り平坦地に入る。

平面プランは、東西135cm、南北150cmの楕円形を呈する。深さは60cmで、壁は垂直に立ち上っている。覆土は、褐色土を基調とする 3 層から成る。I 層は、黒褐色土で固い土が上面を覆っていたが、中間部になると黒色ではあるが、熱を受けたかのようにやわらかくサクサクした土層に変化していた。II 層は、パミス・ローム粒子を少量混入していた。III 層は 3 ～ 6 cm大



第55図　D 6 号土壙実測図（1：30）



第56号　D 6 号土壙出土土器拓影図（1：3）

の礫を多量混入した粗い層であった。また、第56図に図示してあるように、大小さまざまの礫が遺構内に入っていた。上面の85cm×33cm、厚さ25cmの立石状の石は、安山岩でこの付近にない石である。当初は立石であると判断していたが、もち上げて観察すると土についていた下の部分が座りがよく、上部のようにふくらんでいないことがわかった。そうした形状からみて当初からこの状態に置かれていたと考えられる。底面は平坦で形よく掘り込まれていた。

遺物は多量の礫に混入する状態で、第57図に示した土器および第58図の石器が出土している。この他、たくさんの縄文土器小破片が出土した。さらに上面からは、土師器坏、灰釉陶器小片も出土したが、これは流れ込みによると判断される。

第57図1・2は把手である。1は4山の口縁把手であるが文様が全く見られない。2は橋状の把手で小形の両耳壺につけられたとおもわれる。

3～8、10～12、14は沈線文と縄文を主体とした文様で構成されている。3は、深鉢胴下～底部にかけての破片で沈線による棒状懸垂文が二条一組で配され、その間を斜縄文が施文されている。焼成固く重量のある土器である。内面は使用した痕跡であるお焦げの付着も全くみられないことから、貯蔵用の深鉢であったと考えられる。4は、小形深鉢の底部片で内面は暗褐色を呈す。

5は、細い逆U字文、沈線の蕨手懸垂文で文様構成され逆U字文中に斜縄文が施されている。器形は、口縁から胴上にかけてゆるやかにカーブし、胴中央に弱いくびれがあって底部へゆるやかに下りるとおもわれる。

6は、口縁直下に弱い隆帯による区画文が配され、区画内に太い沈線が施文されている。胴部は斜縄文で埋められている。頸部のくびれが弱い深鉢であろう。

7は、斜縄文が口縁から施文されている。口縁は先端が丸くなる。

8・9共に口縁部直下に一条の凹線が平行し、その下に斜縄文が施されている8と、櫛状工具による細線文が施文された9がある。8は大形深鉢である。

10は、口縁直下に渦巻文が隆帯状になぞられている。区画内は縄文が施されているとおもわれるが摩滅が著しくはっきりしない。

11・12・14は斜縄文と棒状の懸垂文から成るが、11は、カーブからU字文かとおもわれる。いずれも凹線内は無文である。12は大形の深鉢となろう。

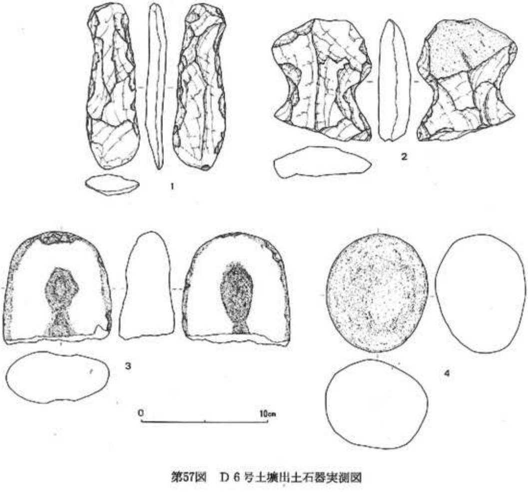
13は、波状あるいは綾杉状の条線文が施されるかとおもわれるが小片なので不明である。

以上がD6号土壙から出土した土器片である。口縁に沿った一条の凹線、棒状懸垂文と蕨手文、逆U字文から判断して曽利Ⅳ式期から曽利Ⅴ式期へ移行した文様の特色が見られる。よって本土壙は縄文中期後半の曽利Ⅴ式期に比定される。土壙の性格は上面に形の整った立石状の石を置き、熱を受けたとおもわれるやわらかい埋土、さらに多量の土器、石器の出土から判断して、本遺構は土壙墓であると考えられよう。　　(島田　恵子)

石器は４点出土した。第57図１は、粘板岩製で最大長13.2cm、最大幅4.2cm、最大厚1.2cmの完形品である。刃部は両刃で刃部角は平均34°で磨滅が著しい。着柄部と考えられる基部側に僅かばかり抉りをもつ。底面付近の壁際から出土した。

２は、玄武岩製で刃部側下半部を古くに欠損するが分銅形石鍬であることがわかる。現存長は9.6cm、幅7.8cm、厚さ2.4cm。全面ともに風化が著しいが粗い加工によって仕上げられている。

３は輝石安山岩製の凹石・磨石である。半分程欠損するが現存長９cm、幅8.5cm、厚さ4.3cm。表面、裏面ともに同様の凹をもち、さらにその面は顕著に磨滅する。４は砂岩製で長さ9.4cm、幅８cm、厚さ7.1cmのほぼ円形の磨石である。重量があってどっしりとしている。この磨石は土壙内の北西コーナー側の壁立ち上り際に確認の時点から発見された。しっかり埋め込まれていて意図的な感を呈していた。　（吉沢　靖）



第57図　Ｄ６号土壙出土石器実測図

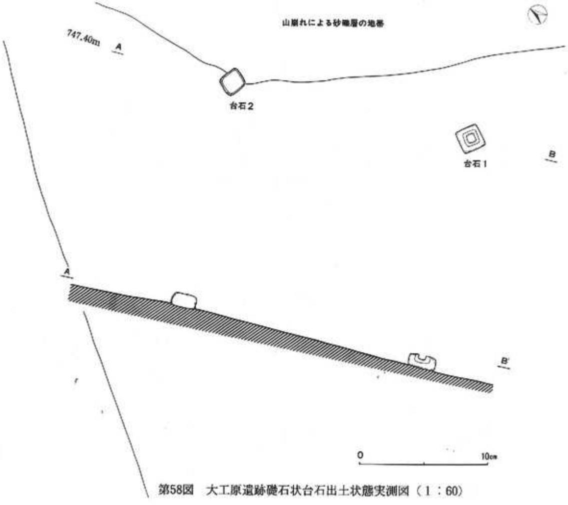
2　祭壇状の台石（第59図）

祭壇状の台石は、調査区の北側先端から10mの位置、D・E－2・3グリッド内から出土した。この部分は傾斜面から平坦面に入る地形で、上段部からの山崩れによる砂礫層がここでぴたりと止って、全く礫のないサクサクした地層へと変化していく状態のところに位置している。

台石は、表土をバックホーで削平中に転がり出たもので、地面に形が残っているという状態ではなかった。表面から40cm削平した部分の砂礫層中から出土した。

下図第58図に出土状態図を示した。№1は調査区中央に出土し、上段先端の道路から20mの位置にあたる。№2は、ここから3.2m北西側に離れて出土した。出土地点には遺構の落込みは全く認められなかった。

石質は溶結凝灰岩の佐久石で作られている。先ず、№1は、36×35cm、厚さ23cmを測る枡形



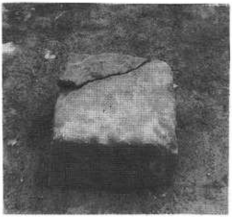
第58図　大工原遺跡礎石状台石出土状態実測図（1：60）

を呈している。中央に四角形の彫り込みがあり、上部20×22cm、底面は11×14cmの四角形で底面から上面へは傾斜して彫り込まれ、その傾斜は45°を示し、深さは5cmを測る。全体の彫り込みは鏨を使って敲打している。しかし、鏨は1cm幅のせまいものを使用している状態が彫り込みの面から感じられる。側面の四面は比較的平に削り込まれているが平鏨を使ったかとも考えられる。石を擦った痕跡はなく鏨だけで仕上げを行っている。

No.2は、30cm幅の四角形で、厚さは25cmを測る。1と同じく側面は平に削りとられているが特に土の上に置いて見えない部分の裏面は荒く削られている。丸鏨で削ったかのように太く短い痕跡を残している。上面は裏面に比較するとやや平らな部分が多いが、それでも丸鏨のような太くて短い削り痕が残っている。No.1のように正面中央に四角形の彫り込みがない。

この加工石は、当初からこの場所にあったものではなく、出土状態からみると上部から転げ落ちてきたものとおもわれる。地元の方の話では、往古の昔新海神社は現在地の東側にあったという伝承も残っているとのことである。そうした伝承と重ね合せると、新海神社奥社の花立山へ行く通路があったためにその通路に築かれていたなんらかの施設に関わる台石であったとも考えられる。いずれにしても荒い加工から、鉄器が充分に行き届かない古い時代の遺物であるとおもわれる。徳川時代の刃広打がされていないことも考え合せると、近世以前であることは問題ないであろう。

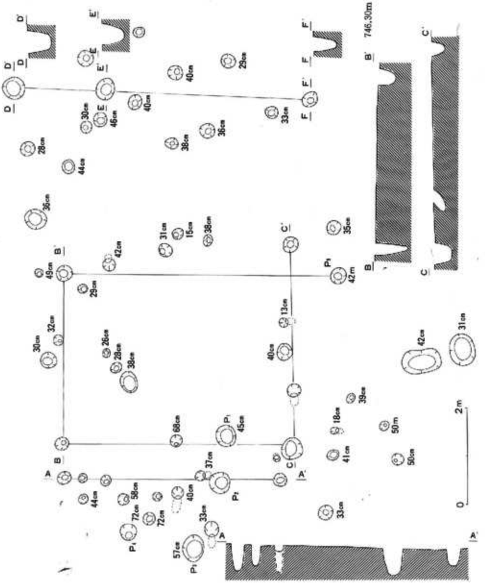
報告書作成中においても、このような台石の出土例を探したがなかなか酷似した事例はみつからなかった。そんな折、ＮＨＫのテレビでおもしろい類例を偶然に見つけることができた。それは、沖縄の民俗例の中にこの台石を祭壇として使用していることがわかった。No.1・2は一対の組合せとなる祭壇で、両側にこの台石を並べてその上に、榊・おさい銭などをそなえる祭壇として使用しているのである。新海三社神社との古い関わりがここにも伺える資料である。



大工原遺跡礎石状台石出土状態写真

Ｈ３号住居址出土の鉄鐸と共に詳細解明のために今後の課題として調査を続行したい。

（島田　恵子・上原　鏞三）



第59号　大工原遺跡柱穴群実測図（１：60）

3　柱穴群（第60図）

柱穴群は、A～D－4～6グリッド内に検出された。この地点は砂礫層の全く見られない土層で、粘性の強い地山層も砂が混入したかのようにサクサクしていた。表土は調査区中央が80cmと厚かったが、南側に行くにしたがって浅くなり、60～20cmとなる。しかし、柱穴ではなかろうかと当初確認した地点は60cmで、炭化材が円形の柱状に粉々になって残っていたために柱穴の疑いがあり周辺一帯を精査した。結果、大小さまざまの柱穴が次々と見つかり、とうとう柱穴群となった。

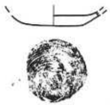
柱穴群は、調査区が限られた道幅であったために、13m×110mの範囲に集中して検出され、さらに東西に広がる可能性もあり得るが、調査区外であり調査におよばなかったため柱列になるきちんとしたものは見られない。しかし、深さは30～72cmでかなりしっかりした掘り込みがなされ、第61図に示した坏底部、その他甕破片、青磁片、土師質土器片が出土している。

直径は、51～80cmを測る楕円形2個、41～50cm大の円形7個、31～40cm大16個、21～30cm大28個、10～20cm大7個の計60個が検出された。

確認面での柱穴は、地山とほとんど変化のない色調であったが、柱穴の部分には必ずと言って良い程に炭化粒子が浮き出ていた。覆土は礫の混入が全くなく地山よりやや暗褐色になるという程度のⅠ層に覆われていた。そのため、掘り下げは覆土のやわらかい部分を剝ぐような感じで進めていくと固い土層にぶつかり、立ち上り具合・壁・底面が確認できるという状態であった。こうした状況から判断して、柱穴群は、中には木の痕跡もあろうかとおもわれるが、土器の出土状態、しっかりした掘り込みなどから、何等かの施設があったかと考えられる。特に、隣接する北西側の畑からは、昭和61年～63年まで実施した「臼田町遺跡詳細分布調査」の踏査の時に、中世の茶臼が出土しているのをやっくらの集石の中から発見している。図版35に掲載してある。今回、P_4から土師質土器、P_5から陶磁片が出土していることから判断すると、中世の集落が付近にあったことが予想される。

遺物が出土した柱穴5個は、直径40～50cm大、深さ42～72cmで、柱穴群の中では大形の部類にあたり、かなりしっかりしたものである。これら大形柱穴が建物に関係するのか、神社入口のなんらかの施設に関係しているものであるか推定されるところであるが、バラバラな配列から不明であるといわねばならない。調査区が道巾のみであったことは残念であった。

（島田　恵子）



第60図　柱穴群出土土器実測図（1：3）

第6章 考　　察

宮東・大工原遺跡は、北方に中世山城の田口城跡が所在し、城山の裾には創建年代不祥ではあるが永い歴史をもつと伝承される新海三社神社が広大な社地の中に厳かなたたずまいを見せている。こうした由緒ある場所の一角に位置しており、さらに、田口峠は上州へ通じる古くからの主要な交通路であった。このような歴史的環境の中にある遺跡の発掘調査は、過去において英田地畑古墳の発掘調査で出土した蕨手刀があるだけに、ベールに包まれた新海三社神社の不明な部分にどのような形で解明の糸口を与えてくれるのか期待がもたれるところであった。

調査区は、南面した傾斜地で耕作土の削平をバックホーで行ったところ、たくさんの玄武岩が強粘土層中に入り込んでいてプラン確認をしようにも、草かきの刃がはじかれてしまうという状態でしんどい作業となった。除々に下に下ると遺物の出土が見られるようになり、南端の傾斜面に落ち込みが確認された。しかし、その落ち込みも全面黒色土で住居址の存在は想定されるものの輪郭がまるでつかめない。普通のローム層ならば根気よく精査すれば土層に慣れるに従ってどうにかプランが出せるが、この礫混入の強粘土層はどう苦労しても刃が立たず、おまけに日に当るとひび割れができるという始末であった。大木のりんごの根の浸入、薬用人参の耕作による深耕なども加わり、ますますプラン確認を困難なものにした。

それでも大よそのプランを確認し、トレンチ掘りによって次々と住居址のプランをなんとか

第12表　宮東遺跡検出住居址

（ ）内推定値

遺　構	平面プラン			主軸方位	壁高	カマド	時　代
	形　態	東西	南北				
H1号住	不整方形	570cm	620cm	E−12°−S	15〜50cm	東	10世紀後葉
H2号住	方　形	(420)	(400)	E−24°−S	12〜33	東	10世紀中葉
H3号住	長方形	630	540	N−30°−E	22〜45	—	10世紀前葉
H4号住	(方形)	(430)	(430)	—	(10)	(西)	10世紀中葉
H5号住	(方形)	(400)	(530)	—	—	(南東)	10世紀中葉
H6号住	(方形)	(430)	(410)	—	—	—	10世紀前葉
H7号住	(方形)	(400)	(400)	N−41°−E	—	北	10世紀後葉
H8号住	(長方形)	510	410	N−17°−E	18〜50	北	10世紀後葉

つかんで完掘に至った。驚いたことにたくさんの礫は、今度は住居址の床面に巨石となって転びこみ、床面下にくい込んでいるものもあった。上段部は床面先端がわずか残ったのみで大部分は削り取られるように形がなくなっていた住居址が３軒、巨石が入り込んで床面が泥流で流されていた住居址１軒、床面は残ったが礫が覆土のように上面を覆っていた住居址１軒、多量の礫が覆土中に混入していたが、床面もカマド跡も残ってどうやら住居址としての形をとどめていた下段部の２軒の計８軒が検出された。また、４本柱の掘立柱建物址が一棟、土坑５基が検出された。

住居址に伴なって出土した遺物は、須恵器壺破片・広口壺・坏・蓋、土師器甕・坏・埦・羽釜片、灰釉陶器広口瓶破片・皿・埦、土錘、臼玉、鉄鎌・鉇・刀子・南佐久初発見の鉄鐸などが出土している。

大工原遺跡では、縄文時代中期後半の土壙１基、祭壇状の台石、柱穴群が検出された。残念なことに出入口の道路巾のみで調査区が少なかったため柱穴群の性格および台石については不明な点が多く残った。

この他に、表面採集または住居址内から出土した縄文時代の遺物がある。縄文中期後半の土器片、後期の土器片、石鏃・石鏃・有孔の磨製石斧・凹石・磨石・横刃型石器・装飾品などである。

これらの遺構・遺物についての詳細は第４章で記述しているので、要点のみにしぼって本遺跡の考察を生活の場としての関わりから進めてみたい。

１　遺　構

住居址は、一辺４ｍ～4.3ｍを測る小形住居址が、Ｈ２号・Ｈ４号・Ｈ６号・Ｈ７号の４軒で、この小形住居址は貧弱であったのかほとんどが半壊以上、床面下まで流されている。上段部の傾斜面下に位置していたことも原因の一つであるが、それでもＨ２号住・Ｈ３号住は同一のレベル内にあり、むしろＨ３号住の方がやや上段に位置するが、6.3ｍ×5.4ｍの大形住居であったためか住居内は巨石が入り込んで床面の半分は壊れ、流されてしまっていたが、それでも住居址の輪郭はほぼ残っていた。

Ｈ５号住居址は、巨石が住居址の寸前まで崩れ落ちてきているが、住居内は床面直上に遺物がほぼ完形の状態でかなり残っていた。覆土中には10㎝大の礫もかなり多く、薬用人参の耕作は床面直上で止っていたものと思う。耕作をしていた方が残っていた遺物を見て「よくこれだけ残ったものだ」と驚いていたように、約30個体の坏・埦の完形品が出土している。住居址の輪郭はあとかたもなく耕作によって壊されてしまったが、柱穴・焼土・遺物の出土状態から住居址プランを推定すると、６ｍ×5.3ｍを測る大形住居址となる。

Ｈ１号・Ｈ８号住居址は、山崩れの泥流におし流されることなく無事に残った住居址である。

Ｈ１号住居址は、6.2m×5.7mの大形で、壁高は北側で50cmを測りかなり深く、地形的な傾斜から南壁は15cmと浅くなる。Ｈ８号住居址も同じように北壁50cm、南壁18cmとなる。床面はほぼ平坦であることから、地形的傾斜面を利用した設計になりその上屋構造が注目される。

Ｈ１号住居址は、東側中央にカマドがありその右脇東南コーナー側が出張った形態をとっている。そして、南壁沿いに深さ30cmの溝があり、溝は東南コーナーで巾70cmになり、土坑状の形態をとっている。土坑脇には焼土が床面から15cm程盛り上った状態にあり、付近の床面は固かった。この焼土の脇には鞴の羽口の破片があり、さらに、西側中央の土坑状の落ち込みからは鉄の塊りが出土している。これからこの塊りを熱して溶かし鉄製品を作るかと思われるような塊りであった。小鍛冶の施設を伴なった住居址である可能性が高い。

さらに、Ｈ８号住居址にはカマド西南側に三ヶ所の施設があった。床面に焼土が径65cmの円形に堆積しているものと、その際に1.2cm×0.5cmのひょうたん形をした浅い落ち込みがあり、すぐ脇の床面直上からヤリガンナが出土した。さらにその先の西壁下には、砥石として使用したり、台石としたとも考えられる石が壁立ち上り際にセットされていた。周囲には土器が散乱している。また、カマドは北壁に沿って煙道が設けられている。火床から東側は大きく掘り込みがなされ、完形の埦と３cm大の銕が出土している。こうした状況からＨ８号住居址も小鍛冶が行われていたものと考えられる。

調査Ⅱ区のＨ５号住居址は、たくさんの銘々の器である、坏・埦・皿の完形品が出土した住居址で、煮炊き用の土器出土が全く見られなかった。この住居址の覆土中から鞴の羽口が２個出土した。その内の１個は鞴から羽口をもぎ取ったとおもわれるような状態にあり、その器形の全容を知ることができた。この羽口はＨ５号住居址に伴なうものであるか、上の住居址から転がり込んだものかは不明である。ただ、個々の器の出土があまりにも多いことから、作業場であったことも想定される。

山崩れの落石が顕著な住居址は、調査Ⅰ区上段のＨ４号住居址で、床面下に150cm×85cmの巨石がつきささるようにくいこんで、付近には粉々になった石が散乱していた。山崩れのすさまじさを物語る住居址である。

また、Ｈ４号住居址よりやや下った位置に所在するＨ３号住居址は、床面半分以上が流され1.4m×1.1m大の巨石が住居内に入り込んでいたのをはじめとして、多量の礫で埋っていた。この住居址も山崩れによる落石の状況をよく物語っている。しかし、前記したように大形の住居址であったため、全て流されることなく住居址の輪郭もかなり明確に残っていた。出土遺物も、羽釜片、灰釉陶器模倣及び須恵器粗悪品の広口瓶、祭祀に関連すると考えられる鉄鐸などが出土し、その他の住居址には見られない遺物が多い。

この他に土坑５基が検出された。いずれも住居址と同時期に比定されるものであるが、その中で特徴的な土坑が１基見られる。Ｄ１号土坑は、径90cmを測り不整な方形を呈している。土

坑内には、60×50cm、厚さ28cmの四角形に近い石が角を丸く、各面を平に人工的加工を加えて埋め込まれていた。さらに石の前には角張った掘り込みを呈したテラスが設けられている。遺物は甕破片が石の上面とテラスの上から各１点ずつ出土している。意図的に何等かの目的を持って構築された土坑であと考えられる。

掘立柱建物址は、４本柱で南北側1.7m、東西側1.5mの間隔をもって築かれている。Ｈ１号住居址と重複しているため３本柱の検出にとどまった。柱穴は、直径35～39cm、深さ30～45cmを測る。Ｈ１号住居址に先行すると考えられるが、所産期は10世紀前半に比定されるであろう。

以上が宮東遺跡から検出された遺構である。由緒ある新海三社神社周辺の遺跡の発掘調査は、昭和40年３月に英田地畑古墳の調査が実施された。蕨手刀・直刀・鉄鏃・三輪玉・須恵器埦・土師器杯などが出土し、奈良時代に築造された古墳であることが判明している。付近にこのような古墳が存在しているということは、この古墳に埋葬された主長の統率する奈良時代の大集落がなくてはならないが、今回の調査では、平安時代中期前半の単一集落で複合していたのは縄文時代中期後半と後期であった。奈良時代の集落は別の場所にあることが考えられる。

平安時代中期前半の集落は、未調査区および山崩れの泥流によって押し流された関係から、さらに拡大するとおもわれるが、今回の調査での住居址検出は８軒にとどまってしまった。この集落は、小鍛冶の技術を持った集団であることが明らかになった。竪穴住居址２軒にはその痕跡を示す施設・遺物が残っていた。また、羽口２点の出土はあったが施設が認められなかったＨ５号住居址は、35個体にものぼる個々の器である坏・埦・皿の完形品が出土している。鍛冶にたずさわった人々の休息の場であったことも想定される。しかし、羽口２点の出土は鍛冶を裏付ける最も重要な資料である。

住居址内から出土した鉄器は、鍛冶工房をもっているにも関わらず、刀子・鎌・鉇・鉄鐸と数量的に少ない。自給自足として鉄製品を鋳造していたとしては供給量は少ないものである。他の集落へ供給していたことは、鍛冶炉の規模の小さいことから考えられそうもない。こうしたことから当時の鉄製品は容易く入手できるものではなく、大変貴重なものであったことが伺える。また、昭和63年６月に発掘調査した大字原の原遺跡Ｈ１号住居址からは、鉄滓が出土している。これは平安時代の住居址である。Ｈ４号の奈良時代の住居址からは鉄鏃が出土した。このように田口地区の製鉄技術の普及はすでに奈良時代には開始されていることがわかる。また、奈良時代の築造であることが明らかになっている、入沢の五霊西12号古墳、臼田の蛇塚古墳からはたくさんの鉄鏃と刀子が出土している。こうした各地の状況から奈良時代の鉄器の普及は普遍的であったことを物語っている。これは、鉄器の普及が東日本では最も盛んであり古代東国の中心的存在であったといわれる群馬県との県境を接する地域にあたることも一つの要因となるであろう。文化の伝来はこの田口峠を越えていち早くやってきたのである。

今回の発掘調査では、平安時代中期前半新海三社神社境内の脇に小鍛冶の技術をもった集落が存在していた。ということが判明し、残っていた遺物から当時の生活・文化が再現できるのである。新海神社之記に記されている建御名方命の16番目の子興波岐命を新海神社の主神とし興波岐命は別の名を大県主とも八県宿称神ともいい、和名抄の佐久郡八郷の県主の神である。とした神社記とはどのような関わりを持っていたかはこの発掘調査では明らかではない。「日本書紀」「続日本紀」の歴代天皇の系譜、「旧事本紀」などの国家形成に関わる伝承は、7～8世紀に書き改められている。登上する命(みこと)を生存していた歴史的人物とみるのは危険であり当然のことながら無理が生じてくる。

また、物部氏との関わりについては、高崎市の条里制遺構の水路から「物部私印」の銅印が出土し、さらに、吉井町の矢田遺跡の住居址（9世紀）から「物部郷長」「八田郷」の線刻文字のある滑石製紡錘車が出土し、群馬県での物部氏の勢力が活発だったことを裏付けている。

佐久では、清川の上原政彦氏宅に明和3年（1766)、屋敷の庭の平石の下から出土したことが井出道貞の「信濃奇勝録」に記され、その古文書と共に「物部猪丸」とフルネームの刻まれた銅印が所蔵されている。唯一物部氏が臼田の地に存在していたことを裏付ける貴重な資料であるといえる。フルネームの印は全国的にも1～2点を数えるのみで非常に少ない。

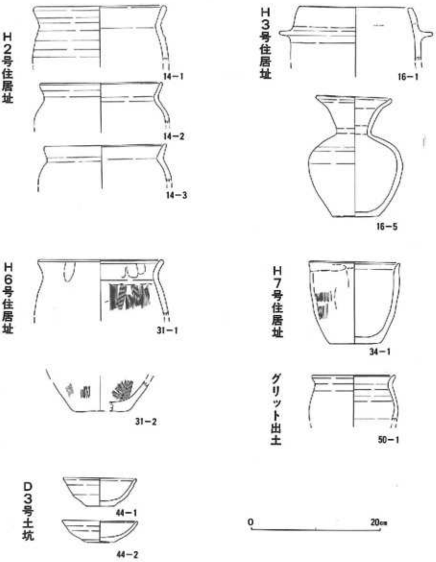
発掘調査中、出土した土器に墨書されているものがあってほしいと願いながら、細心の注意をはらってきたが、とうとう墨書土器は見あたらなかった。この点においても物部氏との関わりを実証する資料は得られていない。将来、発掘調査によって「物部猪丸」の銅印に関わる資料が得られ、臼田町の歴史研究が更に一歩前進することを願ってやまない。

2 遺　物

各住居址から出土した土器を第61～63図にまとめた。本遺跡から出土した土器の器種の特色は、煮炊きに用いた甕の出土が少なく、銘々の食器である坏・埦が大半を占めているということが第一にあげられる。

甕は、H2号住居址のカマド周辺から出土した破片が最も多く、個体数では6個体に細分されるが小破片のため4個体分のみ図示した。集成図は3個体にとどめた。口縁部「く」の字状に外反する器形である。反面、H6号、H7号住居址出土の甕は、頸部のくびれが弱く、器高が短かい。グリッド出土の小形甕は、H2号住居址出土の甕と器形的には同類であるが、さらに口縁部が短かく小形化している。

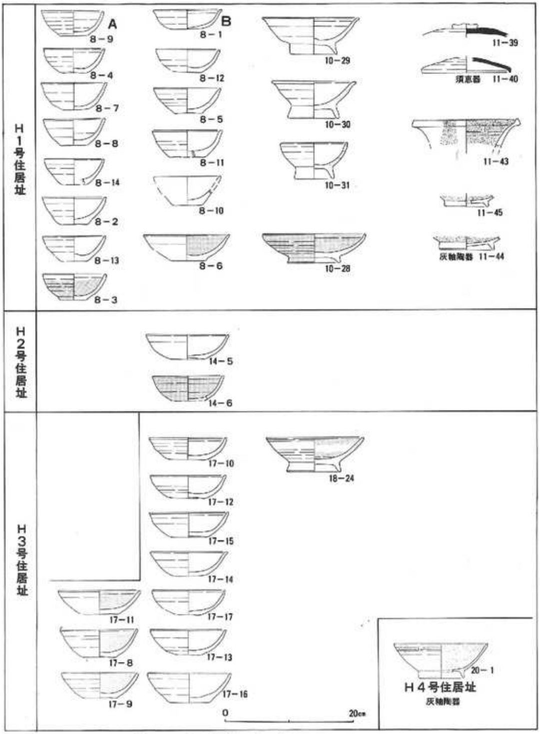
羽釜は、H3号住居址から1点小破片が出土している。口径17.8cmで鍔の突出しが短かく1.6cmを測り、真っすぐに突出している。また、同住居址からは、須恵器の広口壺という器種が出土している。口縁部がラッパ状に開き、肩から胴下にかけて球状を呈し、灰釉陶器の広口瓶に形態が類似している。調整が荒く、胴部は輪積み痕が残り、大粒の砂粒子が目立って汚ない。



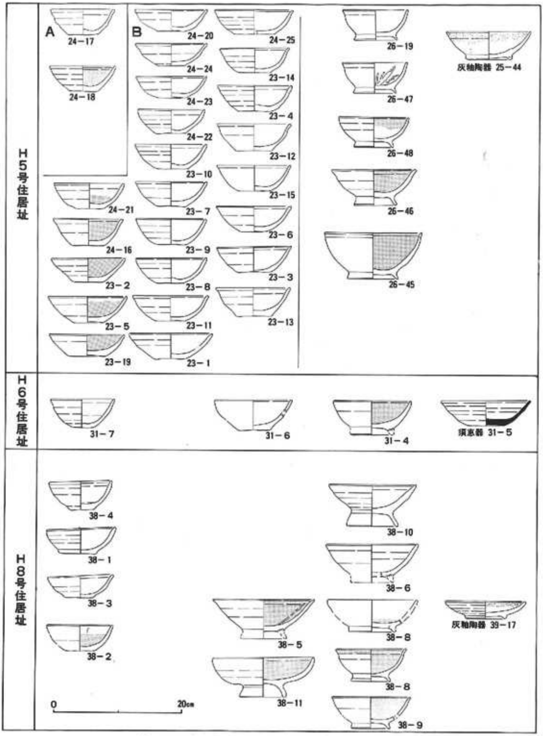
第61図　宮東遺跡出土土器集成図No.1（1：6）

この他、須恵器蓋・壺がH1号住居址から出土し、H5号住居址は、壺の頸部・胴部・底部片が出土している。このように煮炊具・貯蔵具としての甕や釜・須恵器壺・甕・灰釉陶器の瓶類の出土量が非常に少ない。唯一器形がわかるのは、H7号住居址出土の小形甕で口縁～底部まで残っていた。

H1号住居址・H5号住居址は、土師器甕破片が2～3点と少なく、反面、食器としての坏・埦類が多い。両住居址は共に鞴の羽口が出土しているため、小鍛冶工房の住居址であった可



第62図　宮東遺跡出土土器集成図No.2（1：6）



第63図　宮東遺跡出土土器集成図No. 3（1：6）

能性が高いことから、煮炊きはＨ２号住居址のような小形の住居址で行われていたことが考えられる。各住居址がそれぞれの機能を各時期毎に分担していたことを示唆している。

食器としては、坏・埦・灰釉陶器埦・皿がある。須恵器坏は１点出土しているのみである。坏は、口径10cm前後、底径４cm前後、器高４cm強を測り、小形で底部から口縁にかけて湾曲して立ち上る器形のＡと、口径12cm前後、底径５cm以上、器高3.5～４cmを測り、底部から口縁にかけて直線的に開いて立ち上る器形Ｂとに二大別されるが、法量は前者と後者の中間にあたり、底部からやや内湾気味に開いて立ち上るものとに細分されるが、あまり大きな差異がないことから集成図は、Ａ・Ｂに分けて並べたが、総じて坏は小形である。

Ｈ１号住居址出土の坏は、ほぼＡのみで、Ｂは内面黒色の１点があるだけである。

Ｈ２号・Ｈ３号住居址出土の坏はＢのみで、湾曲して立ち上る小形がみられない。

Ｈ５号住居址出土の坏もその大半がＢで占められているが、小形が２点と少ない。

Ｈ６号住居址は出土量が少ないがＡ・Ｂ各１点と埦１点、本遺跡唯一の須恵器坏１点が出土しバラエティに富んでいる。

Ｈ８号住居址はＨ１号住居址と同様、小形のＡ類のみの出土である。

埦の完形品は少量であるため一括して図示した。口径はそれぞれで、小形10cm強、その他13～16cm、器高4.6～5.8cm、底径６～８cmを測る。器形は、底部から口縁にかけて湾曲して立ち上るものと内湾気味に立ち上るもの、大きく開いて立ち上るものがある。台部は全器高の３分の１を占める高台と１cm前後の低い台部もある。また、内面黒色が多い。

Ｈ１号住居址出土の埦は、台部が高く、大きく開いて立ち上る器形２点と、湾曲して立ち上る小形埦１点がある。その他、内外面共に黒色研磨され、器高が浅く、口縁部16cmとやや盤状的ともいえる特徴的な埦１点の計４点を図示した。

Ｈ３号住居址は完形品１点で台部のみ２点出土している。台部から口縁にかけて直線的に開いて立ち上り、底径が広いので安定感がある。内面黒色も研磨がなく炭素吸着もまばらで汚ない。

Ｈ５号住居址出土の埦は、大・中・小と５点を図示した。全て台部が低い。内面黒色は研磨されている。小形埦は底径が長く安定感がある。暗文の施された埦は赤味が強く、内面黒色がなされないで暗文があり特徴的である。

Ｈ８号住居址は埦の出土が坏より多いことも一つの特徴としてとらえられる。大・中・小とあり、高台も高いもの、低いものがあり、台部から内湾して立ち上るもの、大きく開いて立ち上るものとバラエティーに富んでいる。中でも台部が高く、低部から大きく開き湾曲して立ち上る内面黒色の埦は、器形的にも特徴がある。

内面黒色の大形埦は、Ｈ１号住居址、Ｈ５号住居址、Ｈ８号住居址で各１点ずつ、器形的にそれぞれの個性をもった特徴的な形が認められ、特別な器であった感を呈している。

灰釉陶器は、Ｈ１号住居址で広口瓶、埦底部２個体、Ｈ２号住居址で広口瓶、Ｈ３号住居址で瓶底部と頸部、Ｈ４号住居址・Ｈ５号住居址で埦各１点、Ｈ８号住居址で皿１点が出土している。これらの灰釉陶器は大原２号窯式・虎渓山１号窯式が生産地の様式と対応する。

以上が住居址に共なう出土遺物の集成である。須恵器坏が消滅し、土師器坏・埦が主体を占め、灰釉陶器が少量加わっている。坏は小形化が進んで、Ｈ１号・Ｈ８号住居址で最も顕著である。全体的に小形化している。埦は小・中・大と各種入り混っているが、坏には見られない大形埦が少量ある。また、埦には暗文が施されているが乱雑な十文字が多い。

煮炊用土器の数が少なくなり、食器の占める割合が多くなるのは、平安時代中期にみられる傾向で、さらに坏の小形化が進むことも一般的である。これらの土器から本遺跡の集落は、10世紀前葉～後葉に位置付けられ、２～３軒の住居址が並列する小集落であった。

また、特殊な遺物としては、Ｈ５号住居址出土の装飾品である臼玉があげられる。砂岩を素材とした厚さ２㎜のうすくて偏平な臼玉であるが、直径1.7㎝を測り普通の臼玉より大きい。同じくＨ５号住居址からは、魚捞に使う土錘７個がまとまって出土した。眼下の雨川へ投網で魚を獲りにいって食料を補っていたのであろう。

3　大工原遺跡

大工原遺跡は、調査区面積が少なかったことから検出した遺構、遺物が中途半端な状態で終っているため不明な点が多く判断できない状況にある。

先ず柱穴群は第４章に記述してあるように、計60個の検出であるが配列に規格性がないことから建物址でないとおもわれる。土師質土器・陶磁片が出土していることと、神社に関係すると考えられる加工された台石２個・茶臼が付近から出土していることと合せると中世的な要素が多く、新海神社のなんらかの施設に関連していることが推定される。こうした点から考え合せると新海神社の創建年代もかなり現実なものとして浮かびあがってこよう。

また、上段から検出された縄文中期後半の土壙墓は、良好な状態で残っていたためその全容を知ることができた。遠方から運んできた形の整った安山岩を上面に置いて、墓石としている。土壙内には、土器・石器が埋め込まれ、深さ60㎝を測り、壁は垂直に立ち上り、全体に土壙内は形よく掘り込まれていた。

この他、縄文時代の遺物の中で特筆するべきものは、有孔の磨製石斧である。県内の出土例は10例と少ないが、新潟県津南町沖１原遺跡、安田町ツベタ遺跡で出土している。いずれにしても数例である。Ｈ８号住居址から出土しているが、縄文時代の人々の遺物を後の時代の人々がお守りとして大切にしていたことが想定される。

宮東・大工原遺跡の発掘調査は、縄文中期後半、平安時代中期前半、そして中世まで、ほとんど解明されていなかった地域の歴史を私たちに語りかけてくれたのである。（島田　恵子）

引 用 参 考 文 献

1 臼田町教育委員会 1988 「五霊西12号古墳」

2 〃 1988 「臼田町遺跡詳細分布調査報告書」

3 〃 1989 「原 遺跡」

4 長野県史刊行会 1988 「長野県史考古資料編全一巻（四）」

5 群馬県史刊行会 1991 「群馬県史 通史編 2 原始古代 2」

6 新潟県史刊行会 「新潟県史 原始」

7 長野県埋蔵文化財センター 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4」
－松本市内その 1 総論編－

8 佐久考古学会 1990 「赤い土器を追う」

9 竹内 恒 1965 「蕨手刀を出土した南佐久郡臼田町英田地畑古墳」
信濃史学会 「信濃」18－4

10 島田 恵子 1989 「佐久平南限の古墳群について」 東信史学会
「千曲」 60号

11 長野県埋蔵文化財センター 1991 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 2」
—佐久市内その 2 —

あ　と　が　き

本調査を初めたのは六月五日からでした。六月といえば梅雨に入り、むし暑くなる季節でもあります。しかし、雨は少なく肌寒い日が続いて作業は助かりました。

発掘調査という仕事は、はたで見るほど楽な仕事ではありません。私たちはこの調査を開始して今まで考えられなかったような事実がわかりました。それは、平安時代中期に北側の山が大きく崩れて遺跡の台地を埋めてしまったのです。山崩れは、大きな石や小さな石を混えた泥流となって遺構を破壊し、埋めてしまったのでした。そのため、私たちは住居址、その他の遺構の検出に非常に苦労しました。

調査員の皆さんや協力者の皆さんの強粘土層と礫に苦しめられた御苦労の結果、平安時代中期前半の住居址８軒、土坑６基、掘立柱建物址１基、柱穴群が検出されました。また、これらの住居址から出土した遺物は、小形坏・埦が主体を占め、ほぼ形が整って復元されたものは、100個体以上にのぼります。文化センターに展示してありますのでご覧になってください。

この他、特に注目される遺物は、鞴の羽口３点があります。住居址内にも小鍛冶を行なっていたと考えられる掘り込みや焼土の跡が残っていました。鉄器は、鎌・刀子・鉇・鉄鐸などが出土しています。また、土錘７個も出土しました。

さらに、縄文時代の遺物も石鏃・石錐・有孔の磨製石斧・磨石・装飾品などが土器と共に出土しました。

新海三社神社周辺の古代の歴史、特に竪穴住居址に住んでいた庶民の生活の跡は今回の調査によって初めて知る事が出来ました。発掘調査は汗と土とのたたかいであり、土の中に埋れていた歴史が掘り出され、当時の人々の生活がそのままの姿で私たちの前に出現します。このように大地は歴史を土の中に護っていてくれます。

最近になっても未だ、神話や伝承を歴史であるかのように考えている面もあるようです。私たちは真実の歴史を後世に伝えなければなりません。皆様のご努力によってここに埋れた歴史の一部分が明らかになり、有意義な調査となりました。

七月二十二日に調査は終了しました。調査員・協力者・文化財調査員の皆さん、本当にご苦労様でした。又、田口小学校六年生の皆さんも授業や放課後に毎日手伝いに来ていたゞきありがとうございました。

調査にあたって地元の皆さん、又地主さんのあたたかいご協力に感謝申し上げます。

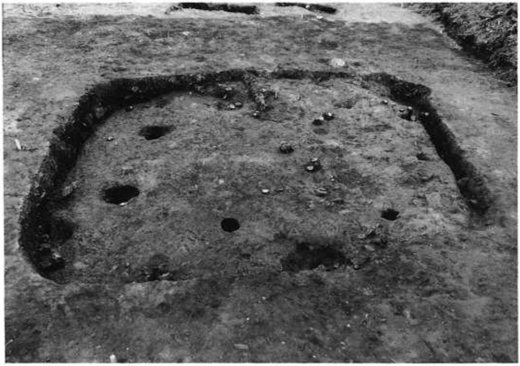
本報告書作成にあたっては南佐久郡誌刊行会の事務局をお借りし、又短期間に本報告書を作成された調査担当者の島田恵子氏、その他ご協力いたゞきました調査員の皆さんに厚くお礼申し上げます。

（調査団長　三石　延雄）

1　宮東遺跡調査Ⅰ区全景（北方より）

2　宮東遺跡調査Ⅱ区全景（東方より）

図版二



1　H1号住居址（西方より）

2　H1号住居址遺物出土状態

図版三

1 H1号住居址カマド

(柱穴)

2 H1号住居址遺物出土状態

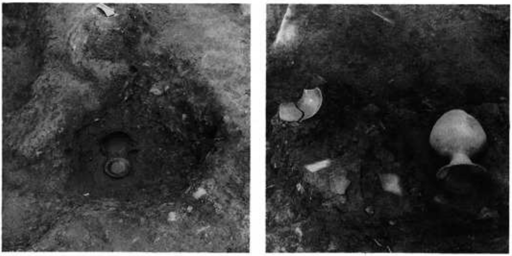
(土坑内から鉄塊出土)

図版四

1 H2号住居址（西方より）

2 カマド周辺の甕破片出土状態

1　H3号住居址（南方より）



2　H3号住居址遺物出土状態

1　H4号住居址（南方より）

2　D3号土坑（東方より）

1　H5号住居址検出区全景（北方より）

2　H5号住居址付近の礫流れ込み状態（東方より）

1　H5号住居址の礫流れ込み状態

2　H5号住居址検出面

3　H5号住居址焼土

4　H5号住居址礫流れ込み状態

1　H5号住居址遺物出土状態

図版十

1 H6号住居址（南方より）

2 H6号住居址遺物出土状態

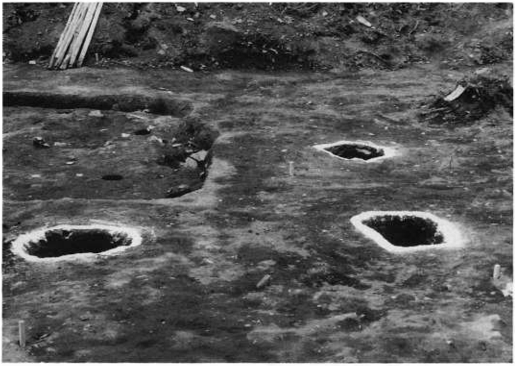
1　H7号住居址（北方より）

2　H7号住居址カマド

1　H8号住居址（南方より）

2　H8号住居址遺物出土状態

3　H8号住居址カマド



1 掘立柱建物址

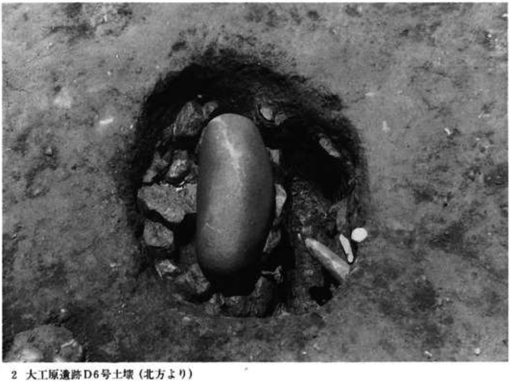
図版十四

1　D1号土坑（東方より）　　（南方より）

2　D2号土坑

3　D4号土坑

1 大工原遺跡調査区全景（北方より）



2 大工原遺跡D6号土壙（北方より）

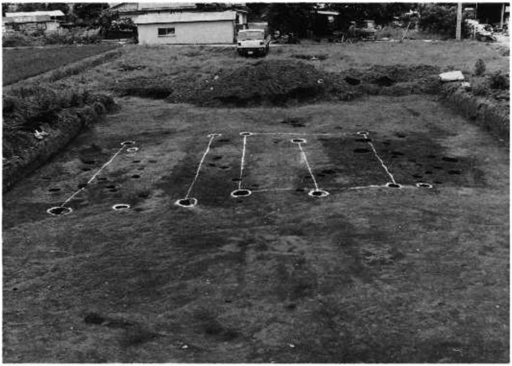
1　D6号土壙（西方より）

2　D6号土壙完掘状態

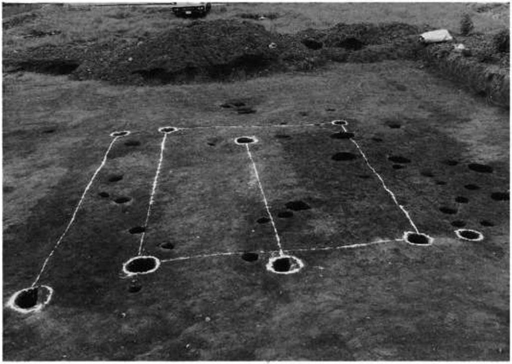
1 大工原遺跡祭壇状の台石出土状態

2 祭壇状の台石

図版十八



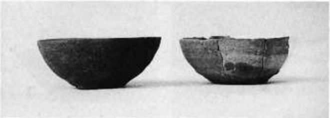
1 大工原遺跡柱穴群全景



2 柱 穴 群

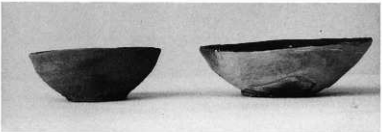
8－1　　8－2

8－11

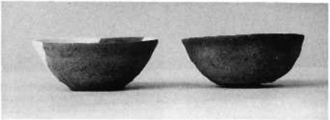


8－3　　8－4

8－12

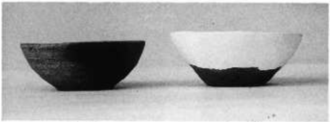


8－5　　8－6



8－7　　8－8

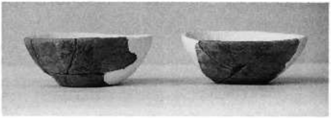
8－13



8－9　　8－10

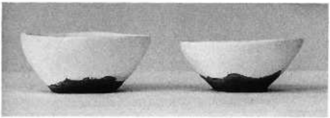
8－14

1　H1号住居址出土土器 No.1



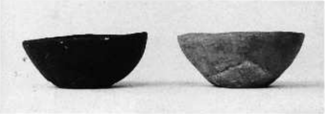
9 －16　　9 －17

9 －15

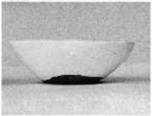


9 －18　　9 －19

9 －23



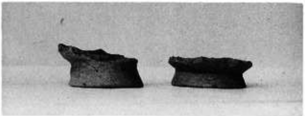
9 －20　　9 －21



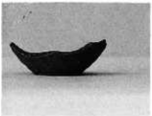
9 －25

10－28

9 －22



10－37　　10－36



10－24

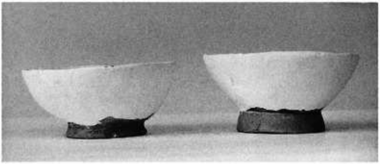
1　H1号住居址出土土器 No.2

10－29　10－30

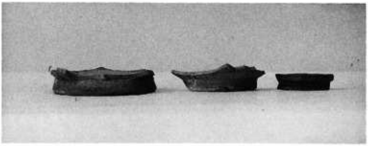
10－38

10－31　10－32

11－40・41



10－33　10－34



11－44　11－45　11－46

11－43

1　H1号住居址出土土器 No.3

図版二十二

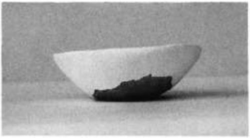
14－1

14－2

14－3

14－4

14－7

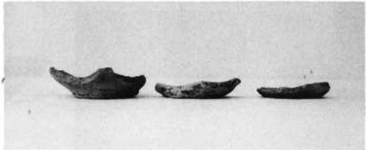


14－8

1　H2号住居址出土土器

20－1

14－5



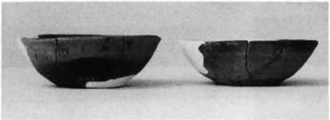
20－3　20－4　20－5

2　H4号住居址出土土器

16－1

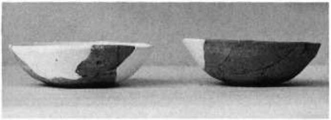
16－5

16－6



17－9　　17－8

17－14

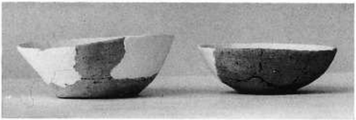


17－12　　17－13

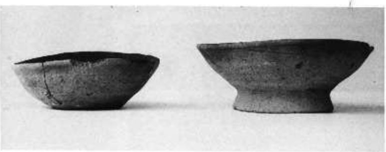
17－15

17－10　　17－11

1　H3号住居址出土土器 No.1



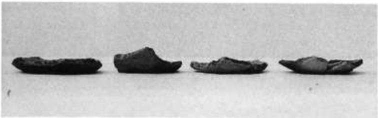
17－17　　17－16



17－19　　18－24

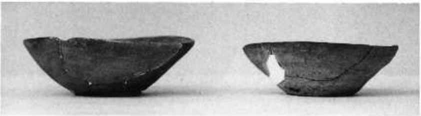
18－27

18－28

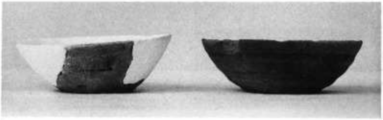


18－25　　18－22　　18－26　　18－29

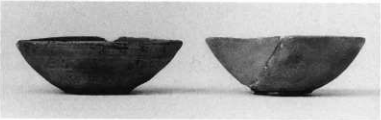
1　H3号住居址出土土器　No.2



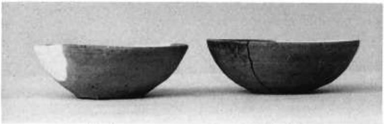
23－1　　23－2



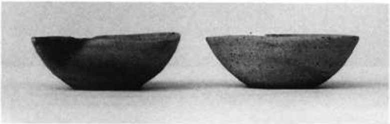
23－3　　23－4



23－5　　23－6

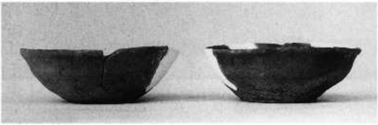


23－7　　23－8

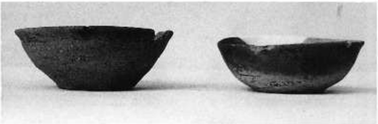


23－9　　23－10

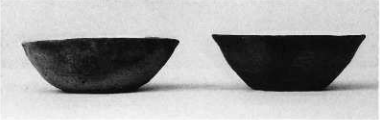
1　H5号住居址出土土器　No.1



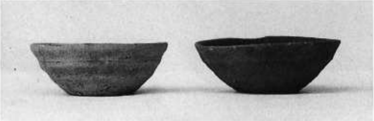
23−11 23−12



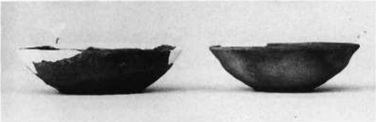
23−13 23−14



23−15 24−16

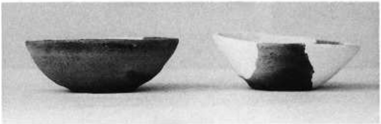


24−17 24−18

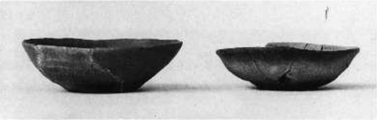


24−19 24−20

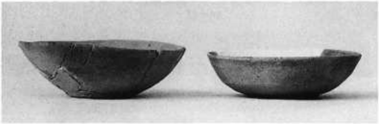
2 H5号住居址出土土器 No.2



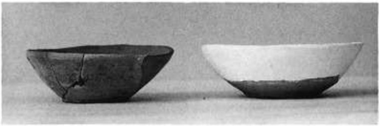
24－21　24－22



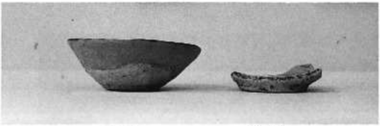
24－25　24－24



24－27　24－23



24－28　24－31



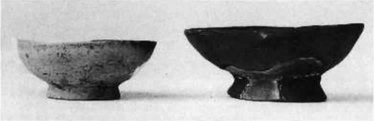
24－32　24－33

1　H5号住居址出土土器 No.3

25－44

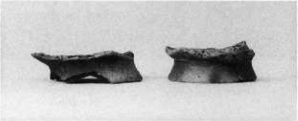
26－45

26－46　26－47

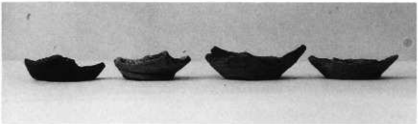


26－48　26－51

27－66



26－49　26－60



25－34　25－36　25－38　25－43

1　H5号住居址出土土器 No.4

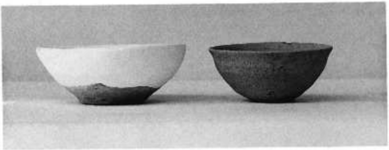
31－1

31－2　31－3

31－4

31－5

31－6



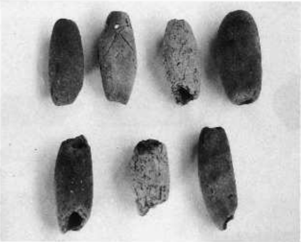
31－7

1　H6号住居址出土土器

34－1

2　H7号住居址出土土器

図版三十

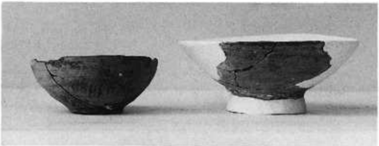


29－1～7

1　H5号住居址出土の土錘

38－1　38－3

38－2



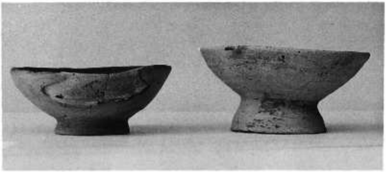
38－4　38－5

38－6

38－11

2　H8号住居址出土土器 No.1

38－7　38－8

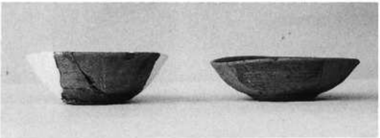


38－9　38－10

38－15

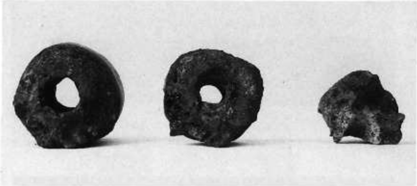
39－1

1　H8号住居址出土土器 No.2

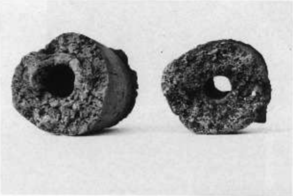


44－1　44－2

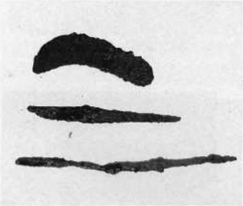
2　D3号土坑出土土器

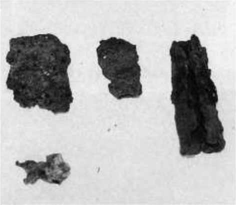


49－1　　49－2　　49－3



1 宮東遺跡出土の鞴羽口

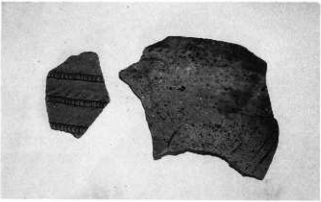




2 宮東遺跡出土の鉄器、鉄塊、錘、鉄鐸

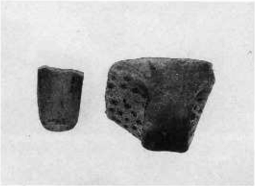
50－1

臼玉



51－4　51－3

52－4

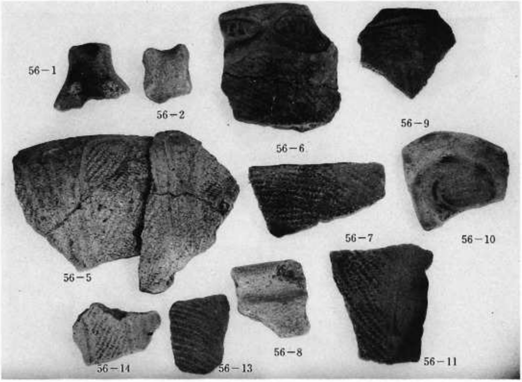


51－1　51－2

52－2　52－3　52－1

53－1～4

1　宮東遺跡グリッド・表採・住居址出土の土器・石器・装飾品



56－3

57－3

57－4

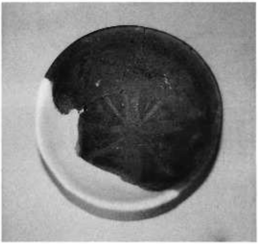
57－1

57－2

1　大工原遺跡D6号土壙出土遺物

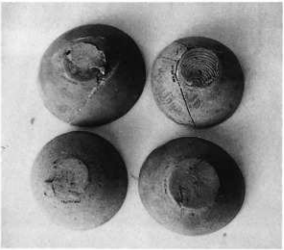
1 H8号住居址出土の台石

2 埦底部



3 暗文土器

(表面)



4 さまざまな底部糸切り痕

(裏面)

5 宮東遺跡既出の茶臼

地鎮祭

強粘土に悩まされる

田口小6年生がお手伝い

田口小学校先生方の見学会

田口小学校先生方の見学会

調査スナップ

発掘調査団

1 発掘調査スナップ

宮東・大工原遺跡

発行日　平成5年6月26日

編集者　宮東・大工原遺跡発掘調査団

発行者　臼田町教育委員会

印刷所　臼田活版株式会社